

四月十三日。(月曜)

「巴里句會」を書き、東京日日に發送。

讀賣新聞が來たので讀む。

渡佛日記一纏め、發行所へ。「馬來人も佛蘭西人も」を樺へ發送。
宅しづ子さん來る。

平尾貴四男、同じく夫人來訪。夫人は元の文化學院生徒戸澤好子さんである。平尾君も作曲の研究をして居るのであるが、十月には歸朝するとの事である。友次郎は七月、宅は九月、平尾は十月に歸朝することになる譯である。

夕暮、シャン・ド・マリス公園を友次郎、章子と散歩した。

四月十四日。(火曜)

昨日、讀賣新聞が來たので、雜詠句稿も必ず來ることと待つて居つたが遂に來なかつた。今日も一日待つたがまた來なかつた。十八日にはアントワープに行くのであるから、今日いよゝゝ來なければ出發間際に來ることになるので、雜詠をどこで選まうかと當惑した。

日本への端書二十四葉を書いた。

夕暮、シャン・ド・マリス公園散歩、雨がぼつ／＼落ちて來た。

今日も來る シヤンドマリスの木蓮花 章子

夜、主婦を誘うて活動にでも行つて見ようかとの話をして居つたが、折節主婦に來客があつたので止めた。

ロスアンゼルス橋吟社より「御出でを待つ」と云ふ電報が來た。

轉 び た る 子 供 に 母 や 木 蓮 花

四月十五日。(水曜)

楠窓君から詳細な返事が來て、アントワープで待つて居るとの事である。

朝シャン・ド・マリス公園散歩、友次郎に昨夜熟考したことを話した。それはこの三週間滞在したことによつて大體歐羅巴といふものは判つたやうな心持がするし、二三年逗留するといふのならば兎も角、この上二三ヶ月滞在したところでたいした相違もあるまいから、私達は當初の考へ通り五月十四日に英國を出るペンガリア號で亞米利加に渡つて歸國することにしよう、友次郎は

試験を終へてから歸朝したので差支ないから、十八日アントワープに行き、倫敦に渡るまで一緒に行つてくれさへすれば其後はどうでもするから、お前は安心して巴里へ歸つていゝといつた。雨が降つて來た。

二時過ぎ、かねて約束のあつたマテーズ氏が來た。マテーズ氏の事は中央公論に書いたが、この人はもと大戦後一時レナン地方の大統領であつたのが、獨逸の壓迫の下に佛國に逃れ、今は原稿生活をしてゐる人である。已に一度私を訪問したことがあり、私も一度たづね、今日は三度目の面會である。例の通り覺束ない佛語で友次郎と話し、友次郎は其を私に翻譯するのであるが、解らぬ事になると宿の主婦と獨逸語で話してそれを佛蘭西語で主婦が友次郎に傳へ、友次郎がまたそれを私に傳へると云つた面倒な手順を踏まなければならぬのである。然しこれで三度目の面會であるから互に打解けて隔意なく談笑することが出來た。

先づ先日面會した記事は今週中に佛文と英文で書き、英語の分は倫敦のデーリー・メール紙に送ると云ふことを話した。それから先日話した私の蓄音器を掛けてくれとの事で「俳句の朗讀」を掛けた。その感想はと聞くと、

「大變母音が多いのは聞いて居て愉快な感じを與へるのである。今まで日本語は子音の多いシュと云つた。」

そのレコードが御入用なら差し上げてよいと云つたら、大變に喜んで、御禮のため、十五年前に獨逸で詩の競争があつた、その時私が一番を取つたものがある、それを今度持つて來て差上げますと云つた。

それからだん／＼政治談になつて來て、歐羅巴人は日本に對して間違つた考へを持つて居る、現在の日本の立場を考へて見れば、今やつて居るより他に仕方がないのである、歐羅巴人が日本を輕蔑するのは外交的に見てするのである、内容は全然判らないのである、なぞとも云つた。また私の三人の子供は皆佛蘭西に居り、四人の甥は獨逸に居る。だから戦争が始つたら子供同志が戦ふやうになるかも知れないとも云つたりした。また佛蘭西では、どんな處でも戀愛と云ふものを重要視して居る、日本はどうかとの問ひであつたので、私は重要視して居ないと答へたら、戀愛を第二位にして居る處は立派な國民であると云つた。その他なほいろ／＼の話があつたが、茲には略することにする。大分長く話して歸つて行つた。

松本覺人君に手紙、友次郎に代筆させた。八田一朗君に友次郎から手紙を出させた。横光利一

君から先日のムードン吟行に不参の挨拶状が来たので其返事を認めた。

夜、友次郎學校を休み、獨逸、英國へ案内しよう決心したことを話した。試験前で氣の毒ではあるがさうして貰へば結構であると云つて、二人で額を集めて旅程表を作つた。

四月十六日。(木曜)

朝十時一寸過ぎ、定刻より少し遅れて、シヤンゼリゼー通りのマリニアン座に活動寫眞の試寫を見に行つた。これは豫てマテーズ氏から案内状が来て居つたのであつて、氏は映畫會社にも關係を持つて居るのである。映畫はステファン・ツワイグの「恐れ」を脚色した「一夜の迷ひ」と云ふので、主役はギャビー・モルレー夫人であつた。

こゝは新しい建物であるさうで、待合室になつて居る圓室のホールが目立つて美しかった。それに、よく斯う云ふ處にあることださうだが、黒ん坊が燕尾服を着けて案内役に立つて居たのが四邊の色彩の反映になつて面白かつた。筋は月並の詰まらぬことのやうに思へたが、隣に坐つて居る婆さんが、主役が咽び泣くところになると徐ろにハンケチを取出して涙を拭いて居るのは、日本も西洋も同じであることが可笑しく思はれた。客はぎつしりと一杯詰つて居つて、濟んで表

に出た時分に、尙しばらく小屋の前で人の渦まきが漂うて居た。

最前から、マテーズ氏の姿が見えないと思つたが、この時、その渦まきの中から現れて、映寫が始まる前私達の爲に親しく席に頑張つて椅子を取つて置いたのであるが、私達が来るのが遅かつたので仕方がなしに人に譲つた、坐れる椅子があつたか、などと聞いた。私達はマテーズ氏に謝する爲一寸カフェーにでも行かうと言つたら、此近所のカフェーに姪と待合はすことになつてゐる、小さいが靜かなカフェーだ、と自ら立つてそのカフェーに案内した。成程そのカフェーは小さかつたが、下は客が混んで居るので二階に上つて見ると二三の客がある許りであつた。靴の中から紙を取り出した。その紙には、昨日約束した自分の詩が書いてあつて、それを私に呉れた。獨逸へ行くことに就いて、旅行會社に紹介して置いたが、獨逸へ行つたら私の紹介と云ふことは云はぬ方が宜しいと注意した。

一旦宿に歸つて、二時過ぎから三菱へ行つた。上野君は不在、若林君に持ち金の圓を磅、フラに兩替してもらつた。

オペラ街の獨逸旅行會社に行き、さらにスクリープ街のサトロバ會社に行つた。マテーズ氏の紹介があつた爲か、店主が自分の部屋に引見して懇ろに種々の事を教へて呉れた。

III (An mus.)
Männer
 müssen hart sein zu
 sich selbst,
 Weichheit ist nur für die
 Frauen,
 Freundschaft ist des Lebens
 wahres Glück
 Liebe? Ihr ist selten
 ganz zu Frauen...

J. F. Matthes

(二 其)

3 Kleine Gedichte
 von Joseph Friedrich Matthes
 geschrieben für
 Meister Kioshi Takakama.

I
Schmerz. (An mich.)
 Als ich zum Volke sprach,
 Sprach ich zu den Kindern,
 Als ich zu den Freunden sprach,
 Konnt' ich sie nicht finden.
 Als ich in mich selbst sprach,
 Konnt' ich's überwinden.

16.
 April
 1936
 Paris.

II (An Kioshi Takakama)
Eltern ohne Kinder

sind sie dürre Bäume,
 sind sie tote Kälber ohne
 Träume -
 Deine Kinder sind sie hold' Blüth,
 die aus Erde und aus Sonne glühen,
 und sie werden gute Früchte tragen
 In des Lebens schicksalreichen
 Tagen.

(一其) のもたれ吳に私てい書に特を詩の作自氏ヌーテマ



てに下のスクンイフス

歸りに近處のプランタン百貨店に立寄つてテーブル掛を買つた。
夕食後荷物を片づけて、アントワープの箱根丸に托する荷物と、獨逸の旅に携へる荷物とを仕
分けした。友次郎の書物も鞆一個に詰めて、是も箱根丸に托することにした。
夜更けて寢。

四月十七日。(金曜)

青空が處々に見えて連日の陰鬱な天氣がいゝ方に向つたらしい。
待ち兼ねた雜詠原稿が來た。玉藻も來た。早速雜詠を見、また玉藻を読んだ。
友次郎が昨日のサトロバ會社に行つて、巴里を出てから獨逸の國內を一週し、倫敦のリヴァー
プール停車場に著くまでの切符を買つて歸つた。

今夜日本人會で私達の歓迎晚餐會がある筈で、佐藤醇造君が七時までに迎へに來るとの電話が
掛つて居たが、丁度七時に横光君も同乗して迎ひに來た。

晚餐會には左の人々が列席した。

高嶋唯之、田中末雄、上野義雄、小野敏郎、藤澤久、李家勝二、和田新太郎、吉村侃、渡邊

文三、濱中義忠、横山正博、佐藤醇造、立花章、林貞助、柴官六、佐々木利吉郎、加藤文一、横川友兵、荒瀬順治、東新、瀬崎晴天、石井進、城戸又一、椎名其二。

食事がすんでから、別室で講演をやることになつた。横光君が先づ近代文學の傾向並に自分が渡佛した感想等を述べて、次に私は俳句の話をした。それから、殆ど全部の人が俳句を作ることになつた。左の如き句があつた。

壁崩る巴里の窓の子猫かな	柴虚風
街角の戦話や春寒し	渡邊文三
土黒く草青く萌え水ほとり	佐々木利吉郎
パピロンの古城めぐりて春の水	城戸又一
たんぼゝや故郷を思ふ道のほど	萩須
日の上によるめき出でし子猫かな	林貞助
春寒や向ふの家並暖く	宅孝二
春の水たゆたひながら流れ行く	高野
春寒く子猫すりよる夕かな	椎名其二

コンコルド女神にかゝる春の水	横光利一
春寒に靴音高しコンコルド	横山正博
釣棹の並ぶセイヌヤ水ぬるむ	濱中義忠
冷えくくと木立の若葉雨に濡れ	東新
旅の子は蒲公英の花にふりかへり	久須
花瓣のゆらりと春の水	佐藤醇造
蒲公英の一輪咲いて蝶の來る	石井進
アンヂェリエス蒲公英なども咲きいでし	橘
公園のベンチも淋し春寒し	章子
猫の子の花をくはへる今朝樂し	友次郎
主婦の頬に子猫の爪の痕のあり	虚子
たんぼゝの咲けるほとりの杉大樹	同

この中に、前に名前を掲げた以外の人があるのは、講演會のみに出席した人があつたからである。これが日本での會合であつて見れば、晚餐會が済み講演會が済んだ後は直ぐ立つて歸る人が

半ば以上であるのが普通であらう。それが大概止つて俳句を作つて見ると云ふのは、外國に居て故郷を懐しむ心地が深いのに基くものであらうかと考へられた。然しこの中には、ホトトギスに古く投句をして居つた人も二三はあるのであつた。それ等の人はもとより、今日始めて俳句の話を知り、初めて作つて見る人々であつても、滿更俳句にならぬものを作る人は無いやうに見受けられた。私がかね／＼云ふ通り、日本人の多くは俳人であると云ふことは間違の無いことであると考へられた。それと同時に、春夏秋冬の現象を諷詠し故國を懐しむ情は千萬里の外の遊子の胸に如何に濃いものがあるかと云ふ事も考へられた。此中で東新君はハイデルベルヒから丁度二三日前巴里に遊びに來たのであつた。

ベルギー、アントワープ行

四月十八日。(土曜)

朝六時十分に床を出たが、荷物の餘りを片づけたり朝飯を食つたりして、停車場に來て見ると九時十五分の急行に間に合はないで、九時二十三分のブラッセルで乗り換へなければならぬ汽車に乗つた。乗つて見ると客が少なくて、餘り急がぬ旅に却つてよかつたと思はれた。おまけに快晴で窓外の景色もよく、此間頃の憂鬱な天氣を宿に引籠り勝であつたのと引き換へて氣も延び延びとした。

シャンテーの森を過ぎた。此邊は巴里人士が、よくゴルフをやりに來る處であるとの事であつた。

牧場が澤山あつて、放牧の羊が寝そべつて居たり歩いて居たりするのも長閑な景色であつた。樹々の木の芽が盛に吹き出して居て、杏の花も盛りであつた。丁度此邊の今頃は、先月の末に見た南佛の景色と同じ位であつた。

コンピエンと云ふ驛に來た。世界大戰の時分に、こゝまで獨逸に占領せられたのであるとの事である。

溝川のやうな小さい川を小蒸汽が靜かに通つて居るのも珍しかつた。

蒲公英の花が澤山あつて虎杖があるのも目に著いた。

或る驛で汽車が逆行し始めたと思つたら、これが白耳義の國境であつた。パスポートを調べに來たり、税關の官吏が來て鞆を一々開けさせて調べたりした。白耳義に入つても、景色も家も人も餘り違つた心持がしなかつた。唯石炭を積み重ねたピラミツドのやうな、自然の山かと思はれる程大きい山々が所々にあるのは違つた風景であつた。この石炭の山の外は一望坦々たる平野であつた。

石 炭 の 山 の 麓 の 春 の 驛

和蘭に澤山あると云ふ風車が白耳義にもぼつ／＼見え出して來た。

汽車はブラツセルに著いた。荷物をポーターに持たせたのであるが、友次郎の書物を詰めた鞆は頗る重いのを三人のポーターが互に譲り合つて持ち兼ねて居るのが可笑しかつた。同じ驛の中で乗り換ゆるのではなくて、別の停車場に行くので、荷物を一臺に、私達も自動車に乗つてブラツセルの町を通過した。多分目抜の町であらうと思はれたが、巴里から來た目には多少田舎びて見えた。今度來た停車場は頗る立派な建物であつて、其所に停つて居る電車も今まで見た事のない新式なものであつた。二十分許りでアントワープに著いた。

取敢へず楠窓君から紹介して貰つた松岡商店に行つた。主人は留守であつたが其弟と云ふのが

居り、細君（洋人）も出て來ていろ／＼款待して呉れた。弟の話に、兄がゐないと税關が面倒であるから荷物は此まゝ宅に置いて行かると方がよからうとの事であつたので、其通りにし、弟と共に四人が自動車に乗つて波止場の方に行つた。

そこにはお馴染の箱根丸が繋つて居り、赤い條の入つた煙突や、箱根丸と云ふ文字の見えた時は何となく愉快であつた。楠窓君等が喜び迎へて呉れ、女ボーイの八木さんも、章子を喜んで迎へた。又そこへ松岡君もやつて來た。暫く話して居る中に松岡君が荷物を船に運んで呉れた。それから明夜、玉木領事の招宴がある由を聞いた。晩食後三人が代りあつて船の床屋で理髪をした。

松岡君の自動車に乗せられて楠窓君と私達三人は港を一巡し、董バー、日本バー、五月バー、大正バー等の前を過ぎ、TOKIOと云ふネオンの點いた映畫館の前も通つた。是等のバーや映畫館は白耳義人がやつてゐるのであつて、店にゐる女給も皆白耳義女であつて、それは郵船會社の船が常に此地に十日餘り碇泊し、倫敦からは客を積まないで唯荷物の揚げ卸し、石炭や食料品の積入れ等をする許りであるし、又最後の港に來て幾分休養する意味もあるので、土地の氣風と相俟つて自然に是等の日本人相手のカフェーやバーが出來たものと見えて、郵船會社の勢力の現れであるやうに見受けられた。尤もこのアントワープは倫敦と獨逸の漢堡と共に世界の三大河港

と稱せられるものであつて、英、獨、蘭、佛、その他スカンデナヴィア等の諸海運國の船が頻繁に來往して居る處であるさうだが、郵船會社の船は客船なり貨物船なりが殆ど絶えず繋つて居つて、各國をリードして居る形になつて居るので、従つて日本名のカフェーやバーが澤山出來て居るのであつた。大體それ等の模様を見てから、松岡の店に立寄つて茶菓の饗應になり、それからまた自動車に導かれて、今度は畑中と云ふ家へ連れて行かれた。この畑中の先代は元相撲取であつて、歐洲に二三十年前來てからは、よく歐洲の各地で寄席に出る、手品や奇術を演ずる日本の旅藝人の元締をして居つた男であつたが、數年前亡くなつて、今はお花と云ふ混血の娘が、そこに使つて居た日本人のコックと一緒になつて、下宿、料理屋、バー等の兼業をして居るのである。そのバーに這入つてビールや珈琲などを飲んだ。そこには、アルゼリアの黒人と白耳義人の混血の女や、英吉利生れと云ふ女や、白耳義の女などに立ち混つて、そのお花さんと云ふのも客を相手に葡萄酒か何かを飲んで居た。その黒人の血の混つて居る女や英吉利生れの女やは蓄音器の調子に合せて私達の爲に東京音頭を踊つたり、またダンスなどもしたりした。

そこへ景氣の好い聲がして、二三人の日本人の船員がドヤ／＼と這入つて來て、いきなり兩手を擴げて踊り出し、先きの女も席を離れて一緒にダンスを始めた。

私達はそこを出て、また松岡君の自動車に送られて船に歸つた。

十時寝に就いた。

四月十九日。(日曜)

昨夜ポイに風呂を頼んで置いたので、六時過ぎに風呂が出來たと云つて起した。友次郎も續いて入つた。二人共再び床に入つて寝た。

十時頃朝飯。

それから、楠窓君の部屋に集つていろいろ相談した。楠窓君も友次郎も、私等單獨で米國經由で歸ることに斷然反對し、米國は又改めて行くことにしてはどうかといふことになつた。さうなれば箱根丸で歸ることにするのが一番便宜であると、遂に其事に一決した。月末まで雜誌發送を見合はせと云ふ電報を即座に、詳しい電報並に二三の電報を楠窓君に托して、箱根丸が安土府を出てから無電で打つて貰ふ事にした。それから、駒井權之助君に手紙を書いて、來月五日倫敦のペン俱樂部の會合に出席することは出來なくなつたと云ふ事を通知した。それは、是から一週間ばかり獨逸を廻つて倫敦に渡り、二三日倫敦に滞在して俳句會に出席。來月始め巴里に歸つて、

それから瑞西、伊太利を駈足で見物し、八日馬耳塞で箱根丸に乗ると云ふ事に一決したからであつた。

二時に松岡夫婦が來船した。松岡夫人が章子に見事なライラックやチューリップの花束を呉れた。

それから、松岡君の自動車二臺に分乗して、楠窓君、町田一等機關士、松岡夫婦、私達三人は約六里の距離にあるサンフリート村にヒヤシンス、チューリップ等の花畑を見に行つた。並木の續いて居る坦々たる一筋道を可なりスピードを出して疾走するのであつた。或る處で其道が二つに分れて居るその右手の道を取れば和蘭のロッテルダムに行くのであるさうだが、それを左に取つて行くのであつた。私達の車に續く車も二三あり、また、行き會ふ車も段々と數が殖えて來た。それは皆花畑を見に往來する車らしかつた。其車に乗つて居る人達は皆好奇の眼を瞠つて、摺れ違ふ私達の車を眺めるのであつた。村媪村嬢達も門口に立つて珍しさうに私達の車を送迎して居るのであつた。

野中に假小屋が建つて、澤山の自動車が其前の廣場に止つて居る處に來た。ヒヤシンスやチューリップの花畑が其邊一面に擴がつて居た。私達も自動車を其廣場の中に乗り入れて、切符を買

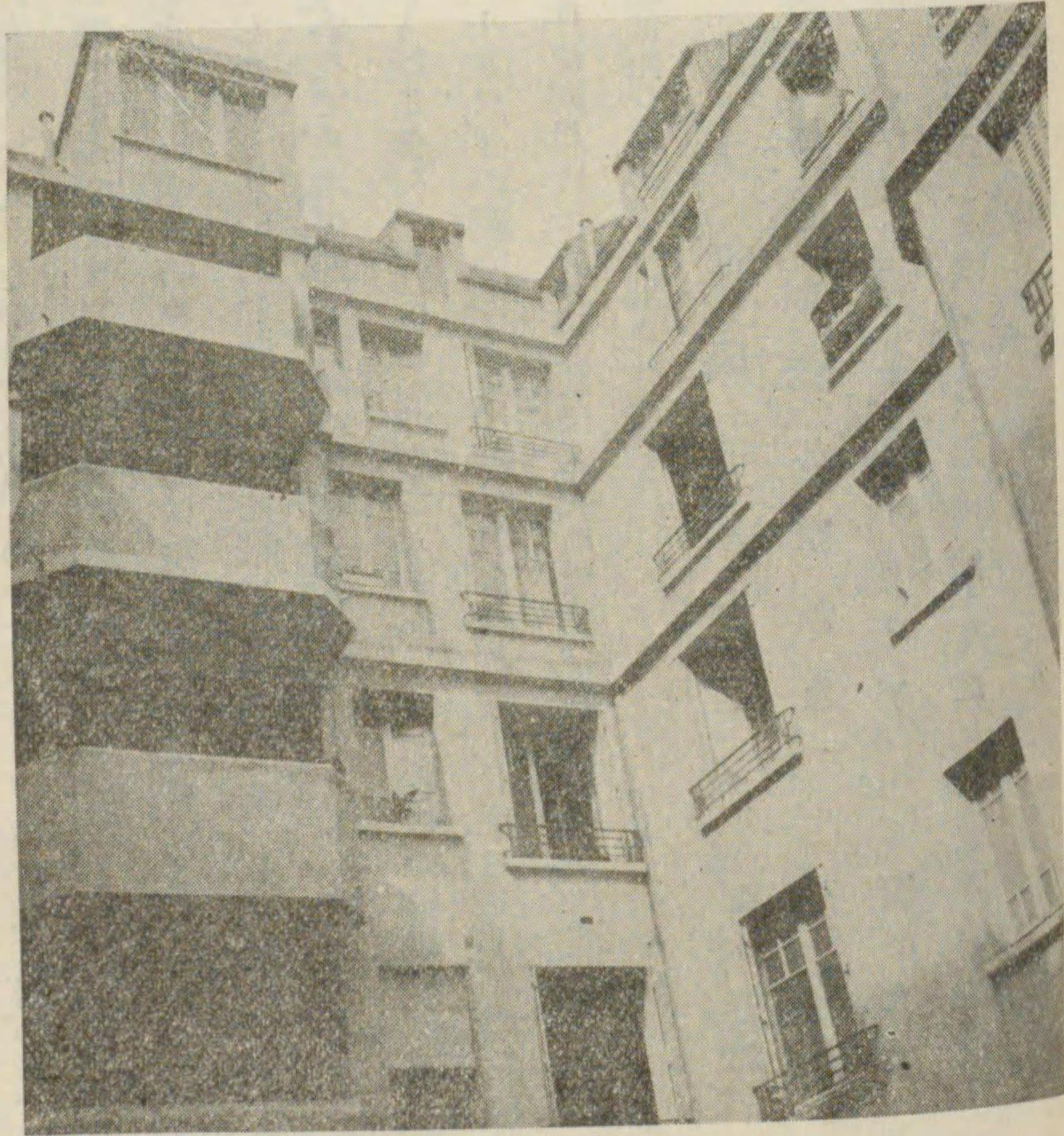
つて中に入つた。ぞろ／＼と人の通つて行く後に蹤いて花畑の中に出た。花畑の中にはラヂオの車が据ゑてあつて、盛に唄をうたつてゐた。花はまだ少し早い方ではあつたけれども、赤や紫や黄やさまざまの色が毛氈のやうに遠く續いて居て美しかつた。和蘭のヘーグの近くには、ハレムと云つて斯う云ふ花畑の際涯もなく續いて居るのがあるさうであるが、こゝでもそれに倣つて今年から此花畑を作り始めたのであるさうな。

畑の中をあちこちして居る中に、人々は皆花畑を見るよりも寧ろ私の風態を不思議さうに見てをるのに氣が付いた。殊に私のはいてをる草履を一心に見つめつゝ、ぞろ／＼と蹤いて來て居るのに氣が付いた。

章子は花畑を寫眞に撮つた。風が寒いので假小屋の休憩所に這入つて、花畑の景色を見ながらビールを飲んだ。他の見物人も此處に休んで、ビールやサンドキツチを注文して休憩所の内は大分賑はつて居た。

ベルギーは山なき國やチューリップ
ヒヤシンスチューリップ人過ぎて行く
ヒヤシンスラヂオは人に語り居り

トメトメアアるた見りよ室の眞次友里巴
窓の所餘にぐす雨春の外窓



給仕女も胸に挿したるチュールリッ
世話人も客もかざせしチュールリッ

歸路は一路アントワープを目ざして疾走したが、眞青に打晴れた底深い大空に西日を受けた白
い雲の大きな塊りがところ／＼にうづくまつて居るさまが莊嚴で美しかった。

寶石の大地塊のごとく春の雲

春の雲の大地塊の下小村あり

牧牛の廣野の果ての春の雲

並木の街道に沿うた小村に來ると田舎娘が嬉々として夕暮の道を歩いてをるのが目についた。

田舎娘手つないで來る木の芽かな

石楠花の籬の家や町外れ

一旦船に歸つて、栗田船長、岡崎事務長、小島一等運轉士、それに楠窓君、私等三人が松岡の
自動車二臺に便乗して、玉木領事邸に赴いた。行つて見ると、玉木領事夫妻、圓尾領事館員夫妻
等が待ち受けて居て御馳走になつた。その料理は前に記した畑中の料理部から仕出した和食の御
馳走であつた。飯を食ひながら話して居る中に、玉木夫人の父君は村上鬼城君の俳友であつたさ

うで、父君は既に亡くなられたが、夫人がその膝下にある時分はホトトギスを見て居つて、俳句にも親しみを持つて居るとの事であつた。また、この家に居る料理人は瀧山之石と云ふ青木月斗門下の俳人であつて、一度私を東京の宅に訪ねた事もあつたさうで、元は裕福に暮した人で、巴里では畫家の世話など好んでした人であつたのだが、十五銀行の破産に伴つて没落し、今は玉木氏の下にコツクとなつてどうかして日本に歸るだけの旅費を蓄めたいと、ひたすら其日を待つて居るとの事であつた。だん／＼話が俳句の方に及んで來て、それでは今夜皆で俳句會を催さうと云ふ事になつた。春灯、チューリップの題で作つた。玉木領事が名前を附けて呉れと云つたので早速春灯と云ふ號をつけた。序に圓尾氏に九花、栗田船長に虚船、岡崎事務長に波哉、小島一等運轉士に十字と云ふ名前を附けた。

春灯の輝く下に虚子と在り 玉木春灯
春灯の客の嬉しき我が家かな 玉木ますみ
風車めぐりて咲くやチューリップ 圓尾九花
チューリップ匂ひてまとゐたけなはに 圓尾きみ子
春灯の異國の室につどひけり 栗田虚船

チューリップハレムの春はまだ淺く 岡崎波哉
此國の花見ヒヤシンスチューリップ 楠窓
チューリップ皆一樣に風に揺れ 章子
チューリップ墨する主婦に止まず揺れ 友次郎
春灯鏡の中 春灯 虚子
之石君に遂に會ふ機會が無くて歸つた事が心残りであつた。
十一時半頃歸船。

ラインに沿うてハイデルベルヒを訪ふ

四月二十日。(月曜)

私達は静かな船室にぐつすり朝寝して、午前中は休養をした。

午後二時十分、松岡君の自動車に便乗して、雨の降つて居る中を楠窓君、八木女も同乗、鞆三個を携へた許りで私達は昨日の電車の著いた停車場に赴いた。鞆三個の他の荷物はすつかり船に托してしまつたので氣輕な氣持で此旅をするのである。そこで楠窓、八木女、松岡の諸君に別離を敘して電車に乗り、二十分餘りでブラツセルの停車場に著、ホームを變へて三時四十分發の汽車を待つ。

汽車が來たので乗つた。私達の部屋には獨逸人が一人乗つた。

國境近くになつて山があり、汽車が上りになつてトンネルを通過した。白耳義、和蘭は所謂ネーデルラントで土地が低く平野つゞきであるが、それでも國境に來ると山嶽があるのである。

リエージュの町を過ぎた。

國境を越えると忽ちナチスの旗が山間の家にも翻つて居るのを見た。アーチエンと云ふ驛であつたか、そこで旅券の検査、税關の検査、且めいゝが携へて居る外國の貨幣の在り高を報告せなければならぬのであるが、旅券検査に手間取つて少々氣を揉んだ。同室の獨逸人が口を利いて呉れたりした。

梨の花が澤山に咲いて居た。

牧草に蔽はれて居る山々が美しく眺められた。

牧 草 の 包 み て 青 し 春 の 山

ペプテテルと云ふ停留場に著いた。白耳義の温泉場スパはこゝから二十分で達すると云ふ事であつた。

間もなくケルンに著いた。ケルンと云ふのは、ライン河に沿うた古い町であるさうで、大きな都會である。停車場を出ると直ぐ目の前に、ドームと云ふ素敵に大きな寺院が聳え立つて居る。ポーターに荷物を持たせて、其寺院の裏のドーム旅館に投じた。こゝは關圭草君が去年の秋泊つた處であつて、其節友次郎も圭草君に誘はれて此地に同遊したので、泊つた事がある旅宿であつた。

その宿に這入りかけると、向うから出て來る三人の日本人がある。見ると巴里で別れた箱根丸の客であつた、寺井、篠原、高田の諸君であつた。諸君は昨夜こゝに一泊して、寺井君は尙今夜一泊、篠原、高田兩君は今夜發つて他に行くので、これから一人の獨逸人に誘はれて飯を食ひに行く處だと云つた。見るとそこに一人の獨逸人が立つて居た。奇遇を喜びながらも匆々に別れて私達は一つの部屋に導かれた。その部屋は圭草君の泊つた部屋の隣であるさうで、そこに寢臺二

個は既に据ゑ付けてあつたが、別に一個を取り寄せて据ゑさせる事にした。

部屋に料理を取り寄せて晩飯を済ました。下に太鼓の音が聞えて来たのは、かねぐゝ聞いて居つたナチスの行列であらうと思つて、窓から見下ろすと果してさうであつた。其行列が通る處では電車も自動車も立往生をして居て、樂隊が先きに立つて行進すると其後からナチスの行列は歩調を揃へ軍歌を歌つて行進するのであつた。

十時過ぎ就寝。

四月二十一日。(火曜)

ゆつくり寝る。

春 眠 の ケ ル ン の 寺 の 鐘 が 鳴 る

朝落ちついた氣分のまゝに宿からの展望を書いて見る。

宿の前の廣場には楕圓形に青い芝が敷かれてあつて、其周圍には鐵柵が圍らしてある。その青い芝の中にはシンメトリカルに花が植はつて居つて、一寸大きな毛氈を見るやうであつた。その左手にはドームの寺院が脊中を見せて聳え立つて居て、半ば以上は隠れて見えなかつた。電車の

通つて居る町はその寺院の向う側にあつて、ライン河の流れは、立ち並んで居る家の間に眞近く日に光つて見えた。

寫眞機が一臺、前の鐵柵の傍に据ゑてあつて、一人の男がその邊をブラ／＼して居るが、誰も寫眞に映らうと云ふ人は無いらしなかつた。

遊覽自動車が二三臺やつて来てその邊に停つた。赤いのもあり青いのもあるが、赤い方は遅く来て早くどこかへ行つてしまつた。何れの自動車も客は乗せて居ないが、是からどこかへ行つて約束の客を乗せるものと見える。

一人の老人の腰のかゞんで居るのが杖をつきながら通つた。

自轉車のハンドルの處に鞆をぶら下げた、勤め人らしい人が通つた。

同じく自轉車に籠を著けた、青い上衣を著けた御用聞らしいのが通つた。

同じく自轉車に乗つた、白い上衣を著て居る、ボーイらしいものも通つた。

子供を乗せた乳母車を押して行く夫婦が通つた。

二臺貨物車を連結して居る自動車が通つた。

郵便集配人が二人、自轉車で話しながら通つた。

女の自轉車に乗つたのが澤山通つた。

籠に草花を入れた花賣女が其邊をぶらついて居た。

巴里では餘り見なかつたやうに思つたが、獨逸に來ると馬車が澤山通るのが目に付いた。殊に荷馬車が、馬を一頭附けたのもあり二頭附けたのもあるが、それ等が煉瓦を敷きつめた道を憂々と音を響かせて過ぎて行くのが目についた。

ナチスの旗が前の家の軒から吊り下つて居た。その他ナチスの旗の出たところもあり、出ないところもあつた。

一人の子供がこなたから往來に現れたが、自動車の來るのを見て、その方に向つて鐵砲を打つ眞似をして、隙を見て懸命に走り、向うの人道に駆け込み、また懸命に走つて自動車を横切り、人混みに隠れてしまつた。

天氣が變つて雨が降り出して來た。寺井君の部屋をノックして見たが答が無かつたので下に降りて置手紙をして宿を發つた。私達はポーターに荷物を持たせて先へやり、暫くドームの寺に入つて見た。中は靜寂な薄暗い空洞であつて、ふと見ると一人の老翁が一輪の牡丹が活けてある耶蘇の像の前に祈禱をして居るのが目に止つた。

そこを出て、人が立止つて見て居る中で章子と友次郎が寫眞を撮つた。

十二時十一分發の汽車に乗つた。三人の獨逸人が既に乗つてゐる部屋であつた。

汽車よりの展望。

汽車はライン河に沿うて遡つて行くのであるが、梨、林檎等が澤山あつて、花は今を盛りと咲いて居た。ラインの岸には村が澤山あつて、一つの村を漸く離れて人家が絶えたかと思ふと梨や林檎の花畑が続いてまた人家がぼつ／＼見えて來てやがて村があると云ふ有様であつた。

我が汽車はラインの北岸に沿つて居るのであるが、向う側にも矢張り煙を吐いた汽車が同じ方向に走つて居るのも面白かつた。

ライン河には、赤く濁つた水が岸の青草を浸して氾濫して居り、中洲の柳の幹をも浸して居つた。後で聞いた話であるが、二三日前大變な大雪であつて、此近處の山で遭難した學生があつたと云ふ事であつた。その爲の出水であらう。又まだらに雪の残つて居る山が眞近く見えたのも其爲であらう。

春 出 水 中 洲 の 柳 ひ た り た る
春 草 を ひ た し て 緒 き 出 水 か な

雪 残る 山 そこ あり 春 出水
ライ ン 河 へ そ ぐ 小 川 も 春 出 水

たしかコブレンツであつたかと思ふ、河中に突き出て居る大きな銅像があつて、その銅像の下に春の出水が激して居るのが壯觀であつた。

舟 橋 を 渡 れ ば 梨 花 の コ ブ レ ン ツ
兩 岸 の 梨 花 に ラ イ ン の 渡 し 舟

ニイデル・ラインスタインといふ驛を過ぎた。

向ひ側の山の上から水の岸まで梨の花が咲き連つて居る景色は美しかつた。また或村に大變古い家だと思はるゝのが現存して居て、水邊にそれ等の家が連つて居るのは感じがよかつた。

ラインに有名な古城は、送迎に追ないと云ふのは仰山であるが、そんな感じがする程澤山あつた。

古 城 あり 青 葉 の 中 に 残 る 雪
古 城 に ナ チ ス の 旗 や 春 の 風
雪 残 る 山 の 麓 の 梨 の 花

梨 花 村 の 直 ぐ 上 に あり 雪 の 山

葡萄畑が澤山あつたが、まだ葡萄の芽は出て居なかつた。茶種が山の畑に咲いて居るのが目に止つた。

ルーデシヤイムと云ふ停車場に始めて停つた。そこにある古城に硝子戸を嵌めて、そこに人が住つて居るのが目に止つた。是等の古城は、ライン地方には昔豪族が澤山住んで居て、それ等の城塞であつたのださうである。こゝからヴィスバーデンと云ふ温泉場は遠くないと云ふことであつた。

マインツと云ふ町に著いた。そこから汽車は後歸りをして、暫くライン河に離れ、平野の續いて居る處に出た。麥畑や葡萄畑があつて、ポプラが遠く連つて居た。尾張の平野位の廣さがあらうか。

ウォルムスと云ふ處に著いた。

今まで通つて來たラインの流域は文化の早く開けた地方であるさうで、人口も稠密であると云ふ事である。

またライン河に出て、河を挟んでルドウイック・シャーヘーと云ふ町と、マンハイムと云ふ町



てに森のンドーム

とがあつた。そのマンハイムを過ぎて間もなくハイデルベルヒに著いた。
ハイデルベルヒは高野素十君が二年間學窓に居つた處であつて、今度巴里に来る序に、若し獨逸に行つたならばハイデルベルヒは是非訪ねて見ないかとの事であり、素十君の友人の常盤斌君が態々此地のラッドブルフ博士に紹介状をも書いて呉れたので、此旅の序にこゝに立寄る事にしたのである。

ハイデルベルヒに行つたなら、ホテルは山の上のホテルにする方がよいと云ふ事を巴里で佐藤醇造君が話して居たので、停車場を出ると丁度そこに其宿の自動車が出来て居たのでそれに乗つた。停車場前に別にホテルもあり、料理屋もあり、暫く行くと道の中央に竝木があつて、其竝木の中に銅像が立つて居て、如何にも大學町らしい感じがしたのであるが、だん／＼道は上りになつて、迂曲して進んで行くと一つの頽廢した大きな古城があつて、その裏を通つてシュロッセ・ホテルと云ふのに著いた。

通された部屋にはバルコニーがあつて、そこに出て見ると先刻の古城が谷をへだて、目の前に聳え立つて居た。尙ハイデルベルヒの町は一望の中にあつて、ネッカ河が其中を流れて居つた。尤も町は多くは河の此方にあつて、對岸の山沿ひにはぼつ／＼人家があるに過ぎなかつた。ネッ

カ河の流れ去つて居る彼方には、夕暮の景色の模糊たる中に遠く平野が続いて居た。このハイデルベルヒと云ふ町は平野が漸く山に狭められた其溪間の静かな一小都市であつた。後に聞くところによると、此處の大學は六百年とかの古い歴史を持つて居る、獨逸でも最も古い大學である云ふ事であつた。素十君が靜かに此處に二年の間學んだ事を思ふと、この山川にも舊知の感があつて懐しかつた。

木々の芽や素十住みけん家はどこ
春山の鴉古城に飛びわたる
春鴉二三羽飛べる古城かな
見えてをる橋五つあり春の川

常盤君から貰つて居る紹介状を持たせて、使の男をラッドブルフ博士の許へ遣り、今夜か明朝午前中に御目にかゝりたいが、いつ伺つたらよいかと云ふ事を友次郎に佛文で手紙を書かせて持たせてやつた。

此間から暇な折々には選んでをつた雜詠を、もう日が切迫してゐるので、また取り出して選んだ。

其中使が歸つて、博士は旅行中で留守であつて、その子息が八時十五分頃訪ねて來るとの事であつた。

ネッカ河を見下ろす食堂で晩飯を食べた。學者らしい一人の女が獨り別の食卓で食事をして居た。老いたる母を連れた男の人が靜かに遠く離れた食卓に著いた。是も學者らしい一團體の會食があるらしく、其幹事らしい人が食堂に現れてボーイに話すと、ボーイは俄に食卓を繼ぎ足したり、椅子を運んだりして用意を始めて居た。廳て二人三人と現れ來る人は皆物靜かに其食卓に著いた。

食事が終つて廊下に出て、そこに土産物が並べてある窓を覗き込んで居ると、一人のボーイが來て硝子戸をあけてくれた。其中にあつたナイフ一個を記念の爲に買った。

部屋に歸つて待つて居ると、ラッドブルフ博士の息がドアを開けてやつて來た。脊は高いが見ると未だ年の若い青年であつた。アウゼルムと云ふ名前ださうで十七歳になるとの事であつた。其青年も英語は達者でなく、友次郎も英語は用を辨する程度のもので、佛蘭西語はどうかと友次郎が云つたらば、アウゼルム君は微笑を浮かべながら首を振つた。そこで兩人ともふつゝかな英語で話すので充分に話が運ばなかつた。博士は英國のオックスフォードに行つて居るとの事で、其

Auschu Rabbit

名譽の君フルブドツラ・ムルゼウア

番地を紙に書いて呉れた。またこのアウゼルム君は芭蕉の句を翻譯したことがあると云ふことを豫て素十君から聞いて居つたので、其事を話すと、翻譯をした事はあるが俳句の事は充分に解つてないと言つた。そこに出て居つたホトトギスの四月號を記念の爲にと與へた。アウゼルム君も原稿紙に署名して呉れた。恐らく佛蘭西語で書いた友次郎の手紙は充分に見ずに、私は獨逸語が話せると考へてこゝに來たものであらう。何だか勝手が違つたやうな様子であつたのが氣の毒であつた。

それから素十君の居た下宿はどこかと聞いたが分らなかつた。間もなく此青年は辭して歸つた。

ラッドブルフ博士は元司法大臣をした事のある人で、人格の高い學者であるといふこと、今のナチスに反對で、屢々ナチスの旗を掲げると云ふ勸告があるのに頑として掲げないで居ると云ふ事を素十君が話して居た。博士が居さへすれば佛蘭西語も

通するのであつたらうにと思はれて残念であつた。殊に私は其後倫敦に行つた時分にオックスフォードを通つたのであつたが、他に約束があつて歸路を急いで、遂に博士を訪ふ暇がなかつた事を愈々残念に思ふ。

雑詠を少し見た。

この部屋には寢臺が二つほかないので、私は別室に寢た。其所はネッカ河を見下ろす部屋であつた。

四月二十二日。(水曜)

私の部屋の窓から河向ひを見渡すと、屋根の赤い家があるのは比較的新しい建築のやうであり古風な複雑の建築の家も其中にぼつ／＼混つてをつた。鴉がしきりに山から川をかけて飛んで居た。直ぐ窓の下の林にはさまざまの小鳥の轉つて居るのが聞えた。

轉の窓の大きなホテルかな

友次郎等の室に歸つて、バルコニーに立つて展望を恣にして、寫眞を撮つたりした。

春曉の古城に對しホテルかな

春 雨 に 濡 れ て は 乾 く 古 城 かな

伯林三菱の藤室益三君と谷口知平君とに電報を打つた。藤室君は、此前巴里の三菱で偶然會ひ其細君は立子の同窓生であり、伯林の案内をしようと引受けて呉れた人であり、谷口君は、前に手紙があつて伯林に來たならば通知して呉れと云つて來て居つたのである。

辨當のサンドウキッチを携へて午後一時五分の汽車に乗つた。

平野が廣く、菜の花が多いのが目についた。どこまでも平野の續きであるが、ところ／＼に丘のやうな山があつて、その頂上まで耕されて居るのが眺められた。

望 樓 あ る 山 の 上 ま で 耕 さ れ

到るところに立派な町があるのに驚かれた。

暫く雜詠選に没頭。

トンネルを二つ越したやうに思つたがまた長いトンネルに這入つた。

北に行くにしたがつて菜の花の蕾が多くなつて來た。

雜詠選に没頭。

ふと窓から見ると、東海道のやうな道が續いて居るやうであつた。

どこまでも平野が續いて居る中を汽車は走つて居るやうであつた。

夜になつてから伯林に著いた。

藤室君夫妻がプラットホームに迎ひに來て呉れて居た。藤室君が話しかけたので、答へをしようと思つたが、聲がかすれて頭がポカンとして話が出來なかつた。汽車の中で雜詠を見て居つたので非常に疲れたものと見える。それに一つは空腹であつたが爲であらう。

藤室君自身運轉の自動車に乗り、大和旅館と云ふ宿に著いた。是は伯林日本人會と同じ階にある旅館であつて、大和旅館と云ふ名前ではあるけれども、獨逸人の經營して居るものであつた。室を定めてから直ぐ日本人會の食堂で定食を食つて腹を拵へた。時計は九時を過ぎて居たらう。

伯林オペラ見物

四月二十三日。(木曜)

朝、藤室君夫妻が見え、信子夫人は章子を洋服屋へ連れて行つた。

友次郎と一緒に、藤室君の自動車に乗つて市内見物をして、ウンテル・デン・リンデンの正金銀行に行き、そこで金を受取り、三菱支店に行き、支店長の渡邊壽郎君に面會した。渡邊君の話すところによると、嘗てホトトギスの愛讀者であつたとの事で、國民俳句會にも出席した事があるとの事であつた。また囑託のウォール・ファルツ氏に面會した。大谷繞石の友人で、金澤の高等學校の教師をした事があるとの事であり、關圭草君の先生でもあつた。此前圭草君が獨逸の旅をした時分に、舊師として君を迎へて共に歩いたさうで、自然友次郎とも知り合ひであつた。日本語が達者であつて、今は亡き繞石に關する昔話などをした。

午後一時半、支那料理の泰東飯店と云ふのに藤室君に誘はれて行き、渡邊君も一緒であつた。間もなく章子も信子夫人に連れられてこゝで落ち合つた。

それから信子さんに連れられて大使館に行き、井上代理大使に面會した。昌谷事務官も來て暫くの間雜談した。

代理大使が、獨逸にも熱心に東洋文學を研究して居る人があるから、それ等を集めて見よう、俳句の話をして呉れぬかとの事であつたので、土曜日の晩、大使館で集合の事に約束した。

それから、伯林日本學會主事の孫田秀春君を訪問した。孫田君も代理大使の企てに大に賛成の意を表したが、それは大使館でするよりも日本學會でする方が至當だとの見解から、代理大使と再三電話で交渉し、土曜日の晩、この日本學會の廣間で催す事になつた。私は俳句に興味を持つ少數の獨逸人だけの會合を希望したが、孫田君は、是非日本文學を研究して居る伯林大學の學生達をも集め、それに伯林在留の日本人の中にも俳句の話聞き度いと云ふ人はあるであらうからそれ等も集め、日獨合同の大會にし度いとこの事を主張した。代理大使とも交渉の結果、大使も其意見ださうで、遂にそれに極つた。然しもう中一日ほか無いから、充分に報知が行き互らないかも知れぬけれども直ぐさま其手続きをしようとの事であつた。

そこへ闖を排して「お待ちどうさま」と流暢な日本語で云つて姿を現した獨逸人があつた。其人は矢張り伯林日本學會の主事であるランミング君であつた。殆ど日本人と變らぬ位に日本語が出来て、それに挨拶する時分も、握手などはせず鄭重に頭を下げて、總て日本人通りであつた。孫田君といろく會の事を打合せて居た。

一旦宿に歸つて藤室邸に行き、雜詠の選稿を日本に發送することを頼み、鮎を食つて居る處へ藤室君も歸つて來て、それから藤室君先導のもとに五人連れでオペラ座のオペラを見に行つた。

このオペラ座は、建築も新しければオペラの様式も新しいものであつて、總てが新式であるとの事であつた。伯林では二番目に位するオペラ座ださうで、丁度カルメンの幕が開いた處で、マルガレーテ・クローゼと云ふ女優がカルメンに扮し、ターレンチン・ハルレルと云ふ男優がドン・ホセに扮して居た。

別に空腹でも無かつたが、藤室君が勧めるまゝに、幕間に休憩處に行つて料理場からサンドウキツチを取寄せて食つた。私達は椅子に腰を掛けたが、遅れて來た獨逸の婦人等は立つたまゝで手摺みで食つて居た。ぞろ／＼と行列を作つて休憩室を歩いて居る人は皆私達の方を振り返りつつ行くのであつたが、殊に、和服姿の私をじろ／＼と見て、草履を穿いてゐる足の爪先までも凝視するのであつた。

座席に歸つて終りまで見た。幕の度にアンコールが続いて、カルメンもドン・ホセも其他の役者も、手をつないで出て來て、再三御辭儀をした。

表に出ると雨が少し降つて居た。藤室君の自動車に送られて宿に歸つた。

日本學會に於ける俳句講演

四月二十四日。(金曜)

朝、友次郎等の寢てをる間に、明日の日本學會に於ける講演の原稿を概略鉛筆で下書きして見た。

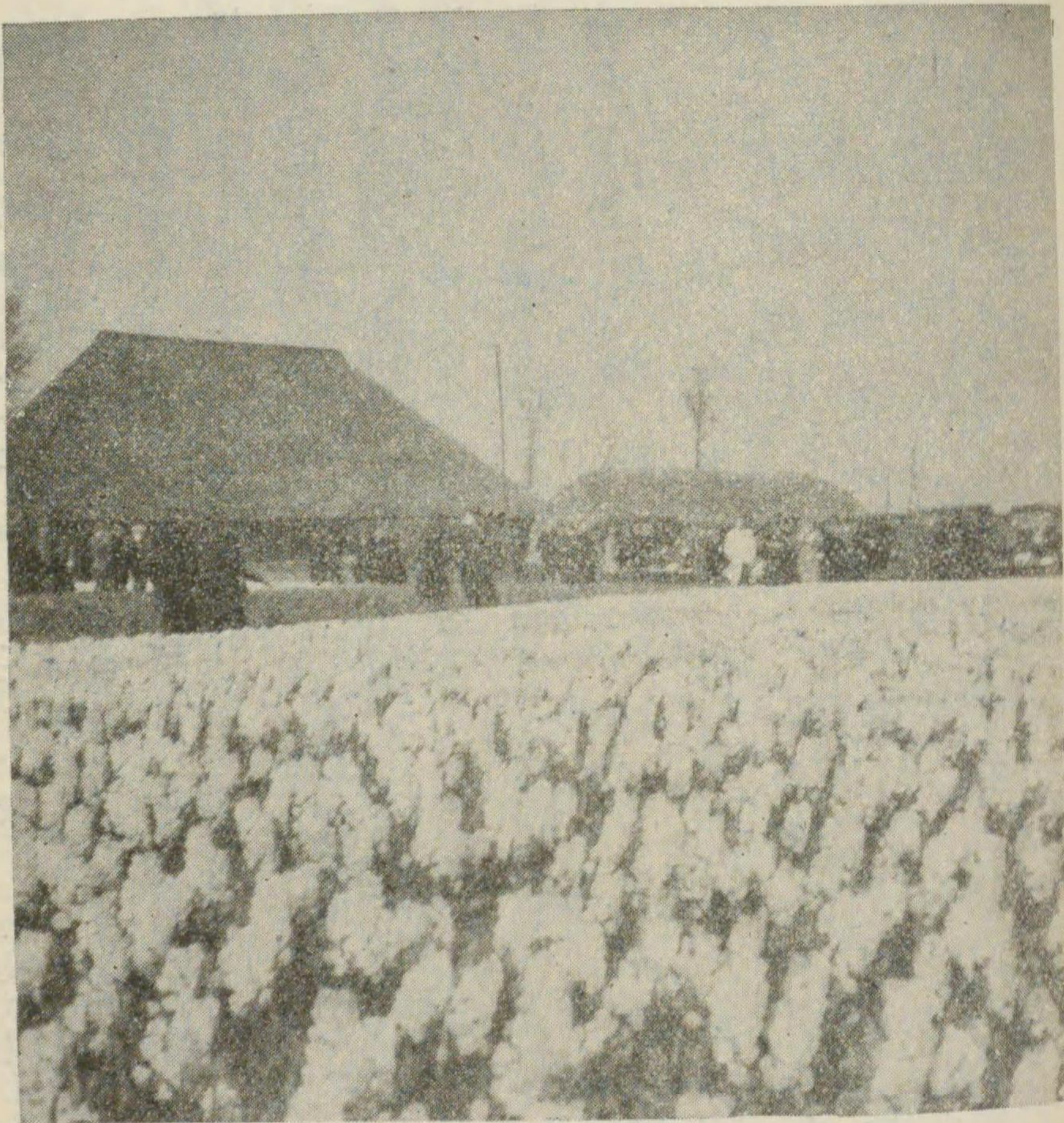
午前十時過ぎ、信子夫人の案内で日本人の學校に行つた。そこは少數の日本人の子供を集めた學校で、今までは大使館で大使館關係の子供だけを教へて居つたのが、此頃此日本人の學校を拵へて廣く日本の兒童を收容する事になつたのださうだ。行つて見ると、井上夫人や渡邊夫人なども見えて居て、中學級の生徒十人許りに、何でもいゝから話をして呉れとの事であつた。教室に這入つて見ると、其兒童と云ふのは悉く女ばかりであつて、大概こゝに臨んで居る夫人達の令嬢ばかりであり、男の兒童は大概教育の關係上日本に残して來るのであるとの事であつた。その母

堂達も皆生徒に並んで腰を掛けて居る前で、俳句の話を三十分ばかりした。

信子夫人に連れられて「あけぼの」で書飯を食つた。それから又信子夫人の案内で、この七月に開くオリムピックの敷地を見に行つた。其途中に湖水があつて、その岸には澤山の楊柳が青い芽を吹き出して垂れ下つてをり、川蒸汽が其間を往來して居るいゝ眺めの處があつた。オリムピックの敷地は廣大なものであつて、觀覽人の爲にこゝまでレールが敷かれ、假停車場が出来て居た。土工はまだ半ばだと思はれる程であつて、高く聳えて居る塔の上に吊るさるべき鐘も未だ土地の上に置かれたまゝであつた。其敷地の周圍を自動車に乗つたまゝ廻つて見た。

それから八十哩以上の速力を出して、二十分ばかりかゝつて、各國から集まる選手達の寄宿舎の建つて居るところへ行つて見た。斯んなに遠くでは會場へ行くのに不便であらうと思はれたが其時は選手ばかりが往還する道路になり、他のものは通さぬのだとのことであつた。既に建築されて居る寄宿舎もあるし、また是から建築するものもあるやうであつた。オリムピックが終つた後は兵營にするのだと云ふ噂を聞いた。其途中に飛行機が盛んに飛んで居り、また兵隊の教練もやつて居た。軍國獨逸の全貌の一端を見得たやうな心持がした。

カー・デー・ペー百貨店に立寄つて土産物を買ひ、鞆一個を買つて、其土産物を詰めさせた。



加スンシヤヒ 村トーリフトンサ・ーギルペ

それからアルノルト・ミューラー店に至り、章子の洋服の假縫ひを見るために、章子と信子夫人とが這入つて行つて、私達は其間自動車の中に待つて居た。

一旦宿に歸り、信子夫人も自宅に歸つた。そこへ大毎社員の加藤三之雄君が來た。三之雄君は加藤霞村君の從弟だとの事であつた。

そこへ藤室君が迎ひに来てくれて、渡邊邸の晚餐會に臨んだ。井上代理大使夫妻、孫田日本學會主事、藤室君夫妻等が一緒であつた。こゝでも俳句の話がはづんで、遂に句會をやることになつた。

外つ 國に 櫻たづねて 旅衣 孫田秀春

白樺の けぶりそめたる 春の月 井上庚二郎

伯林の 春の夜 静かりラの花 井上秀子

垣根朽ちてリラ咲きほこる 湖畔かな 渡邊壽郎

リラの花車頭に挿して走りけり 藤室益三

巴里の 月伯林の 月春の旅 友次郎

思ひなく 空仰ぐ 目に春の月 章子

瓶に挿すリラの花あり 夜の宴 虚子

折からの 夜宴の花やライラック 同

大扉あけて 食卓そこにリラの花 同

夜話遂に 句會となりぬリラの花 同

夜十一時半、送られて歸る。

四月二十五日。(土曜)

朝、鉛筆で亂暴に書いた講演の原稿を友次郎に清書して貰つた。午後二時チーア・ガルテン・シユトラーセの大使官邸の午餐會に行つた。官邸はチーア・ガルテンの大きな森を前にした處にあつた。渡邊夫妻、藤室夫妻、大倉商事支店長の加藤鉦次郎夫妻の諸君が一緒であつた。代理大使は、近々武者小路大使が來著するにつき、今夜こゝを引拂ひ郊外の自分の住居に引越すのだとの事であつた。夫人の求めらるゝまゝに扇子に揮毫した。

一旦歸り、一寸晝寢。

日本人會で鮎を食つてをるところへ渡邊君夫妻が迎ひに來たので、同乗、日本學會に赴いた。行

Paul Birkbeck

Dr. M. Ramming

K. Weidinger

Ernst Boehlert

Otto Thonak

F. Rumpff

Karl W. Schaefer

ベーンケ

ランミング

ウアイゲンガ

ウオルファート

トナツク

レンプ

?

?

名譽の人過罰な主
のもたい書が君ブルは名假片るあに手右

そこへまた、伯林大學語
學部教授をして居る村田豊
文君も顔を出した。
やがて、講演を始めて吳
れとの事で別室に行つた。
五六十人の人が集つて居て
見渡すところ、獨逸人が半
分、日本人が半分位であつ
た。眞中の大きなテーブル
の一端に私と仙石君が並ん
で腰をかけ、其他の人はそ
のテーブルの周圍に二重三
重に腰をかけて、伯林大學
の學生たちは立つて居るも

つて見ると、既に人の來往が多く、孫田君は忙しさに斡旋して居た。かねてランミング君に通譯をして貰ふ事になつて居たので、原稿を孫田君に渡し之をランミング君に一應讀んで置いて貰ひ度いと云つた。ところがランミング君は今日のはかねて日獨協會々長ベーンケ提督のお茶の會に招かれて居つたので、其方に行つてゐて未だ歸つて來ないが、間もなく來る筈との事であつた。ランミング君は、五時頃になつて息をせき／＼歸つて來たが、通譯の方は切に辭退して、伯林大學で哲學を専攻し傍ら文藝の研究をして居る仙石君が之に代る事になつた。そこへ一人の獨逸人が來た。それは、ルンプと云ふ人であつて、日本にも長く行つて居つたことがあつて、日本語に達者なばかりでなく、日本の下情にも通じて居ると云ふ事であつた。私にポケットから、私の明治三十一年に出版した「俳句入門」を取り出して、之を讀んだ事がありますと云つた。それから「叡山の小鳥」も讀みましたと云つた。また私は日本料理が好きで、よく濱作、丸梅、花の茶屋、興津庵等に行きました、また役者でも、猿之助君などとは懇意にしました、なぞと云つた。

そこへまた、シャル・シュミット君が來た。この人は伯林大學の教授で、古今集の講義をして居る人であるとの事であつた。この人も日本語が達者であつた。

のもあり、またドアを開け放して室外に椅子を置いて聽いて居る人もあつた。私が原稿の一節を朗讀すると仙石君がそれを逐次譯にした。皆熱心に聽いて居るやうであつて、ノートに取つて居る人もあつた。終つて別室の食堂でサンドウイッチ、ビール、茶菓等で暫くの間談笑した。その時、私の前に立ち塞つて握手をした長大な老紳士があるのを、誰かと思つたら、是がベーンケ提督であつた。提督は世界大戦の時分に、英國の旗艦を沈めた當時の艦隊司令長官であつたとの事である。大變な日本最良であつて、現に日獨協會々長であるとの事であつた。友次郎を捕へて佛語で話をして、頻りにビールを強ひて居た。

また私の前に進んで日本語で挨拶をする二人の娘があつた。是がビュルガ姉妹であつた。その妹の方は一年餘り神戸に居たとの事であつて、殊に日本語が達者であり、姉妹共伯林大學日本科の學生であつた。

その席上で、私のベルリンに居る間に一度俳句會を催して見たいと云ふ議が日本人の側に起つて來て、私に相談した。私は明夜ならば出席が出來ると云つたので、忽ち日本人會でやる事になつた。

私が辭して歸らうとした時分に、ベーンケ提督はまた私の手を握り、私の講演が日本人の心を

日本に戻した事を祝福し、無事の航海を續けて歸國する事を祈る旨を、仙石君の通譯で私に傳へた。また先刻の講演に何故に自分の句を引かなかつたか、自分の句を云はぬのは謙讓に過ぎると戲言を云つた。ベーンケ提督は今日自分の處の茶話會を終ると、ランミング氏と一緒に急いでここに駆けつけたものであるさうな。

村田豊文君は、今晚出席した伯林大學の學生諸君の名前を書いて私に呉れた。またベーンケ提督を始め、出席した主な獨逸人達の署名したものも貰つた。

十一時四十分宿に歸つた。

私の講演原稿は別項の如きものであつた。(別掲「何故日本人は俳句を作るか」参照)

ポツダム行並に俳句會

四月二十六日。(日曜)

獨逸に來てから曇天勝ちで、寒さも可なり強く、冬の外套に頸巻をして常に外出して居るのであつたが、今日は珍しく晴天で幾分か暖かつた。

渡邊夫人が迎ひに來て、先づ藤室邸に赴いた。夫から藤室君の自動車には、主人公が自ら運轉して二人の子供と女中の獨逸人に乗せ、三菱の自動車には渡邊、藤室兩夫人が先導になつて私等三人が乗り、一路ポツダムに赴くことになつた。

自動車専用道路を通り、百哩のスピードを出して疾走した。こゝは自動車の競争などもあるところださうである。

兩側に、餘り大きくない、同じ位な幹が眞直ぐに延びて居る松林が長く續いて居つた。下が砂地で根が張らず、大概これ位より大きくはならぬとの事であつた。それは昨日のチーア・ガルテンの森でも同じ事であつて、日本のやうに風が吹いたならば等の林は皆一薙ぎに倒れてしまふであらうとの事であつた。

ワンゼと云ふ湖水を過ぎて、ハーベルと云ふ湖水に來た。獨逸の郊外は林が美しいのと、湖水の澤山あるのが景勝を爲す所以であるとの事であつた。このハーベルと云ふ湖水は、夏になると伯林の子女が水浴をする處で、數百萬圓の金をアメリカから借りて立派な設備をしたのであつた

が、その金は踏み倒して返さないと云ふ話であつた。まだ人は餘り來て居なかつたが、それでも汀には移動する籠のやうな家が澤山並べてあつた。これは日よけにもなり讀書も出来るのださうで、現にその一つに腰を下ろして、書物に読み耽つて居る婦人もあつた。

グルーネワードの森の中を疾走した。

春風やチチスの旗もやはらかに

パーベルスベルリと云ふお城を左に見て、河を渡ると、ポツダムの町に入つた。左右共に兵營が連つて居て、市役所、お城、お城に附いた教會等が取り圍んで居る廣場に出た。日曜の人出はこの邊にも可なり見受けられた。

花杏ナチスの子等は行列す
花人に教會の鐘鳴りわたる

サン・スー・シーの宮殿に來た。フリードリツヒ大王がこの宮殿を造營する時分に、汚ない風車小屋があつたのを取り除けささうとしたのであつたが、その爺が頑として應ぜなかつたと云ふ、その風車が今でも宮殿の前に保存されてあつた。宮殿は立派な建物であつて、中にも這入れるのださうであるが、私達は這入らずに、唯向ふ程低く段々になつてゐる廣い庭園を見渡したり、壯

麗な宮殿を見上げたりして、木蓮が美しく咲いて居る下を暫くの間逍遥した。こゝにも人出が多かつた。

巴里でも、銅像や大理石の像は必ず建築に伴つて居るのであるが、殊にこの獨逸では、それ等の像が更に夥しいやうに思はれた。此サン・スー・シーの宮殿の大理石の柱が上部に到るに従つて自然彫像になつてゐて、其等の像が力を籠めて屋根を支へてゐるのは立派であつた。

春風や柱像屋根を支へたる

更に裏の方に廻つて、新しい宮殿と云ふのを見た。新しいと云つても可なり古い宮殿であつて新しいといふのはサン・スー・シーの宮殿よりはあとから出来たといふ意味であらう。その宮殿の前には、料理をする家と、侍従たちの控への家と云ふ立派な建物があつて、地下道が通じてゐて宮殿に料理を運んだり、又侍従達が往來したりするのであるとの事であつた。その宮殿の屋根には、露西亞と佛蘭西と墺太利の人間が、獨逸の金冠を捧げて居る彫像が突立つて居り、世界大戦の時、獨逸の大本營になつて居たとの事であつた。

廣大なその庭園を暫くの間散歩した。こゝは比較的人出が少なかつた。木の間の寂しい處に前の獨逸皇后の墓があつた。その前に行つて見ると、水仙の花をはじめくさぐさの花が捧げてあ

天^ふ 天徳 (天座)

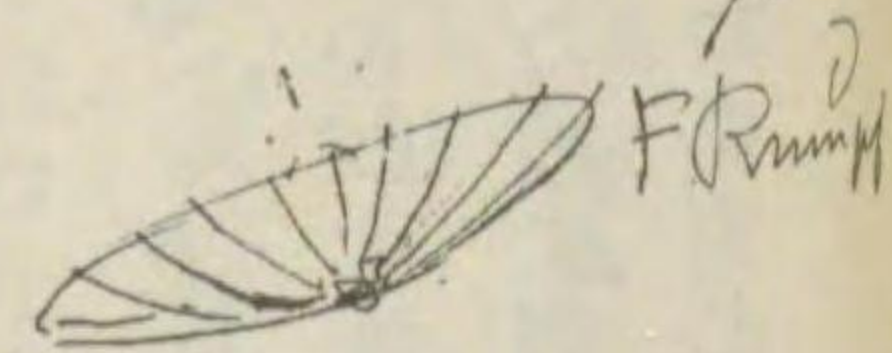
笑福 上野
のく屋 牛込

新^あ 新嘉すし (新橋)

蛇の月 (上野)

こまつ 京橋
大黒屋

金田 浅草公園
ありつ 牛込



茶^あ 味し^あ 留
花乃^あ 屋 有楽町
女梅 四ッ谷
濱作 銀座
興^あ 都 虎 ありつ^あ 町

春^あ 日 橋 三ッ月

錦水 三ッ
八百^あ 三ッ

天然^あ 自笑軒 日ばた
ぶくべ 四ッ谷

るあで通食り通此 書らづたいので上席會句俳君ブニル

つたが、その中に、ナチスの印の付いてをる花も捧げてあるのを見て、何となく哀情をそよめるものがあつた。獨逸皇帝に對しては人民の怨恨が骨髓に徹して居るものがあらうが、皇后に對する人民の敬愛の情は可なり深いものがあるやうである。

更にヴェルダに車を驅つた。

このヴェルダと云ふのは櫻の名所になつて居るのださうで、既に澤山の自動車を駐めて櫻の下に群集して居る人が多かつたが、花の蕾はまだ固くなく、綻びさうに

もなかつた。櫻は一定の距離を置いて直線に植ゑられてゐて、その櫻の下には澤山なテーブルが置かれてあり、家族連れらしい人、男女の一團等が、そのテーブルを取り圍んで酒を飲み料理を食つて居た。私達もその空いて居るテーブルに陣取つて、渡邊、藤室兩夫人が齎した辨當を取り出して食つた。別のテーブルに居る獨逸人が皆不思議さうに私達のテーブルを見て居つたが、箸で辨當を食ひ始めるのを見て、向う向いて腰掛けて居る人は振り向き、人蔭になつて居る人は延び上りして珍しさうに見るのであつた。

箸で食ふ花の辨當來て見よや

人は續々と來て、澤山あるテーブルは見て居る中に殆ど塞つてしまつた。

前には大きな湖水があつて、その湖水の向ふの山の彼方に、尖塔が聳えて見えるのは何處の町であらうか。

春の湖に映るヨットの三角帆

廳で歸路に就いた。百姓が道端に桃の花の枝を賣つて居るのが澤山にあつた。渡邊夫人がその一つを買つた。枝を張つた桃の花が運轉手の横に窮屈さうに蟠踞して居るのが面白かつた。

一日の清遊を恣にして、歸途は飛ぶやうに疾走して先づ藤室君の家まで歸り、渡邊夫人に送ら

れて宿に歸つた。

間もなく日本人會の俳句の會場に出かけた。參會者は豫想外に多數で、二十六人を算した。幹事格の孫田、三田兩君が幹旋これ力めてゐた。先づ食事をした。參會者の中にルンプ君があり、ビュルガ姉妹があり、エリカ・フース嬢があつたのであるが、其等も箸を取上げて日本の食事をした。ルンプ君とビュルガ姉妹のことは前に云つたが、このエリカ・フース嬢も矢張り昨日の講演會に來て居つた伯林大學の生徒の一人であり、ルンプ君とフース嬢は、句は作らなかつたが、熱心に句會の進行して行く有様を見て居つた。ビュルガ姉妹は、多くの日本人と同じく句を作つた。

美しく木の芽の如くつゝましく	京極高光
街燈に膨らみそめし木の芽かな	屋代大卯
湖畔來てこの道長く春寒し	世良完介
雀とぶ影落つ縁や木の芽萌ゆ	孫田秀春
水鳥の杭に並んで冴返る	加藤甲雨
春寒しリンデンの夜の街を行く	加藤節子

春風は何處を吹りそが花咲り

ホツダム春風吹りそ人出かな

春寒の長き伯林明日發せん

12.31 色の空に 淋しく木の芽吹く

蹟筆句選ガルービ・スンヤジ

シタレ又
ビユルか

ルーテルの大銅像や木の芽吹く

三田亨

行き行けど遠山低く冴返へる

大塚九二生

つぶくとリンデンの芽の萌え出でぬ

安東幸二郎

春風の日本なつかし今日思ふ

イヴォンヌ・ビユルガ

木の芽出でざれど寒さまだ身にしむ

ジャンヌ・ビユルガ

薄暗き後の墓や春寒し

章子

春寒の長きベルリン明日發たん

友次郎

ポツダムに春風吹いて人出かな

虚子

春寒の汝の衣よごれたり

同

ビユルガ姉妹の句も、姉の方は友次郎が少し直したのださうだが、妹の方は全く自分の作った句で、其選句も寫真版の通りである。これは其筆蹟である。

別室にて、伯林俳句會の爲に、「春風や柱像屋根を支へたる」の句を書き残して置いてくれとの孫田博士の所望で揮毫した。そこへエリカ・フース嬢が現れて、私はポツダムに住んで居るのであるが、今夜のポツダムの句を書いてくれと所望したので、それを書いて與へた。

今夜もまた、海外在留日本人の俳句に親しみを持つ情景を見たが、それのみでなく、獨逸の若い娘達が、親しく日本語で、日本語に認めた俳句を作ったことを嬉しく思った。
十二時寝。

和蘭通過、倫敦に著く

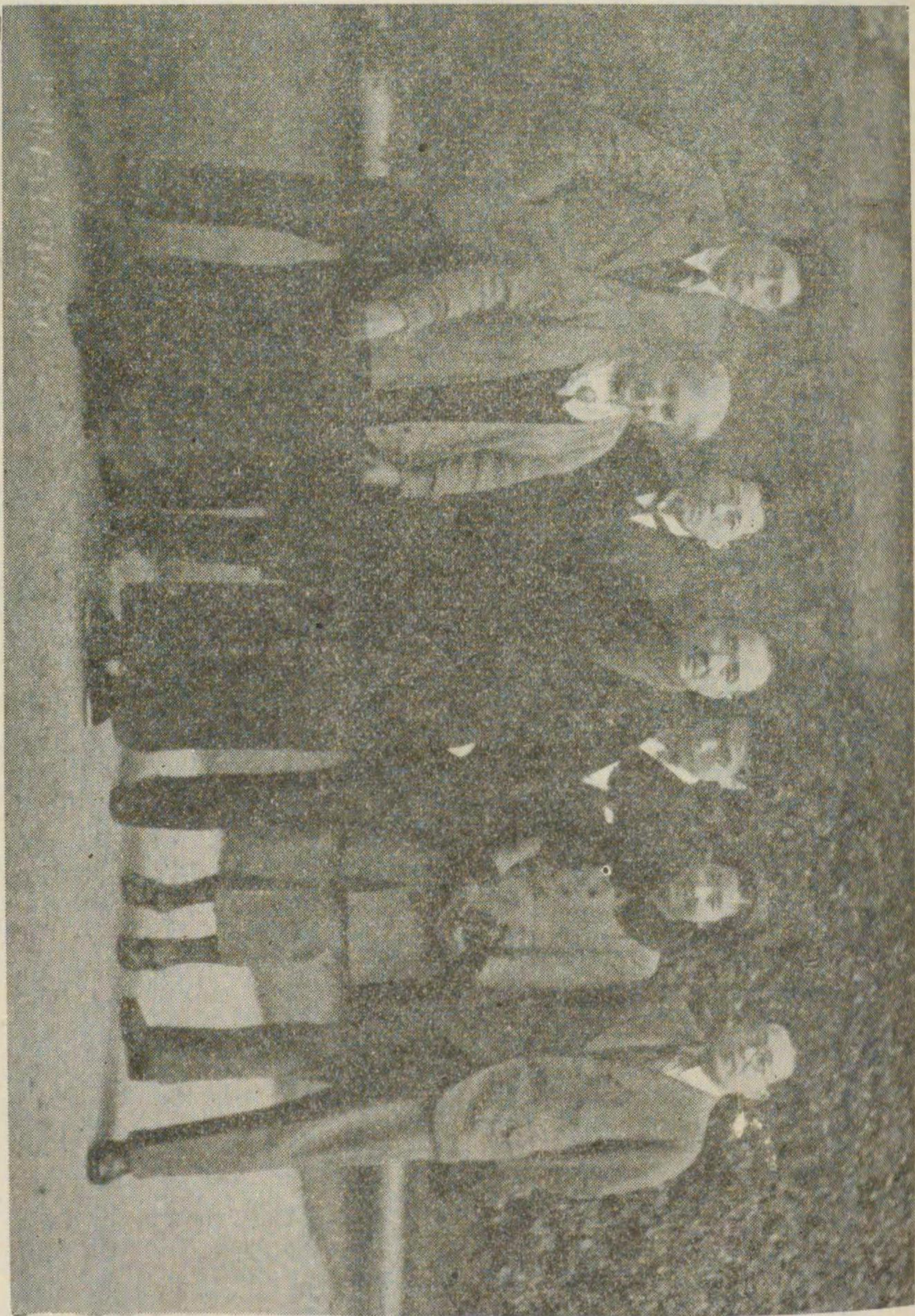
四月二十七日。(月曜)

晴天。心地よき日和である。

六時半起き出で入浴。

谷口君見え揮毫。湯淺君見え撮影。

藤室君夫妻が見えた。一緒にバベルスベルゲル通りの日本人學校に行つた。是は今一度来て、生徒に作らせた俳句があるから、其批評をして呉れぬかとの依頼によつたのである。



シエクスピアの家の庭にて
松本屋人、章子、左次郎、豊子、博登、華人の老妻、八田一朗

藤室君はそこから他に廻り、信子夫人は章子を伴ひノイエ・ウキンテルフェルト街の與謝野商店に買物に行つた。私と友次郎と學校に残り、俳句の添削をして、季題の事などを話した。終りて揮毫、寫眞。

井上夫人の自動車に便乗して宿に歸つた。藤室^{みち}迪子同伴。

書飯を藤室夫妻、迪子さんと共に日本人會で濟ませて、ツォ停車場に行つた。伊藤君夫妻、バーミング君、ビュルガ姉妹、京極、篠原、高田、寺井、昌谷、世良、仙石、藤室君夫妻等に見送られ、一時五十分の汽車に乗つた。昌谷夫人、ビュルガ姉妹より章子に贈り物があつた。

平野が續いて、村落があり、風車があり、耕馬がぼつ／＼見え、中には三頭立ての耕馬が悠々と土を返して遠くの方まで進んで行くのも見えた。また森もあり、やがて大きな町に著いた。そこはハンノーヴァと云つた。

オフネブルクと云ふ驛に著いた。

ライネと云ふ驛を通過した。

和蘭と國境の驛ベントハイムに著いた。國境の驛には汽車が長くとまり旅客の検査、貨幣の兩替等に長く時間を費した。

國境の驛の兩替遅日かな

和蘭に入ると、心からか何となく天地が平和なやうに思はれた。

國境を過ぎ和蘭の春の水

日が森の木の間を落ち沈んで、馬鹿に大きく赤かつた。

和蘭の春の夕焼美しき

この國の溝川までも夕焼けす

汽車の中で晩食を攝つた。和蘭の貨幣フロイラインの馬鹿に高いのに驚いた。世界大戰の渦中に卷込まれず、今尙貨幣は高い値を保つてゐるのである。

アメルスフォルドと云ふ驛に著いた。時計が和蘭に入つて四十分遅れた事に氣が著いた。

九時ユトレヒトと云ふ驛に著いた。一つの河を渡つた。

ベヘルグと云ふ驛を過ぎた。

ライン河の下流を渡つた。闇の中で見た河幅は割合に廣くないやうに思はれた。

ロツテルダムに著いた。間もなく終點のフック・オブ・ホーランド驛に著いた。直ぐ其驛の構内に繋つて居る船に乗つた。是は英吉利の船で、一路海を渡つて英國のハーウツチ港に赴くのであ

る。

友次郎、章子は一室、私は別の一室に寝た。寝臺に横になつたと思ふ中に、もう何も知らずに眠つた。

和 蘭 の 港 に 春 の 月 か ゝ る
春 の 月 か ゝ り て 船 路 静 かな り
三 人 の 旅 の 親 子 に 春 の 月

四月二十八日。(火曜)

七時前にハーウツチ港に著いて居た。この航路は寒い時分には大變に荒れるのが常で、まだ此邊の時候では冬とも春ともつかないので、多少荒れるものと覺悟して居つたが、極めて静かであつて、昨夜船の寝臺に横はつた時から、今朝七時前に眼が覺める時まで、更に動搖を感じず夢を驚かすものはなかつた。今朝港に著いたと云ふのも、夢とも現ともなく聞いて居た機關の響が馬鹿に静かになつたやうであると思つたらば、もう港に著いて居たのであつた。快晴らしい。

悠々支度をして居ると、もう旅客は大概上陸した様子だ、税關に時間がかゝるであらうから早

くしろ、と友次郎が云つたので、急いで上陸した。

税關では、果して伯林で買つた新しい靴の土産物が問題になつて、手間を取つた。漸く定刻の汽車に間に合つて乗りはしたものの、座席はすつかり塞つて居たので、二三臺の食堂車を経廻つて、僅に空席のあつたところに腰を下ろし、朝食を濟ませた。食堂車を出てから仕方なしに荷物に凭れたり、廊下に立つたりして時間を費した。

もう倫敦が近いと思はるゝ沿道の景色は、矢張り日本の品川あたりの光景と相似たものがあつて、場末の家並が櫛比して居るところを通つた。聽てリバープール・スツリート・ステーションに著いた。迎へに來て呉れて居た人々は、上ノ畑楠窓、八田一朗、松本覺人、榎原覺、河西滿薫、有吉義彌、高橋長春、それに常盤の主人岩崎盛太郎の諸君であつた。覺人君が驛頭で活動寫眞や記念寫眞を撮つた。

それから、覺人君の嚮導の下に、楠窓、一朗兩君と自動車に乗つて倫敦の町を見物しながら、常盤本店を志した。市中でも特にシチーと稱する處を過ぎた。是は倫敦の町が未だ大きくならないう時分の舊市街であつて、今でも此一劃だけは政治上特權を持つて居ると云ふ一種の誇りさへある處で、そこにはイングランドバンクや取引所などを始めとして、銀行會社等の建物が櫛比して

P. E. N.
A WORLD ASSOCIATION OF
POETS PLAYWRIGHTS EDITORS ESSAYISTS NOVELISTS
Offices: Albion House, 59/61 New Oxford Street, W.C.1
Telephone: Temple Bar 7574. Telegrams: Lonpenclub, Westcent, London
General Secretary: HERMON OULD

ANNOUNCEMENT

The next Dinner will take place
on Tuesday May 5th 1936, at 7.45 for 8 p.m.

at
Pagani's Restaurant
42/48, Great Portland Street, W.1.

Chairman: L. CRANMER-BYNG

Guest of Honour: TAKAHAMA KYOSI (Japan)

Members of the P.E.N. intending to be present should notify the Secretary as soon as possible, but not later than first post Monday morning.

Guests: Each member may bring one guest only, whose name should be given. It will be assumed that members wish to be seated next to their guests unless they expressly state otherwise, in which case the organisers will endeavour to meet their wishes.

It is desirable that guests of members should themselves be either writers or members of one of the artistic professions.

By a rule of the Club, no person may attend the Club dinners as a guest more than three times in one year.

Price of Dinner: The price of the dinner is 7/6, including tip. Drinks are not included in this price; members tip the wine-waiters as they desire.

Tickets: No tickets are required.

Dress: There are no special rules about dress at P.E.N. functions. Evening dress, morning dress, tails or dinner jackets are all admissible.

N.B.—Members who have accepted and fail to give the Secretary twenty-four hours' notice of their inability to attend are liable for the cost of the dinner.

居る商業区域であつた。然し一見した所では、巴里や伯林を見た眼には、町幅が狭くて一帯に煤けて居るやうな心持がした。ところが後に至つて、だん／＼倫敦といふ町は上部はたいして美しいといふではないが、底力のあるがつしりした、流石は世界第一の大都市であるといふ感じがして来たのであつた。

左側にテームス河を見た。河幅は思つたよりも狭かつたけれども、兩岸の建物は立派であつた。聽てデンマーク街の常盤本店に落付く間もなく、いろ／＼の相談をした。

先づ何よりも先きに、倫敦ペン倶楽部の事であつた。駒井權之助君が、此下巴里で私に會つた後で直ぐ倫敦ペン倶楽部の幹事に電報を打つて、私が出席すると云ふ事を云つてやつたので、私を主賓とする會合として既に其旨を會員全體に通知してしまつた、その後私から缺席するとの手紙が著いたので、その幹事も狼狽し駒井君も當惑し、急に横光君に出席の事を交渉して居る始末であるとの事であつた。此駒井君に會つた時の話では、五月五日がペン倶楽部の例會日なので、その時に私にも出席しろと云ふ手輕い簡單な話であつたので、出席缺席は私の隨意と思ひ、それで簡單に旅行の都合で缺席の通知を出して置いたのであるが、さう云ふ事になつて居るのならば今更缺席すると云ふ譯にも行くまいと考へて、瑞西・伊太利の旅は割愛して出席する事にし

ようと先づ駒井君に電話で通知して貰つた。駒井君は直ぐ宿に来るとの返事であつた。

タフネルパークロードの常盤別館に宿泊する事になり、身體も荷物もそこに運んだ。

サロンで倫敦留學の大坂醫大の細川政一君に逢つた。醫大俳句會の人々の名を語り合つた。細川君は前から此所に泊つてゐるので、其後もよくサロンで顔を合はせた。

入浴、晝飯を済ました處へ駒井君が見え、私が出席の事に極つたので、大いに安心したと云つた。駒井君の示した案内状には、成程 Chairman: L. Cranmer-Byng Guest of Honour: Takahama Kyosi (Japan) と明記してある。私は軽く考へて居たのに、少々事が重大なのに驚つた。

駒井君の話に、此前坪内、徳富の諸氏が此地に來られた時分に、出席の事を交渉したが二氏とも逃げて出席しなかつた。今度また逃げられたら面目を失すると思つたが、まあよかつた、ペン俱樂部を作つたのは英國が始めであつて、今日では四十餘箇國に出來て居る、日本も最近に漸くそれが出來た、君はその最初の出席なのだし、五分でも十分でもよい故簡單な挨拶をして呉れば僕の面目が立つ、横光君にも松尾君から交渉して貰つてゐるので、多分來るだらうとの事であつた。當日は日本デーにして、多くの日本人も客として列席して差支ない筈になつてゐると、そんな事を話して歸つた。

朝日新聞社の古垣鐵郎君から電話で、後刻來るとの事であつた。

松本君が先づ歸つて、八田、友次郎、章子の三人は散歩に出かけた。

古垣君が來た。楠窓君と三人で暫く談話。そこへ友次郎等は歸つて來た。友次郎ははじめて渡佛する時分に古垣君と同船し、いろ／＼世話になつた十年來の知己である。古垣君から、シーボルト、間宮林藏についての興味ある話を聞いた。

古垣君が歸つて、晩飯までに三十分許り時間の餘裕があつたので、八田君の爲に小俳句會を開いた。

倫	敦	の	入	日	美	し	梨	の	花	楠	窓
赤	々	と	霞	の	中	へ	入	日	かな	一	朗
赤	き	く	夕	日	落	ち	行	く	梨	の	花
噴	水	の	音	の	み	聞	ゆ	春	の	暮	章
倫	敦	の	春	草	を	踏	む	我	が	草	履
轉	の	鳥	あ	ら	は	れ	し	梢	か	な	同

ストラットフォード・オン・アボンに遊ぶ

四月二十九日。(水曜、天長祝日)

今日は八田一朗君の假寓してをる、同君の柔道の弟子である、メイヤー夫人のハンツの別荘に行く筈であつたが、草臥れてをつたので止めた。

十時、楠窓、八田兩君、友次郎、章子と共に荷物の出し入れの爲に箱根丸に行くことにした。先づ郵船會社に行つた。

二階附きの自動車、電車が地震があつたらば直ぐ倒れさうな恰好をして、引つきりなしに往來して居た。また、ゴー・ストップの處に來るとそれ等の電車や自動車は何十臺となく止つて居て重たい荷物を積んだ馬車が、呑氣な馭者を乗せて其中に行き詰つて居るのを見ることも屢々であ

つた。それ等の馬車は大概二頭立であつたが、その馬の脚の蹄に近いところが大變毛深く蹄を覆うやうに膨れ上つて居るのを珍しく眺めた。

郵船會社では、井上、有吉、森川の諸君に面會した。

倫敦塔を見た。タワーブリツヂを渡つて見た。

場末の町と思はれる處を過ぎて波止場に行つた。その波止場と云ふのは、テームス河の下流にあるのである。そこに箱根丸が繋つて居た。今日の天長節を祝する爲の満船飾が施され、國旗が翻翻と翻つて居た。

楠窓君の部屋に陣取つて暫く雑談をした。章子はボーイに手傳つてもらつてバゲイデルームに預けてある鞆を開けて荷物の出し入れをした。

歸路はパーク街を通過、トラファルガー・スクエアのネルソンの銅像を仰ぎ、セント・ゼームス公園、バツキングダム宮殿、ハイドパークを抜け、軍縮會議全權の泊つて居つたと云ふグロブナー・ハウスの前を過ぎて、常盤本館に著いた。

鞆一個を買ひ、それに船から出して來た章子や私の著物を入れた。

夕刻から私達の歡迎小宴が開かれた。松本、有吉、井上、森川の諸君と一緒にあつた。それに

馬耳塞に著くまで船で一緒であつて、章子に編物を教へて呉れたりした森川夫人も態々出席された。宴はやがて俳句會になつた。

古里の子の入營の寫真かな	松本覺人
娘二人林檎咲く門の立咄	井上嘉瑞
水ぬるむ牧場の垣に花杏	有吉瓦樓
ゆるやかに廻る水車や花林檎	楠窓
チューリップ影の長きが揺れてをり	一郎
春月や旅の車窓の右左	章子
花あやめ顔を遮り濃紫	友次郎
花林檎村を圍みて山かけて	虚子
徳利に似たる女房や花林檎	同
TOKIWAYAに天長節の國旗かな	同
神赤く染め分け手綱チューリップ	同

覺人君へ、明日一杯に毛布を箱根丸まで届けてもらふ事を依頼。

此日、日本人會委員長の伊藤與三郎君から、五月一日の夜晚餐會後、俳句の講演を依頼する旨の手紙が來た。

四月三十日。(木曜)

今日は沙翁の誕生地であるストラットフォードに行くことになつた。そこは沙翁の生地と云ふ許りでなく大變景色の良い處ださうで、英吉利の田園の景色を見ることは、かねくの希望でもあるし、此間相談のあつた時は賛成して置いたのである。三菱の自動車を借用して、嚮導役として松本覺人、それに楠窓、一朗、友次郎、章子、私が自動車に乗り込んで一路倫敦の西と思はれる方を志して行つた。途中に時間があればオックスフォードをも一見すべく、尙八百年前に建つたウインザー宮殿、テームス河を隔て、其對岸にあるイートン中學等をも見るべく志した。倫敦の町を横切つて、新開地かと思はれる同じやうな安普請の建ち並んで居る處を過ぎて郊外に出た。

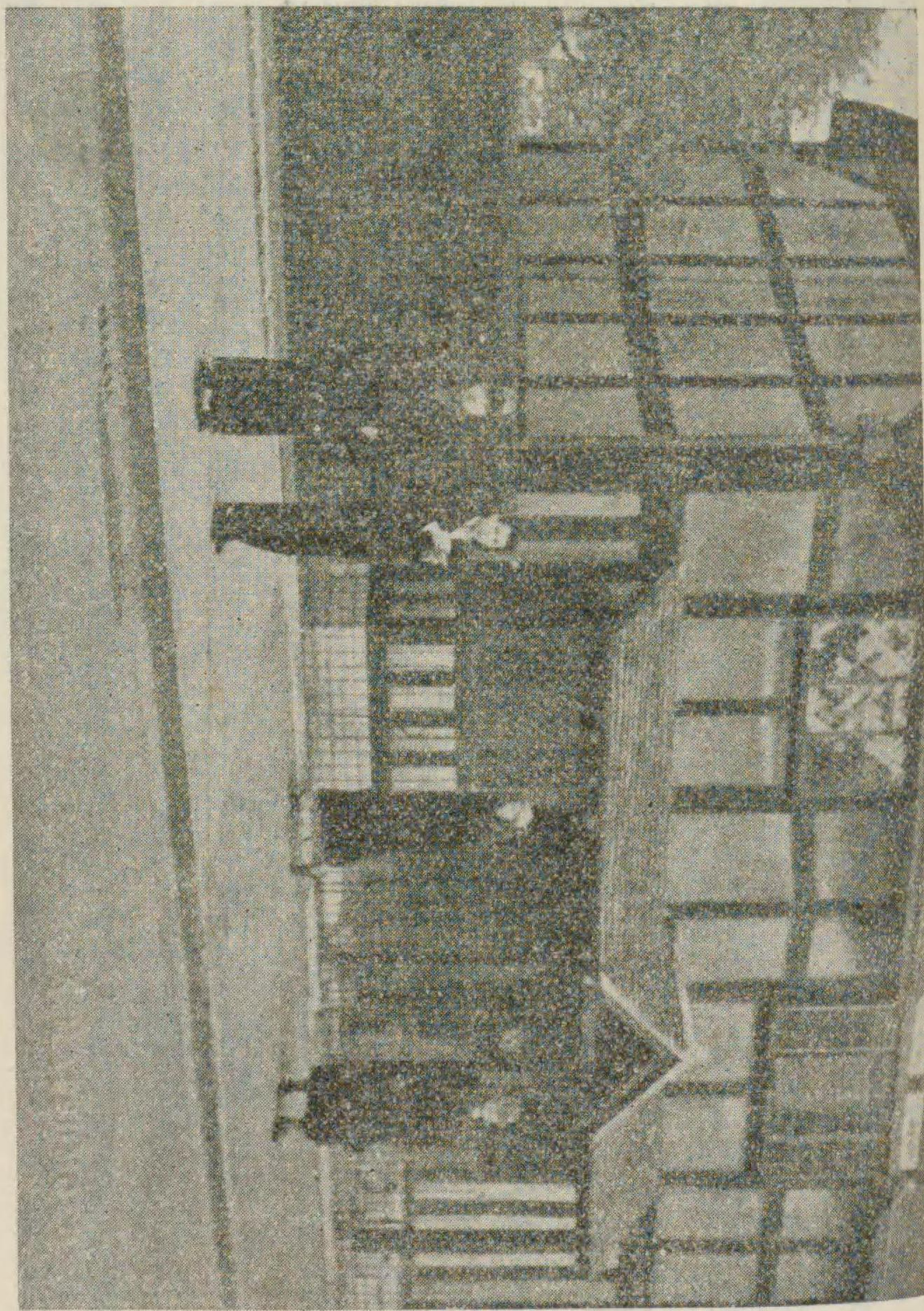
畑と云ふものは殆ど見當らず、青い芝で蔽はれた野原が際限もなく續いて居た。丘が起伏して居る、その丘も悉く青芝に包まれて居る。この芝は日本にあるのとは全く異つて居るのださう

で、四季概ね青く、牧草になるのだとの事であつた。倫敦に近い英國の山野は一體に此青芝に包まれてゐるのであつた。

郊外に出て一番に氣の附いた事は、蒲公英の多い事であつた。その花は大きく、黄も濃ゆく、道端に咲きつゞき、青芝の中にも點在して居るのが非常に美しかつた。

バームステッドといふ所を過ぎ、バツキングラムシヤイアの首府である、エイレスベリーといふ町も過ぎた。少し草臥れたので、茶でも飲まうと思つて、其事を運轉手に話したら、此町の茶亭に車を寄せようとしたのであつたが、もつと田舎びた處がよいと云ふので、更に車を進ませて、十時半ワツデスドン村の怪し氣な一茶亭に憩うた。

這入つて見ると染みだらけの白木綿のテーブルクロスを掛けた食卓が二臺ばかりあつて、其周圍に腰をかけるとぐらぐらする椅子が置いてある。それに腰を掛けた。主婦と思はれる女が一寸私達を覗いて奥に引込んだと思ふと暫く經つてお茶と菓子とを持って來た。その菓子はいやに赤い砂糖や黄色い砂糖のかゝつて居る菓子であつた。私達は興に乗つてそれを喰べた。それから裏庭に出て、汚ない便所に這入り、そこに植えてあるチューリップやヒヤシンスや、また紫陽花の咲いて居るのなどを見て、暫く時間を費した。そこへ波斯猫を抱いた主婦が現れたので、その



ロンドン近郊の家の窓から見た様子——主婦、友次郎

主婦を入れて寫眞を撮つたりした。また先きの室内に歸つて見ると、テーブルの上に粗末な帳面が置いてあつた。開けて見るとそれは、この野茶屋にも、ストラットフォード観光客などが休むことがあると見えて、いろ／＼な名前が記載してある。私達もそれに記名した。

名を 書 く や 春 の 野 茶 屋 の 記 名 帳

ピスターと云ふ町を過ぎた。こゝは狩の本場ださうで英國の貴族達が好んで狩に来る所だとのことだ。森が多いのは小鳥が来る爲であらう。青芝の野原は依然として續いて、蒲公英の花は依然として多かつた。

牛 の 牧 場 羊 の 牧 場 春 の 丘
蒲 公 英 の 柵 に せ ま り て 多 き か な

パンベリーと云ふ町を過ぎた。一人の村人が、兩手をポケットに突込んで、マドロスパイプを啣へて人の好ささうな顔をして、私達の車を見送つて居るのが目に止つた。

村 の 門 に 立 つ チ ョ ン ブ ル の 春 煙 草

スコットランドに多いと云ふ、黄色い花のゴースと云ふのが處々に咲いて居た。是は年中咲く花ださうだ。また此邊には、蒲公英の外にデージの白い可憐な花も處々に見えた。

踏 み て 直 ぐ デ ー ジ の 花 起 き 上 が る

梨や林檎の花は佛蘭西や獨逸でも澤山見たが、この英國の村落にも今を盛りと咲いて居た。聽てストラットフォードに著いた。そこにはアボン河が流れてをり、その河を渡つた橋の袂にはシエクスピアの銅像が立つて居り、シエクスピア劇場や、シエクスピアの遺骸があるチャーチが目の前にあつた。シエクスピアホテルと云ふのに這入つて晝食をとることにした。凡てシエクスピアづくめであつた。

そのホテルは木造であつて、其柱も鉋目が粗く、後に見たシエクスピアの家といふのに似た建築であつた。ホテルの案内記によると、チュードル時代の建築になるものださうで、其時分には澤山の商家用として建てられたものであつたが、其後ホテルになつて今日まで來て居るものと云ふ事である。

私達が行つた時分には、それも旅行者であらうか、一組の男女が物靜かに片隅のテーブルに就いて食事をして居つた許りであつたが、間もなく隣室にどや／＼と這入つて來た一團の人があつた。ホテルの者が私の和装を物珍しく思つて居るので、松本君が私の事を何か話して居たやうであつたが、其爲であらうか、私達が食事を執つて居る時分に、ボーイが一人の男を私の傍に連れ

て来た。その人が差し出す名刺を見ると、Mr. B. Iden Payne とあつて、是はシェクスピア劇場の總支配人でもあり、また演出家でもあるとの事であつた。シェクスピア劇場では、シェクスピア記念劇を十二週間興行するのださうで、既に四月の十三日から始つて居るのであつた。今日は四時から「The Taming of the Shrew」が始まるから見に来て呉れと云つた。その一團の人は、皆シェクスピア劇に關係して居る人であつて、男女優もそこに混つて居た。それ等の人はテブルに著いて食事をしながら、笑ひさゞめいて居た。

そこを出て、シェクスピアの家と云ふ、木造の古びた二階建の家に行つた。その家で誕生し、また住んでゐたと云ふ事であつた。中に入ると、其時分のテブルとか、煖爐とか云ふものが其儘残つて居つた。それから澤山の書籍、原稿、手紙、肖像畫等があつた中に、紀元千六百〇三年に書いたと云ふ手紙があり、初版のシェクスピア全集、即ち一千六百二十三年版で、三十七の全曲を集めたと云ふのがあり、サー・トーマス・ノースナイ著の「ジュリアス・シーザー」、「シーザー、アントニオ、クレオパトラ」と云ふ書物や、その他英吉利の歴史の古びた本などがあつて、それ等が戯曲の材料になつたのだと云ふ事であつた。シェクスピアの肖像畫が澤山あつたが、その肖像の外に、孫娘とその婿との像があつて、その孫娘が死んだ一千六百六十八年に、其血統は斷

えてしまつたのだと説明者が云つた。また壁と云はず柱と云はず、隙のある處はこの家を訪問した人の名前の落書で一杯であつて、カーライルやサー・ウォルター・スコット等の名前はこゝにあつたと云つて指さし示した。それからバイロンの名前もこゝにあつたが、誰かゞ取り去つて今は無いと云つて、壁の缺き取られた痕を指さした。

シェクスピアの常に上り下りをした梯子段と云ふのは今は朽ちて居て通れさうもなく、一方の梯子段を下りて裏庭に出ると、そこには芍薬が蕾み、梨や林檎が花を著けて居り、その他見なれない木が規則正しく植つて居つた中に、ホーソーンが青く芽を吹き出して居た。

其邊を逍遙して居ると、番人が帳面を持つて来てそれに署名を求めた。先刻二階にあつた署名帳に既に署名したと云つたら、是は特別の署名帳だと云つた。そこへまた老婆が一人出て来て、小さい帳面に署名を求めた。そのお婆さんを入れて一行の寫眞を松本君が撮つた。

庭傳ひに表に出て、向ひ側の土産物を賣る店に立つて居ると、シェクスピアの家の二階の窓から、最前の婆さんが身體を突き出して、手を振つて居るのを見たので、こちらも手を振つてそれに答へた。

それから、シェクスピアの妻であつた人の生家と云ふ家に行つた。

それからまた、シエクスピアの遺骸が置いてあると云ふお寺に行つた。そのお寺は古びた大きなお寺であつたが、私等が這入つて行くと、オルガンの音が聞えて居て、番人の他に唯大きなパイプオルガンを弾いて居る人が一人居るばかりであつた。静寂な寺にパイプオルガンの響き渡つて居るのが良い心持であつた。シエクスピアの遺骸は柩に納めたまゝ、祭壇の傍に置いてあり、窓の色硝子を通して、春の日が微かに其柩の上に落ちて居た。シエクスピアの古風な像が壁の一隅に置いてあつた。歸る時に見たらば、硝子箱の中にシエクスピアが一千五百六十四年に生れた時の記録と一千六百十六年に死んだ時の記録とが展げたまゝ這入つて居つた。

オルガンの鳴り渡りたる春の寺
色硝子透す春日や棺の上

一體にこのストラットフォードの町は上品で、閑静な町であつた。
三時歸途に就いた。

よく肥えし羊の群や牧の春
羊の毛未だ刈らずよ牧の春

オックスフォードに廻つた。大學町らしく、こゝも閑静で良い町だと思つた。あれも教室、あ

れも教室、これも教授の家、これも教授の家と、教へらるゝまゝに目送しつゝ忙しくその町を過ぎて行つた。ハイデルベルヒで逢はなかつたラッドブルフ博士を訪ねて見たいと思つたが、自動車に歸りを急いで居つたので、残念ながら止めた。

テムス河畔の、ボートレースで有名なヘンレーと云ふ處に來た。水には白鳥が浮いて居て、遠く漕ぎ上つて行くボートがあつた。松本君が活動寫眞を撮つた。

夕暮の村を非常なスピードで駆けつた。村に、賣家と書かれた札の澤山出て居るのを見て、戯れに、

賣り家を買はんかと思ふ春の旅

自轉車に乗つた女が澤山に野道を此方に駆けて來るのに出逢つた。是は工場に通つて居る女が今退け時に、村に歸つて居るのだとのことであつた。

ウキンザー・キャツスルを見上げて過ぎ、その前の並木のある廣い道を暫く車を止めて眺めた。こゝは陛下が城を出て散歩をなさる道であるといふことであつた。

橋を渡つてイートン中學校の傍を通つた。

シルクハットに燕尾服の校服を著た十二三の中學生が其町を通つて居るのは、一寸寶塚の少女

歌劇を見るやうであつた。

リツチモンド公園を抜けて、三菱支店長の川村晋二郎君の邸に入つた。楨原、河西夫妻、小柳君等一同の招宴であつた。裏庭に出て、川村君自ら鋤を採つて耕すと云ふ畑などを見た。こゝも梨・林檎の花の盛りであつた。例の通り宴會の後が俳句會となつた。川村君に、梨花と云ふ號を附けた。

半日を土いぢりして梨花仰ぐ 川村梨花
ブルーベル色鮮やかな牧場かな 川村夫人
咲く林檎花簪の如くなり 楨原覺
梨の花高原の春遅々として 小柳才喜
句座たのし春の煖爐の赤く燃ゆ 楠窓
日もすがら羊遊べり丘の春 覺人
しばらくは耕馬彼方へ進みけり 一朗
牧廣し羊の群に春の雲 章子
頭を下げて耕馬動かす鴉飛ぶ 友次郎

蒲公英にオツクスフオード近きかな 虚子
夜更けて楨原君に送られて宿に歸つた。楠窓君は船に歸つた。箱根丸は明一日早く倫敦を發ち八日マルセーユで私達を待受けてゐるのである。

キユー・ガーデン吟行

五月一日。(金曜)

朝飯十時。

午後一時頃松本君が来て、ペン倶楽部の講演原稿を筆記して呉れた。

今度の途上の自分の句を書き抜いて、今夜の日本人會の講演の材料とした。

八田、松本、友次郎、章子等が傍で句を作つて居るので、私も二三句を投じた。その時の選稿は散逸して分らなくなつた。

ストーヴは燃えをり主客庭にあり
ストーヴは燃えをり客を待たせ置き

七時頃カヴェンテツシユ・スクエアの日本人會の講演會に出席した。日本人會の委員長であり三井の支店長である伊藤與三郎君は、コツペンハーゲンの或る會合に出席して居つたのが、今日飛行機で歸つて來たとの事であつた。伊藤與三郎、加納久朗、十時晴雄、力石壽武、松川梅賢の諸君と松本君、有吉君、私等三人が食事を共にした。

食事が終つて講演會に移つた。松本、井上、有吉の幹事格の三君を始め聴衆四十人許り、その中に南條眞一、池田徳眞、駒井權之助の諸君があつたのが目に止つた。

伊藤君の自動車に送られて宿に歸つた。

十二時過ぎ寝。

五月二日。(土曜)

池田徳眞君は、池田仲博侯の令息である。仲博侯が傘人と號して俳句を熱心に作られて居る時分には、徳眞君兄弟姉妹は皆幼かつた。一日、傘人侯は私を招かれて、父君の徳川慶喜、弟君の

慶久公等と同座したことがあつた。其時候爵夫人は澤山の、慶喜公にとつてはお孫さん達に當る方々を並べて、同吟で小話を語はされた事があつた。慶喜公は、よく出來たくと褒められて其お孫さん達の顔を見渡してをられた。そのお孫さん達の中に、徳眞君は居たのである。それからもう二十年近くの歳月が流れた。今こゝに圖らずも徳眞君に會つて、當時の昔語をするのであつた。徳眞君は昨夜特に私の宿に來て一泊して、昨夜は夜が更けたので其儘にして、今朝食卓を共にしながら、しみじみと昔語をしたのである。徳眞君はオックスフォードに學んで居たのであるが、令閨との間に既に二兒があるとの事であつた。

急に思ひ立つて、八田君を先導として、ブリチツシユ・ミューゼアムに行つた。流石に規模の雄大なのに感服した。それに館員が悉く鄭寧であるのが氣持がよかつた。

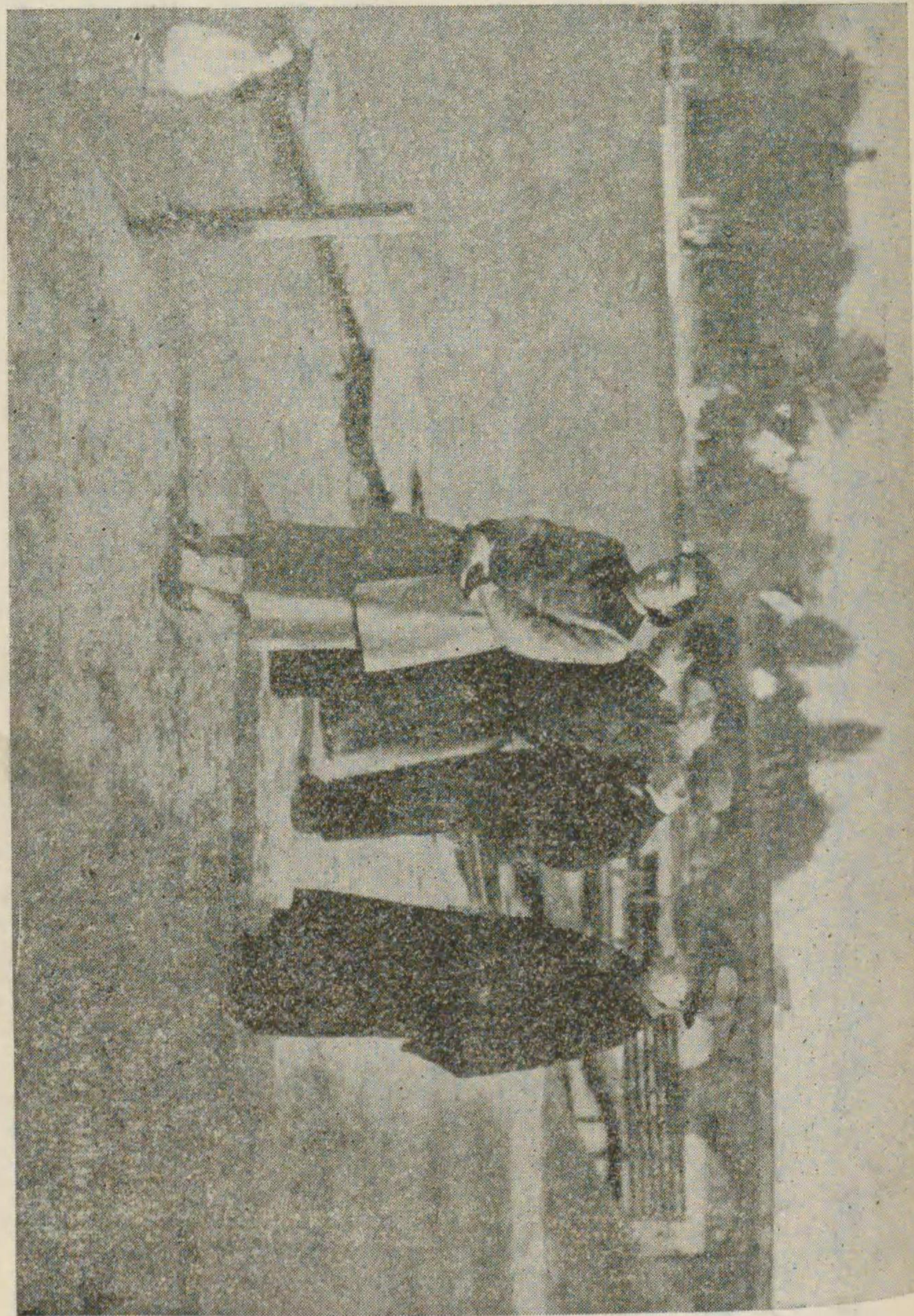
二時頃宿に歸ると、もう松本君が待つて居た。晝飯を食つて居る處へ伊藤君が見えた。その車に乗つて今日の吟行の場所キュー・ガーデンに行つた。

キュー・ガーデンは、アネモネの花のさまざまの種類が澤山に植ゑてあつて美しかつた。石楠花の花も咲いてゐた。倫敦の都人士も澤山にこの公園に出てをつた。梨の花や、日本の櫻花などが咲いてをる芝生の間を、三々五々打連れて歩いてをつた。巴里や伯林と同じく倫敦にも蹇や僂僂

の人が多かつた。之は日光不足の爲め生ずるものであらうとのことであつた。

花	あ	れば	めぐり	く	て	仰	ぎ	け	り	八田	一朗	
チ	ユ	ー	リ	ツ	プ	生	け	て	あ	り	け	り
大	使	館								十	時	
吟	行	や	花	に	對	し	て	句	を	案	す	
伊	藤	北	汀									
え	に	し	だ	の	花	の	こ	ぼ	る	、	芝	
有	吉	瓦	樓									
若	芝	に	手	押	車	の	親	娘	か	な		
森	脇	襄	治									
噴	水	を	圍	ん	で	赤	き	チ	ユ	ー	リ	
大	林											
英	國	や	ク	ロ	カ	ス	咲	い	て	春	た	
古	垣	鐵	郎									
家	鴨	一	羽	泳	ぎ	去	り	け	り	水	ぬ	
池	田	德	眞									
矢	絣	の	春	著	な	つ	か	し	ブ	ル	ー	
榎	原	夫	人									
チ	ユ	ー	リ	ツ	プ	首	を	揃	へ	て	一	
保	柳	夫	人									
高	塔	の	霞	む	邊	り	に	桃	の	花		
小	野	龍	人									
春	日	さ	す	テ	ー	ム	ス	河	に	舟	か	
保	柳	才	喜									
濼	影	動	か	さ	る	春	の	雲				
小	野	靜	女									

(くーりに自動車停めて—虚子、橋本、一朗、友次郎、真子)



よりそひて腫碧けれ木の芽より 友次郎
 ゆるゝと運べる足に草萌ゆる 章子
 覺あしたへの妻を車に花に曳く 虚子
 花の下また來る彼も足悪し 同
 蒲公英に下り沈みたる雀かな 同
 轉れるブラツクバード人を見る 同
 眞直ぐに歩調そろへて青き踏む 同
 雀等も人を恐れぬ國の春 同
 立ち寄りて學名を讀む梨の花 同
 引き寄せて離せし桃の枝撥ねる 同

公園を出てから、駒井君を訪ねようと思つて有吉君に電話をかけて貰つたが、留守であつたので止め、地下鐵に乗り、チャーリングクロスにて乗り換へ、オックスフォード・サーカスで上つて日本人會に行つた。夕食、披講。この日、古垣鐵郎君も行を共にして俳句を作つた。選句の時

分に池田徳眞君の令弟の朽木綱博子爵も見えて居つた。

國立美術館を見る

五月三日。(日曜)

始め今日メーヤー夫人の所に行かうかと其旨を夫人の許へ八田君が云つて遣つたら、夫人が今日明日のうちに倫敦に出てくることであつた。南條眞一君が、此日シエクスピアの芝居に案内しようと思つて居たのであるが、考へて見ると今日は日曜日であつたので、それが果せなかつた代りに、倫敦見物に案内しようと思つて、自分の自動車を運轉して、私等三人を連れ出した。先づシチー街に車を驅り、印度、埃及等植民地の産業館の立派な建物の並んで居る前を通り、それから新聞街と云はるるフリート・ストリートに入り、モーニングポスト、デーリーメール等の前を過ぎた。大毎の支局もこゝにあるのだと一軒の家を指した。

それから法律家許りが軒を並べて居る處を過ぎ、テームス河畔に出で、サボイホテルの前を過

ぎ、自由黨俱樂部の前を通り、議會、ウエストミンスター寺院を過ぎ、川を隔て、市廳を望み、バッキンガム宮殿を過ぎた。それから一路グリーンニッチ天文臺を志して行つた。テームス河を渡り道を右曲し左折し、どう行つたか分らなかつたが、聽て小高い處の廣々とした處に出た。そこがグリーンニッチ天文臺であつた。先づ建物が小さいのに驚き、次に經度の標識も、たゞ二枚の石が並べて敷いてあるに過ぎないのに驚いた。總てが仰山にないのが却つて敬虔の念を生じた。

それから、どこかで辨當を食はうと云ふ事になつたのであるが、草原に下りて食べるのでは風が強いし、茶店らしいものは無し、一寸困つたが、遂に原つばの中の道端に自動車を止めて、その中で食ふ事になつた。鮪の折を開いて食べ、魔法壘から熱い茶を飲んで舌鼓を打つた。その間澤山の自動車を通り、また大勢の男女が行き過ぎたが、皆不思議さうにこの車内を覗き込んで行つた。私達はそれに構はず食後雑談をし、約四十分許りの時間を其所で費した。一寸武藏野吟行會の氣分を取戻したやうな心持であつた。

歸りには、共產黨員が旗を押し立て、樂隊を雇ひ行列を作つて、町中を歩いて居るのに出會した。メーデーの續きらしかつた。その行列の中に、老婆や若い瘦せた男が居た事が目に著いた。人の良ささうなこゝろした巡査がその前後に附いて歩いて居つたのも興味があつた。

歸りには、テームス河を渡り、セントポール寺院を過ぎた。

大審院の前を通つた。

トラファルガー・スクエアの國立美術館に這入つた。

伊太利のレオナルド・ダ・ビンチや、ラファエルや、ミケランゼロを始め、多くの畫家のものが澤山あつたが、一寸見ただけでは皆同じものゝやうに見えた。獨逸や和蘭や西班牙や佛蘭西などの古畫も澤山陳列されてあつたが、半分許り見て、草臥れたので外に出た。

芝居町を過ぎて間も無く宿に歸つた。

晝寝。

そこへ横光君が突然姿を現した。今この宿へ著いたところであると云ひ、私が出席することになつたので安心したと云つた。今迄に南條君に會ひ委細聞いたものと見えた。私は横光君が態々巴里から見えたことを氣の毒に思ひ、私の出席するやうになつた理由も話した。横光君も倫敦には永く滞在せず、蘇格蘭の方でも旅行して氣の向いたところでもあれば一二泊して見ようと云つてゐた。

松本君が来て、講演の原稿の訂正したのを示した。

伊藤與三郎君が迎への自動車をよこして呉れた。伊藤邸に行く。古垣夫妻、南條夫妻、駒井、松本、私等三人。

食後、古垣夫妻は先きに歸り、それより句會。

色々	の	形	の	火	這	ふ	煖	爐	かな	伊藤北汀					
春	寒	し	煖	爐	の	そば	の	水	仙	花					
ス	ト	ー	ヅ	の	燃	え	盛	る	頃	コ	ー	ヒ	かな	南條眞一	
ス	ト	ー	ヅ	の	黒	々	と	して	春	の	宵	南條悦子			
外	つ	國	の	句	會	五	月	の	煖	爐	かな	松本覺人			
煖	爐	の	火	止	ま	ず	姿	を	變	へ	る	よ	し	友次郎	
ス	ト	ー	ヅ	や	暫	く	立	ち	し	人	の	椅	子	虚子	
ス	ト	ー	ヅ	の	焰	の	も	つ	れ	見	て	ゐ	た	り	同
ス	ト	ー	ヅ	の	焰	の	上	の	煙	かな	同	同			

伊藤君の話に、私の兄が伊藤南汀と云つてかねぐ俳句を作つてをるが、私もこれから作るとなると、一つ名前をつけてもらひ度いとのこと。どうもいゝ思ひつきが無いが、假りに「北汀」と

して置いてはどうか、其うち何か考へようと答へて置いた。

十二時頃宿に歸つた。

此日は、池田徳眞君の外に、令弟の朽木子爵も宿に泊り、しばらく又昔語をして遅く寝た。

また此日來た手紙の中に、松尾邦之助、佐藤醇造兩君のがあつた。是より前、兩君に手紙を出して、俄に箱根丸で歸ることになり、然も倫敦に五月五日まで滞在せなければならぬ事になつたので、かねて佛蘭西ペン俱樂部にも出席の事を松尾君と約束して置いたのであつたが、それも出ない事になり、巴里にも一日半ほか居られない事になつたと云ふ事を云つて遣つて、せめて其一日半の間に、「はいかい」と云ふ詩を作つて居る人二三人だけにでも會ふ機會を與へて呉れば仕合せだと云ふ事を云つてやつた。兩君の手紙は其返事であつた。

御手紙を拜見しました。ペン俱樂部に御出席と聞き、大いに安心しました。實は、駒井君の

電報でびつくりして二三日横光君に會つて交渉するので駈け廻りました。

それから、フランスの俳諧の大家、(こちら風の)ジュリアン・ヴォーカンス氏が二三フランス俳諧派の人を集めて、六日の晩か七日の晩(先生の御都合のいゝ日)夕食を共にしたいと云うてゐます。同氏のことは日本で大分知つて居る人があり、後藤季雄氏や堀口大學氏が紹介

して居ます。小生の佛文文學史の中にも書いてあります。勿論小生も出席、通譯の勞を執ります。

友人を招く都合上、六日か七日か確かな處を電報で御知らせ願ひます。七日は出發で御多忙でせうからゆつくり話をする爲六日の方が好都合ですが。(後略)

それから佐藤醇造君のは次の通りであつた。

拜啓。倫敦よりの御葉書有難う存じました。六日の晩には松尾君の奔走により、佛人ヴォーカンス氏(佛國に於ける俳句愛好者第一人者)が、先生を主賓として晚餐會を催す由です。(中略)尙七日の午後には私の主催で、佛人數名を招き、御茶を共にし度く思つてをります。是亦御出席願度う存じます。

御多忙の處へ、甚だ御迷惑で御座いませうが、御都合の程至急御回答下さいませ。先は取急ぎ當用のみ。

五月四日。(月曜)

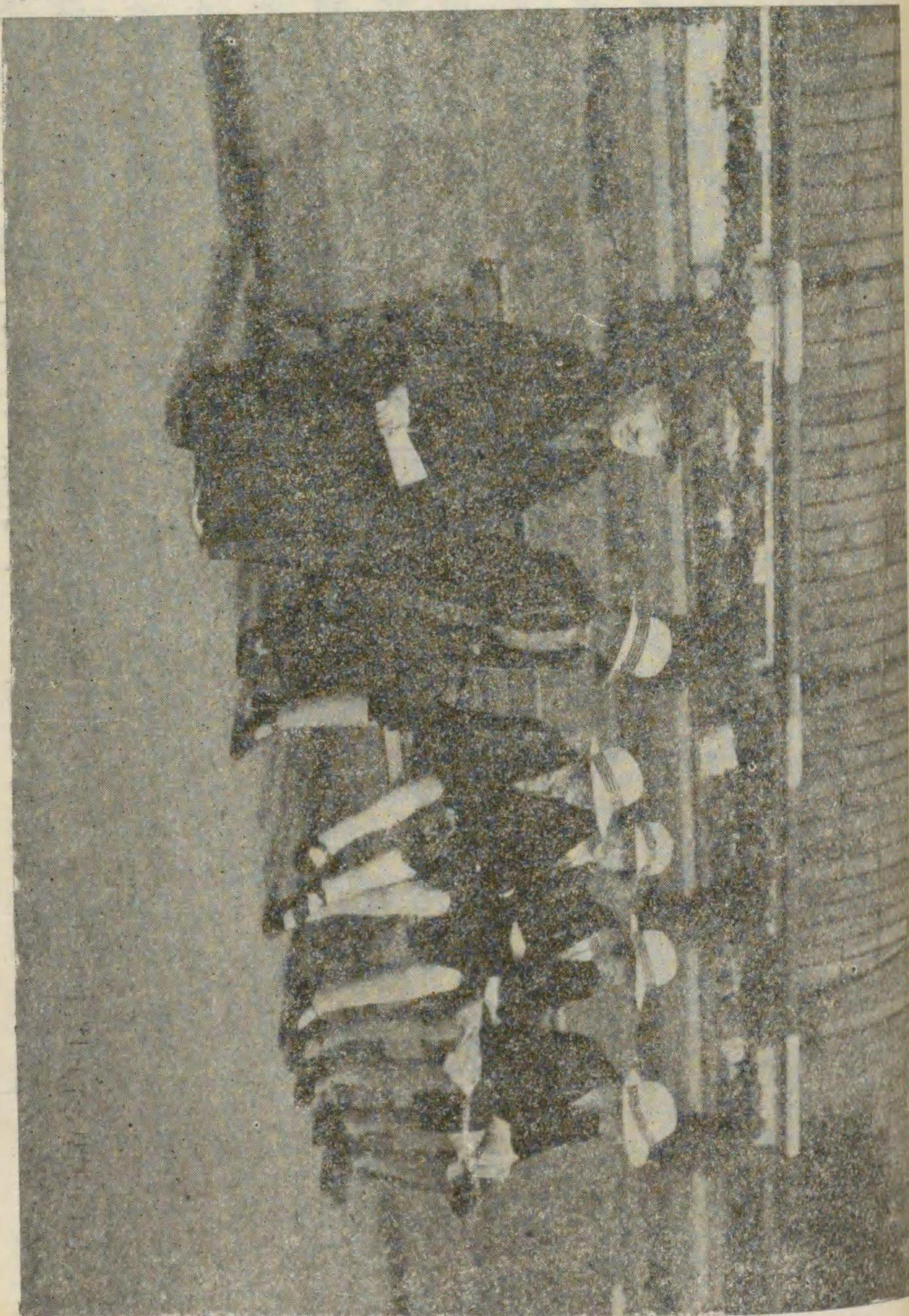
古垣夫妻が宿まで見えた。前夜古垣君が特に國立美術館のレオナルド・ダ・ヴィンチの

“*Virgin of the Rocks*” に就いて話をして、その繪の良さを云ひ、もう一度出直して行つて見なしかと云つて、態々立ち寄つて呉れたのである。席にあつた松本、八田兩君をも伴ひ、七人でまたトラファルガー・スクエアの國立美術館に出かけ、先づ一番にそのダ・ヴィンチの繪の前に立つて古垣君の説明を聞きながら味つて見た。それから、更に二三室の繪を見直して、次に普通にテート美術館と呼ばれてをる、ミルバンクの國立美術館に行き、近代畫家のものを見た。Gauguin の “*Flower Piece*” や Picasso の “*Flowers*” や “*Femme a le Chemise*” や Renoir の “*La Premiere Sortie*” や Utrillo の “*Place Tertre*” や Van Gogh の “*Sun Flowers*” や “*The Yellow Chair*” などが眼に残つた。殊にゴッホの繪は、子規の晩年に病床で書いた寫生畫を思はしめるものがあつた。その他いろいろなものを見たが、見る傍から忘れて行つた。

それから、貧民窟と云はれて居る、古物商の多くある處を過ぎ、ダウニング街にある總理大臣官邸を見た。此官邸は極めて質素なものであるが舊態を改めずにあるものださうである。さういふところに英國の偉大さを見ることが出来る。それから昨日見たテームス河畔の自由黨俱樂部に車を止めた。そこで八田君は別れて、メーヤー夫人の處へ行つた。メーヤー夫人は昨日から倫敦に來て、カールトンホテルに泊つて居るのである。

私達は古垣君夫妻に導かれて、その倶楽部の樓上の一室に這入つて行つた。古垣君は朝日新聞記者として、この會員になつて居るのださうである。其一室は倶楽部員の家族等も來ることが出来るのださうで、私達の他一二の家族連れも來て居つた。テムス河を見下ろす眺望の良い立派な室であつた。こゝは自由黨全盛の時代に建てた倶楽部であつて、今日では自由黨は萎微振はないのであるが、然し其黨派に屬する名士は尙多いのであつて、今日でも維持して行くことが出来るのであるとの事であつた。そこでお茶を飲んで居ると、八田君がメーヤー夫人を連れて來た。メーヤー夫人には東京の丸ビルで一度會つた事があり、其後昨年倫敦の俳句會の發會式に臨んで、俳句禮讚の演説をした事があると云ふ話などを聞いて居るので、親しい心持で應對した。古垣君夫妻は大使館招宴の時刻が迫つて居る爲に先づ去り、私達は残つて、メーヤー夫人と明日のペン倶楽部席上の講演通譯の事の打合せをした。松本君はポケットから講演の原稿を取り出して、それをメーヤー夫人に渡し、翻譯の事を頼んだ。

メーヤー夫人は待たしてあつた女祕書と共に歸り、私達は松本君に伴はれてリゼントストリートで車を下りて、オースチンリードの建物の横幅の廣さを興がりつゝ、暫く町を散歩、ピカデリーのスコットと云ふ料理店の地下のバーに這入つた。



キユー・ガーターにて女學生の仲間入をしたる遊子

そこでは、女を擁した男が二人来て、いきなり酒場の前の高い椅子に女を抱き上げるやうにして乗せ、その左右に立つて、諸共に盃を舉げて居るのや、老人夫婦が来て其前に酒を注いだ盃を置き、徐ろに新聞を読んで居るのや、最前から盃は空にしたまゝで卓を動かずに居るのや等が目にと止つた。

そこを出て、松本君に分れて宿に歸つた。

宿の主婦は、紀州田邊の人で、俳句の嗜みがあるやうに聞いて居たが、此時話を聞くと、生家の父が大變俳句が好きであつて、子供の時分から其話を聞かされて居り、従つて父に交友があつた田邊の俳人は大概知つて居るとのことであつた。その父と云ふ人は、北畑耕雲と云つて、既に故人になつたが、熱心なホトトギスの投句家であつて、或時斯ふ云ふ二句が雑詠に出て、小豆飯を炊いて祝つた事があると云ふ話もした。然も後の句は、雑詠句評會に上つたので、大變に喜んだと云ふ事であつた。

泊り 人 皆 こち 向きし 榎 火 かな 耕 雲
年 を 守 る 榎 火 明 り に 兄 弟 同

この主婦も多少の俳句を作つたものがあるらしかつたが、それを聞き取る餘裕もなく過ぎ去つ

たのは残念であつた。

十一時になつて横光君が大使館から歸つて來たので暫く話した。今日の大使館の招宴には、私達も招かれて居つたのであるが、三日に見る筈のシエクスピア劇が、生憎日曜になつて居たので特に願つて大使館の了解を得て、今晚觀劇に赴く筈になつて其を辭退したのであつた。ところがまた生憎外題の變り目であつて、今日一日が休みであると云ふ事が今朝になつて分つた始末であつた。十二時過ぎになつて寢に就いた。

P.E.N.クラブにて講演

五月五日。(火曜)

九時過ぎ起床。

三菱の自動車を借用して、友次郎と共に先づ大使館に行き、藤井代理大使に會つて、昨日の招

宴缺席の挨拶を述べ、それから伊藤三井支店長、川村三菱支店長、齋藤郵船支店長を訪うた。

倫敦街上では電車自動車の数は非常に多く、それに町幅は割合に狭いので、混雑しさうに思はれるが、私の觀た處では、それが餘り混亂の狀を呈せず、順序よく運ばれて行くのは、その運轉が非常に落付いて居るのに原因するのではあるまいかと思はれた。然し、統計上に上るてれ等の事故は可なり數が多いとの事であるが、見た目には安心して居られる心持がするのであつた。この日たゞ、貨物自動車の飲料水の壘を詰めた籠が一個路上に墜落して、壘の破片が散らかつて居るのを其邊の店の店員が出てそれを丁寧に掃除して居り、自動車は兩方に數臺止つて靜かに其掃除の済むのを待つて居るのを見た。我が自動車も其間に挟まり、空しく路上に時間を費した。

横光、細川、八田君と晝飯を共にした。實は今日、この常盤別館を引き揚げて、ハイドパークホテルに引き移ることにしたのである。常盤の主人夫妻はまことに朴訥仁俠、面白い人であるので、こゝに泊つてゐるのは氣樂でいゝのであるが、一晩は英國のホテルにも泊つて見てはどうかと云ふ人の勧めに従つたのであつた。

四時、伊藤君の自動車で、荷物を引き纏めてハイドパークホテルに行つた。前から交渉してあつたのでベッドを三つ用意して置いてくれた。

そこはハイドパークを前にして景色が良く、可なり古風な、純粹の英國式の宿屋であるとの事であつた。私は草臥れて居つたので一時間許り晝寝をした。

松本君が来て、メーヤー女史と協力して持へ上げた翻譯の原稿が漸く出来たと云つて、タイプライターに打つたものを持つて来て呉れた。

三菱の川西ひで子夫人、三井の小野しづ子夫人が章子の日本服を著る手傳の爲に、わざわざ来て呉れた。著替が済んで兩夫人は歸つた。

間もなく伊藤君が見えて、伊藤、八田、私達三人が皆其車に便乗して途中にカールトンホテルに立寄つて、メーヤー夫人を同乗させ、今日のペンクラブの會場であるバガニーホテルに行つた。既に澤山の自動車が其前に止つて居つた。

その控室には、人が早や一杯であつたが、私達が日本服を著て這入つて行つたので早くもそれを認めたものであらう、幹事のオールド君が来て、私に挨拶をした。傍を見ると、横光君も既に來て居り、横原君や大林君や、それに古垣君の顔なども見えた。婦人も割合に多いやうに思はれた。

一人の丈高い老紳士が来て、私の前に立つた。その人は今日のチエーマンの、クラマー・バ

イング氏であつた。そこへ駒井君も来た。間もなく宴會が始つた。私はAテーブルの、チェアマンの右手の椅子に腰を下ろし、その右に駒井、次に横光、次に章子、友次郎と云ふ順に坐つた。宴半ばに寫眞を撮つた。珈琲も出てしまつた後、バイング氏は徐ろに立ち上つて、一個の木槌を持つて卓を叩き、物音の靜まるのを待つて次の挨拶をした。

先づオースタラリアのカスリーン・モンベニー女史の來會を謝し、次に日本の横光利一君と印度のラジヤゴバラ・ラオ君の來會をも謝します。殊に横光君は日本の有数の新進作家で、その作が、今や日本に於て英語に翻譯されつゝあると云ふ事を聞き、最近この倫敦に現れる事を待つて居ります。それから、今夜の主賓高濱虚子君の來席を謝します。今日は五月五日であるが、日本では今日を端午の節句と稱し、男の子の目出度いお祭り日であります。私はこの部屋に這入つて二つの失望した事があります。一つは、日本の國旗が掲げてなかつたこと、もう一つは、こゝに鯉幟が立つて居なかつた事であります。是は今夜の幹事の手落と云はねばなりません。

THE P.E.N. DINNER
HELD AT
FAGANI'S RESTAURANT, GREAT PORTLAND STREET, W.1.
Tuesday, May 5th 1936.

---000---

Chairman: L. Cranmer-Byng

Guests: Mr. YAKAHAMA KYOSI (Japan)
Mr. Yokemitsu (Japan)
Kathleen Monypenny (Australia)
J. Rajagopala Rao (India)

Table

M. Mary Abbott
N. A. S. P. Ayer
D. Mrs. Livingstone Baily
C. Mr. C. Balankura
G. Colby Borley
E. Emilio Carver
C. David Carver
C. Aniya Chakravarty
A. L. Cranmer-Byng
A. Mrs. Cranmer-Byng
E. Gladys Davidson
C. Jane Doe
D. Miss Drew
E. Mortimer Epstein
D. Mrs. Stuart Eskine
C. Renee Felbermann
G. Mr. S. Fukuoka
E. Mrs. Fullop-Muller
D. Herbert Furst
E. Mr. F. Furukaki
C. Kanti Ghosh
D. Kathleen Gibberd
E. Maymie Greig
C. Ada M. M. Hales
G. Cicely Hamilton
D. Mr. Hatta
E. Mrs. Hobman
D. Philippa Hole
A. S. I. Hsiung
C. Mrs. Hsiung
D. Mr. Y. Ito
A. Gonnoske Komai
E. Takahama Kyosi
A. Mr. Kyosi, Jr.
A. Miss Kyosi

Table

B. Henrietta Leslie
E. Leon M. Lion
C. Mrs. Lowe-Porter
A. Rev. Sydney Luckman
D. Mr. S. Makihara
E. Basil Mathews
B. Mrs. Mathews
D. Mr. Matsumoto
A. Miss Monypenny
A. R. H. Mottram
B. Mr. S. Nanjo
A. Edith Nepean
A. E. W. Nevinson
C. Bernard Newman
E. Neta Obermer
E. Seymour Obermer
D. Mr. Ohbayashi
C. Mr. K. Okata
G. Hermon Guild
D. Press Association
D. R. C. Frowse
C. The Hon. Mrs. Ramsey
A. T. Rajagopala Rao, B.A., L.T.
C. Betty Ross
B. Henry Simpson
C. Sylvia Stevenson
G. Gloria Storm
C. Roy Titus
D. Lily Tobias
D. P. V. Tobias
E. Miss E. L. Tottenham
D. Mr. Venkataram
E. Margharita Widdows
E. Mr. Yanai
A. Mr. Yokemitsu
C. Ernest Young

名人席出ブランクンベ

THE P.E.N. DINNER
 HELD AT
 PAGANI'S RESTAURANT, GREAT PORTLAND STREET, W.1.
 Tuesday, May 5th 1936.

Chairman: L. Cranmer-Byng
 Guests: Mr. TAKAHAMA KYOSI (Japan)
 Mr. MOKOMITSU (Japan)
 Kathleen Monypenny (Australia)
 J. Rajagopala Rao (India)

TABLE "A"

L. Cranmer-Byng
 Takahama Kyosi Kathleen Monypenny
 Gonnosuke Komai R. H. Mottram
 Mr. Yokomitsu Mrs. Cranmer-Byng
 Miss Kyosi H. W. Nevinson
 Mr. Kyosi, Jr. Mrs. Hsiung
 Edith Hepean Mr. Shih-I. Hsiung
 Rev. Sydney Luckman T. Rajagolela Rao

名人ノブータ

私は俳句に就いては
 詳しく知らないが、
 宮森麻太郎氏の著述
 によると、俳句は數
 百年前に起つた文學
 で、五七五の三節か
 ら成る十七音の詩で
 あります。我々がこ
 の俳句の眞髓を掴む
 事は非常な困難な事
 ではあるが、俳句の
 數百年の歴史に現れ
 た大きな作者芭蕉、
 蕪村、一茶、それに

續いて子規、さうして其後を受け継いだのが、今夜來賓の光榮を得た、この高濱虚子君であ
 ります。この作者は後に我々に御話し下さるが、自分が此處にその作品二三を紹介しますすれ
 ば、

白藤を見し目に牡丹かゞやけり
 高波の上にあがくや春の月
 蝶々のとまりかねたる風の百合
 秋風や眼中のもの皆俳句

その意味は大體斯うであらうかと云つて一々説明し、最後に虚子君の通譯者メーヤー夫人を
 紹介すると云つて腰を下した。(松本、八田君の意譯による)

これより前、私の傍に来て控へて居つたメーヤー夫人は立つて、次の如く挨拶した。

通譯するに當つて英吉利人でなく、日本人になつた積りで、高濱先生の云はれる事を私或
 は私達と云ふ風に申上げて行きますが御含を願つて置きます。

さて高濱先生は、日本に於ける偉大なる詩人ですが、その御講演を私が通譯致します事は、非常に恐縮なであります。また非常に光榮に思ふのであります。(松本、八田兩君の意譯による)

そこで私は立上つて別項の講演をした。(別掲「倫敦P・E・N・クラブにて」参照)

それから駒井君が、前夜日本人會の講演の時、私が讀み上げた今度の旅中の俳句を、英詩に譯したものを朗讀した。

それから又バイング氏が立ち上つて、今日出席した支那の熊式一夫妻(詩人、劇の翻譯者)、暹羅のバラクラ(作家)、亞米利加の Miss Betty Ross, フダベストの Miss Fellman 等を始め、他の二三の外國の P. E. N. の會員を紹介した。見渡した處、印度人等も數名居たやうであつた。それから又、バイング氏は語を繼いで、

五月五日は、印度のタゴール氏の七十五回の誕生日である事を思ひ出しました。それを祝

ふ爲に、皆さんの名に於て、左の通りの祝電をし度、と思ひますから、御賛成を願ひます。

「我々東西の作家が茲に集つて、遙かに貴下の七十五年の御誕生を御祝申上げます」

それで此夜の會合は終つた。日本人で來賓として此會に出席したものは、前記の人々の外に、榎原覺、南條眞一、大林等の諸君があつた。

伊藤君の自動車に送られて、ホテルに歸つた。

ヴォーカンス氏招宴

五月六日。(水曜)

朝、ホテルの窓からハイドパークを見渡した。乗馬の人が澤山砂利の敷いてある、木の間の乗馬道を通つて居るのが見えた。その中には、婦人の乗馬姿も澤山見受けることが出来、中には、

馬にギヤロツピングを掛ける勇ましい婦人もあつた。

食事最中に、常盤の主人岩崎君が来て、荷物の世話などして呉れた。そこへ松本、八田兩君が来てヴィクトリア・ステーションに私達を送つて呉れた。見送人、川村、伊藤、松本、河西夫人、八田、岩崎の諸君。

九時發車。プルマン會社のゴールデン・アローと云ふ贅澤な車に乗つた。真中にテーブルがあつて、其兩側に四脚の椅子がある特別の一室であつた。非常に天氣が良く、稍々暑さを催す位であつた。

汽車の沿道は蒲公英が澤山にあつたが、ふと見ると、馬大王等もあつた。

牧場が連つて居つて、羊が澤山居つた。

一つの牧場に草刈器械が柄を逆様にして放り出してあるのが、ふと目に止つた。

百姓家の窓に蒲團が干してあるのに日が當つて居つた。二つ並んで居る煙突の片方からは薄い煙が出て居つた。

間もなくドーヴァーと云ふ驛に著いた。十二時頃でもあつたらうか。

英吉利の船でドーヴァー海峡を渡つた。

佛國のカレーと云ふ驛から、一時半頃乗車。五時頃巴里著。

上野君が迎へに来て呉れて居た。直ちに Kiebar 街のマゼスチックホテルに行つた。そこへ松

尾君が一青年を伴つてやつて来た。その青年は Alfred Smoullar と云ふ人、"France-Japon"

と云ふ一冊の雑誌を私に示して、是に何でもよいから話をして呉れとの事であつた。上野君は間

もなく歸つて、松尾君とスムーラ君と共に Julien Vocance 氏を訪ねる事になつた。車を佐藤

醇造君の事務所に寄せて誘つて行つた。

ヴォーカンス氏の家に行つて見ると、先づ細君が喜び迎へて、通された室には二人の老人が話

して居つたが、立ち上つて私達を迎へた。それは主人公と Albert Poncin と云ふ人であつた。

引き合はされて、二三の雑談を交へて居る中に、間もなく別室の食卓に導かれて、家族料理の御

馳走になつた。

ヴォーカンス氏夫妻は御馳走を私達に勧めるのに餘念がなかつたが、その間に、ボンザン氏は

次のやうな話をした。

一千九百年頃 P. L. Couchoud と云ふ醫者が、日本に赴いて、首下り病を研究して歸つた。

首下り病と云ふのは瑞西と日本にある許りの病氣であるさうな。その時俳諧と云ふ詩が日本にあ

ることを知つてそれを佛蘭西の詩壇に傳へた。私や、こゝに居られるヴォーカンス氏がその話を聞いて、それから「はいかい」と云ふ三行詩を作り始め、それが段段人々の間に傳はつて、一時は好奇心で随分仲間も出來たが、今やつて居るのは少數だと話した。(友次郎通譯、以下友次郎、松尾、佐藤君等の通譯による)

ヴォーカンス氏も其話を引取つて、當時の事は書物があつて、すつかりそれに記述してある、ロマンチック時代の冗長性を打破して、新時代の要求に應ずるのに、俳諧の集中性を持つて來た事は時代の要求に應じたものであつた、なぞといつた。

私は五七五の問題を持出して、聞く所によると、五七五のシラブルを採用して居る様子であるが、それは日本語に於てこそ重要なものであれ、佛蘭西語で果たして重要なものであるかどうかと云つた。ヴォーカンス氏は、五七五の日本語に於ける特異性は認めるが、佛蘭西語でも、五七五でやり來つて、別に不都合を感じないといつた。

それから私は、季の問題を持ち出して、日本の俳句では、季と云ふ事が俳句の根柢を爲してゐると云つて、大體季の説明をして、さて季と云ふものを佛蘭西の「はいかい」では如何に取扱つてゐるか云ふ質問を發した。

倫敦キユー・ガデー行

十時時鐘・池田徳眞・友次郎・章子・河西夫人



ヴォーカンス氏は、佛蘭西の俳諧では、季と云ふ問題には今まで觸れなかつた、と云つた。

以上は、友次郎や、松尾、佐藤の兩君を通じて、大體の意味は話す事が出来たが、季の問題になると充分に了解する事が出来ないやうであつた。ヴォーカンス氏は續いて云つた。

一つの椅子があれば、それからの聯想で百の詩でも出来るではないかと。私はそれに答へて、それは詩であつて俳句ではない。何となれば季を外にして俳句はないのだから。若し俳句で椅子がうたひたければ、先づそれに配するに時候のものを以つてせなければならぬ。花の下の椅子とか、涼風に置かれた椅子とか、月を見る椅子とか、ストーヴに對する椅子とかいふ風に。椅子に對する聯想ならば何でも俳句になるとはいへず、唯季に限られたる聯想のみが俳句になるのである、と云つた。ヴォーカンス氏は首肯し兼ねるらしい様子であつた。

クィンシー氏は二十年前、俳句の二つある重大性質の一つ、而も國語の性質上佛國では比較的輕かるべき十七シラブルと云ふ事を傳へて、より根柢的な、より大切な季題と云ふ事を傳へなかつたのであつた。

私達は更に季の問題を繰返して述べ、若し佛蘭西の詩で此季に重きを置いた新しい詩を作つたならば、それこそ佛蘭西の詩壇に一革命を起し得る可能性を持つて居るのではあるまいか、と云

ふ事を云つた。又、季の聯想を伴ふ俳句が如何に簡潔で力強いものであるかを説明した。

それから又友次郎は、日本にも新傾向なるものがあつて、十七字といふ形も季といふことも一切無くしてしまはうといふ運動があつて、一時は盛であつたがすぐに衰へてしまつた、其後も亦それに類した運動が起ることがあるが、常に其に向つて闘つてゐるのが父であると云つた。

ボンザン氏は、「どうも相済みません」と兩手を舉げて降參したやうな表情をして、「二十年間勉強したのより、この一時間の御話を聞いた方が大變な進歩になつた」と云つた。

それから、別室に退いて雑談に移つた。室にはいろいろの物が飾つてあつた。そこには刀の鏢があり、錦繪があり、袖提灯が二つ吊り下げてあつた。それに火が點されてをり、支那か交趾あたりの焼物であらうと思ふものが澤山あり、その他小さい銅像があり、肖像畫があり、それ等ものが隙間もなく飾り立てゝあつた。ヴォーカンス氏は振り返つて、日本の風習は俳諧の如く極く簡潔に飾らるゝのであらうが、此部屋は矢張り佛蘭西風に裝飾してあると云つた。

それから子供の如く老人達もはしやいで、とり澄まして、記念寫眞を撮つた。それから今晚の事を俳句に作つて呉れと云つたので、私は、

日本の花の提灯とも暮ると

と即興の句を紙片に書いて渡した。

スムーラ君は、私が携へて居つた、昨日のペン倶楽部の講演の英譯の草稿を見て居つたが、是を是非“France-Japon”誌上に佛譯して載せ度いからと云つて、其原稿を所望した。それは一枚ほか無いからと云つたら、明日までに別にタイプライターに打つたものを御届けするからと云つて、その原稿に私の署名を求めてそれをポケットに收めた。

佛蘭西でも五七五シラブルを採用したと云ふ事は單に形式の模倣であつて、國語の性質を考慮

スムーラ

A. Smoula

(も名假片)署自君ラームス

して最善の形を選むだものとはいへまいが、こゝに注意すべきことは、それが日本を宗として其形によつたもの、即ち俳諧の發祥地日本を重んじての事ならば、それもまた良からうと思ふ。

次に季の問題は、一夕の談話で是を説明し盡す事は出来ないのであつて、今夜は此宿題を提供したのとゞめて、徐ろに今後の發展を待たうと思ふ。尙ほ松尾君などが今後私の季の問題を論じた書物を佛譯するとの事でもあり、また今後折々の文通で更に意見を叩く機會もあるであらう。

いつの間にか靜かに雨の降つて居る快い夜の町を歸つた。途中、サン・サーンの友次郎の宿に立寄つて主婦に一別以來の挨拶をし、手紙や新聞等の來て居るのを貰ひ、友次郎と一緒にホテルに歸つた。その澤山の手紙の中に、今度の旅行の伴に漏れて少々不平な晴子の手紙に、次のやうな一節があつた。

「四月四日午後十一時、巴里では日本の使ひ古した太陽が當り初めた頃と思ひます。」
十二時寝。

はいかい詩人小集

五月七日。(木曜)

一同朝飯を済ましたる處へ、友次郎の宿の主婦がかねて頼んで置いた章子の洋服が出來て來たのを持つて來て呉れた。昨日電話を掛けておいた宅しづ子さんも來て呉れた。章子は兩人と共に

外出して買物に行つた。

私は友次郎と一緒に大使館に挨拶に行き、三谷参事官と暫く話をし、そこを辭し、友次郎の作曲の教師ビュッセ氏を訪うたが、生憎留守であつた。それから和聲學の教師フォーセ氏を訪うたが、是また留守であつて、細君に面會した。今夜七時十五分頃には或所に招かれて居るから、その前の七時頃には必ず在宅の筈である、是非もう一度訪ねて來て呉れとのこと、時間がありませんれば必ず伺ふが、然し、どう云ふ都合になるか分らぬと云つて、そこを辭した。まだヒューグの教師を訪ねなければならぬのだが、上野君と約束して置いた時間が迫つたので宿に歸ると、間もなく上野君が見え、暫く待つて居ると、森田菊次郎君も見えた。森田君とは初対面であつたが結城素明畫伯の令弟であつて、長く巴里に住んで居る人であり、巴里に行つたならば是非訪ねよと云つて人から紹介狀を貰つて居つたのである。森田君も是非私に會はうと云ふので、此日態來て呉れることになつて居たのである。そこへ章子等も歸つて來たので、著物を片付けて、それを上野君の車に積んで、森田君も、私達も同乗して宿を出で、ケー・ド・ツルネール十五番にある、ツトル・ダルチャン(銀塔)と云ふ千五百八十二年よりある料理屋に行つた。そこは、あひ鴨の料理を食はす處であつた。

千八百九十年頃から、つゞけて行くあひ鴨に一々番號をつけるのださうで、今私等の爲に眼の前で料理して呉る、あひ鴨は、129677 と 129678 との二羽であつた。

だん／＼話を聞いてゐると、森田君は大變な食通であつて、もう二三十年も住んで居る巴里は固より、たまに歸る日本の料理も、天麩羅はどこ、鮓はどこ、鰻はどこと云ふ風に、私等の名前も知らない處を擧げた。また話してゐるうちに上野君も矢張り森田君に近い方であつて、なかなか其道の通であるやうに思はれた。私は一向さう云ふ方には暗い方であつたが、それでも此あひ鴨の料理はおいしく食べた。森田君に分れて、上野君と共に三菱に行つた。用事を済ましてから私等三人は牡丹屋に急いだ。

牡丹屋には、佐藤醇造君夫妻の催になる佛國の詩人達の茶話會があるので、既に大勢の人が私達を待ち受けて居た。

一座の人は皆立ち上つて、私を迎へて呉れたが、其中で山田菊女史に一別以來の挨拶をした。女史の妹君と、フランス人である其母堂とは、鎌倉に住んで居るので、古くからよく汽車などで見受ける事があるのであるが、女史には昭和五年であつたか、滿洲に遊んだ時分に、丁度佛蘭西から日本に行く女史と、任地から歸朝の途にあつた今の武者小路大使と出會して、始めて面晤し

た事があつたのであるが、その後數年を経過して、今度また此地で久し振りに會つた譯である。
佐藤君と女史とは左の人々を私に紹介して呉れた。

René Chalupt	ルネ・シャルユブ
Tristan Derème	トリスタン・ドレーム
Fernand Lot	フェルナン・ロツト
Supervielle	スーペルヴィエル
Meili	メイリ
Robert de Souza	ロベル・ド・ソーザ
P. L. Couchoud	ペ・エル・クーシュユ
Pierre Guéguen	ピエール・グエガン
De Lonza	ド・ロンザ
De Villars(Mme)	ド・ヴィレール夫人
Matsuo(Mme)	松尾夫人

この松尾夫人と云ふのは、松尾邦之助君の夫人である。

山田女史は私に、青い表紙でくるみ、佛蘭西の國旗に擬して三色のリボンで飾つた、一冊の寄せ書の机上に置いてあるのを示して、是はあなたの爲に、席上の皆さんに揮毫をして頂いて私から贈呈するものであると云つた。それには次のやうな詩が書かれてあつた。

巴里牡丹屋に於て

一九三六年五月七日

太陽は夜の緋衣、もえるやうな楓、
砂漠に眠る射手、
私は見た、それは血のやうな一點。

山田 菊子

永遠の森の中で、
大木を伐り倒す。
空虚な地平線が、

Quand la dure noix de coco
 A force d'odysseés chagrines
 Casse sa tête en corozo
 Contre les parois du métro
 Il en sort battant des narines
 Quelque nègre de Capivello
 Qui nous tend de la margarine.

... Mais si par un bon vent poussée
 Elle roule en Mélanésie
 Sur un bel atoll arrondi.
 Voici naître une palmeraie
 Où se retrouvent éveillés
 Tous les oiseaux de Paradis
 Qui formaient en notre pensée

Fernand Joffé

"La lumière que font les âmes déliées"
 (extraît des "Amis de la Frère") poèmes
 Sirey de Villerot

une palette blanche, -
 8.5 tubes de couleurs, -
 soudain un arc-en-ciel recouvre
 une table blanche

Canada 1916

Au Bolanga, Paris
 le 7 mai 1936

高橋彦子先生歓迎會

Soleil, paupere des nuits et pierre des étables,
 Archer samourai qui tendait dans le sable
 Mes yeux pour t'avoir vu un regard de sang -
 Ki Hou Yamada

Dans la forêt sans heures
 On abat un grand arbre.
 Un vide vertical
 Tremble en forme de fût
 Près du tronc étendu.

Cherchez, cherchez, oiseaux
 La place de vos nids
 Dans ce haut sourcil
 Tant qu'il murmure encore
 Les papaviers

Dans un monde de rosée
 Sous la fleur de pivoine
 Rencontre d'un instant

Paul-Louis Couchoud

寄
せ
書
(其
一)

寄
せ
書
(其
一)

L'oubliette
Sur roche n'isape cette oubliette
Mystérieuse comme un loup
Qui rend l'éclat des yeux plus sombre
C'est le tourment d'un cœur jaloux

René Ghailly

Grands sont tes bienfaits
Qui nous sauvent par l'espoir,
Vois-la des sommets.

Robert de Souza

(四其) 書せ寄

粗野なココナツト
はその堅い頭を
メトロの電車に撥
ねられて割つてしま
ふ。
そして今度は姿を
變へて、
カピエロの描く廣
告繪の黒ん坊になつ
て、
深い息を吐きなが
ら巴里の町で、
ココナツトから採
つたマーガリンバタ

L'odeur d'été des jeunes filles
mange la rose et le maïs...

René Ghailly

J'aime beaucoup la poésie
japonaise - et depuis
longtemps.
Tristan Derême

(三其) 書せ寄

横たはつた幹の傍、
銃床のやうにふるへる。
鳥よ、まださゝやきの聞える
この思ひ出の中に、
お前の巢を作る場所を探せ。
スーペルヴィエル
ばら色の世界
ぼたんの花の下で
お目にかゝつたひと時。
ペ・エル・クローシユ
悲しい漂泊の旅にもまれて行く時、

を、
私達に渡して呉れる。

けれどもし、

楽しい追風が吹き送つてくれるなら、

ココナツトはメロネシヤ島の、

圓い珊瑚礁に辿り著いて、

こゝで椰子の森となつて生れる。

そこには我等の夢の中に眠つて居た、

パラダイズの鳥がみな眼を覺まして

住んで居るのが見られるだらう。

フェルナン・ロツト

詩は『解放された魂の放つ光』——「海の魂」より——

ヴァイレール夫人

白い一枚のパレット

幾色かの繪具

たちまち白いキャンバスは虹に蔽はれる。

コンラツド・メイリ

夏の少女の體臭は

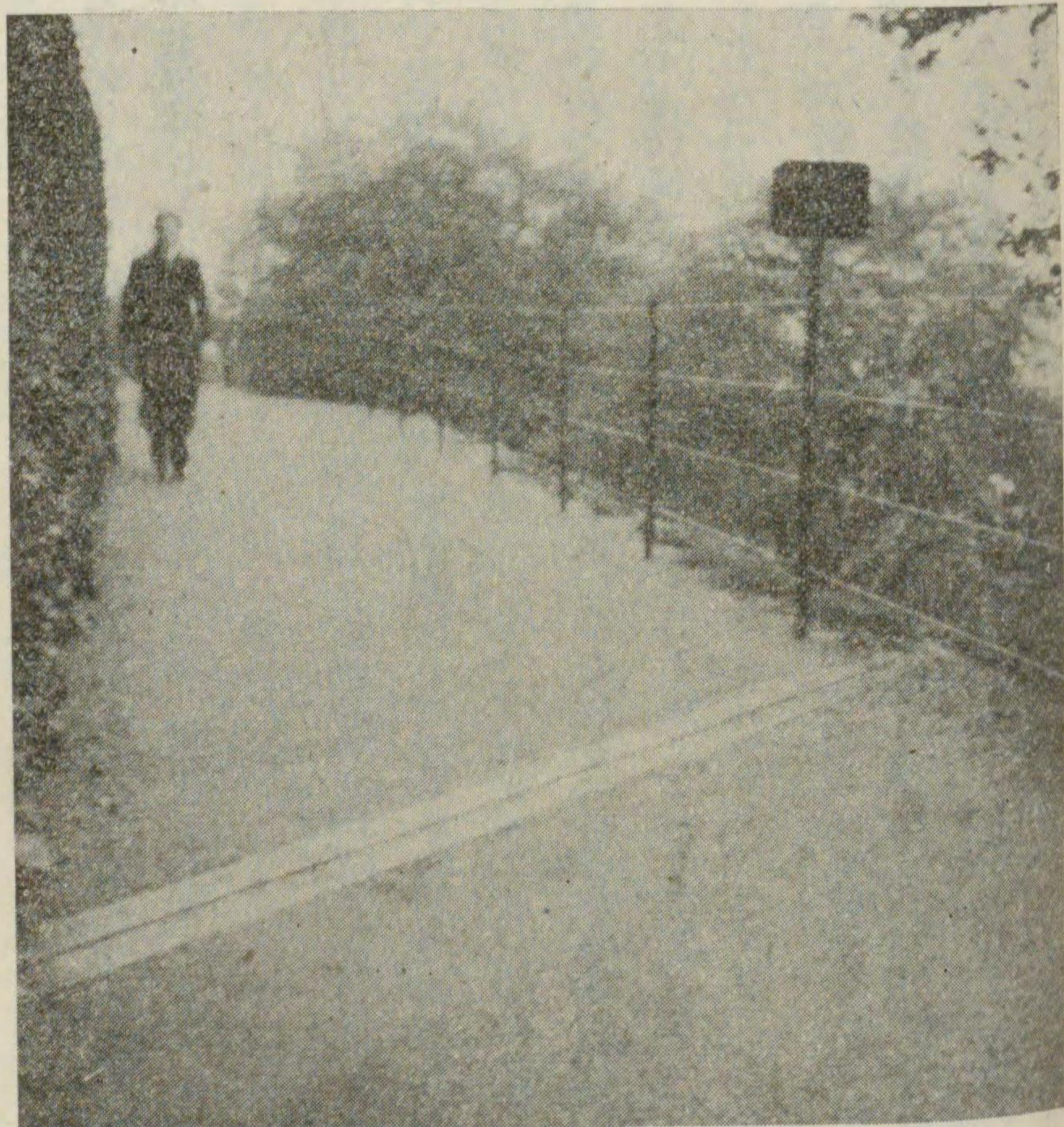
バラと玉蜀黍を結婚させる。

ビエール・グエガン

私は日本の詩を愛する

それは久しい以前から。

トリスタン・ドレーム



偉大なるもの、汝の善行
それは我々の魂を救ふ。
そこに極致がある。

ロベール・ド・スーザ

(以上船中にて山崎朔三君譯)

それ等の詩人が所謂「はいかい」の詩人のみではないやうであつたが、少くとも、日本から來

日よけ傘

あなたの顔の

狼のやうに神祕なそのもの影は

ねたみ心の苦しい姿

それはまなざしを益々陰氣なものにする。

ルネ・シヤルユブ

た私に多少の興味をそゝられた人々である事は分つた。

暫く雑談をした後に、先づ私に俳句に就ての講話をしるとの要求であつた。そこで私は次のやうな話をした。山田女史がそれを通譯したのであつた。

俳句は、十七シラブルの詩として、此地に傳つて居るやうであるが、それよりも寧ろ季の詩として傳へらるべきであつたらうと思ふ。俳句は、季を諷詠する詩とも見るべく、または季の聯想を俟つて作者の感情を詠ふ詩とも解釋して差支へない。十七シラブルと云ふやうな短い詩にあつては、季の聯想に俟つところのものが頗る多いのである。この季の聯想と云ふものは、日本人が多年養ひ來つた情懷であつて、俳句と云ふ詩を成り立たす根柢のものである。

俳句が始つて以來今日まで、四五百年の歳月が経つたが、この季題の聯想が俳句の根柢を爲して居ると云ふことは一貫して變らない。

どうか、此地にも、俳諧即ち今で云ふ俳句を移植しようとならば、この重大な季と云ふものを顧みられる事を希望する。

十七シラブルと云ふ事は、必ずしも重要な問題とは考へない。

別に草稿がある譯でもなかつたので、今この記事を書く時分には記憶も朧げになつたが、大體このやうな事を話したやうに思ふ。

それから山田女史は、佐藤醇造君から聞いた、私が巴里で作つた句を紹介すると云つて、二三の句に就いて説明し、友次郎は其足らざるところを補つた。

昨日ヴォーカンス氏の處で、ボンザン氏が話して居つた、二十年前日本に來て、首下り病を研究したと云ふポール・ルイ・クーンシュートと云ふ人は、ヴォーカンス氏やボンザン氏よりは大分先輩であつて、もう故人になつた人か、生きて居ても七十か八十になつて居る人であらうと思つて居たが、何ぞ圖らん、今目前に其人があらうとは。その年齢は寧ろヴォーカンス氏やボンザン氏よりも若い人のやうに思はれた。そして始終微笑を湛へて私の話を聞いて居た。また、是は後の話であるが、寄せ書に書かれた詩を翻譯して貰つて見ると(前掲)、其は一番私達の考へて居る俳句と云ふものに近いものゝやうであつた。否、その表現法は全く俳句と同じ行き方であると云つてよ。

別室で茶を飲むことになつて、その方に移り、二人三人づつ互に議論を闘はしたり、雑談をして居たが、その時ロベール・ド・スーザ、此人は昨日から會つた人の中で一番老人と思はるゝ人でもう七十以上でもあらうかと思はれたが、始めは友次郎の傍に坐つて居て熱心に議論を闘はして居る様子であり、遂に椅子を私の傍に持つて来て、自分の詩の草稿を擴げてその批評を求めたのであつた。友次郎が傍に居つて大體の意味を翻譯するのを見て居ると、それは矢張り十七シラブルから成つて居る三行詩、所謂「はいかい」の詩である。例へば、「雲が重疊と重なつて居る、私の戀がどうかした」と云ふ類の句であつて、初めの方は敘景で行つて居つても、それは單に或る情を象徴したものに止まつて、直ぐ後には、其情を露はに述べると云ふ傾になつて居るやうであり、私達の俳句とは全く異なつた敘法になつて居た。さうして、多くの佛蘭西の「はいかい」を作る詩人と云はれる人は大概同じ傾向を持つて居るやうに思はれた。其は又獨り「はいかい」派の詩人に限らず、總ての佛蘭西の詩人と云ふよりも、寧ろ西洋の詩人の共通性であるやうに思はれる。東洋の詩、殊に我が俳句にあつては、所謂黙して多く語らずと云ふ主義で、さう露はに感情を敘する事をしない。そこが全然行き方を異にして居るのであると思はれる。スーザ氏に、「私の戀がどうかした」と云ふやうな月並なことは省いて、それよりも自然現象の觀察を充

分に於て、其自然現象を敘するうちに自ら情を運ぶといふ敘し方をしてはどうかと云つたら、首を振つて承知しなかつた。ペー・エル・クレーシユー氏は、私の向ひ側に椅子を据ゑて居たが、それも私達の傍に椅子を寄せて来て、相變らず微笑を含んで熱心に聞いて居た。私達四人がいつまでも話して居る間に、他の人は皆始めの部屋に戻つて、私の來るのを待つて居た。佐藤君が皆が待つてゐるからと再三呼びに來たので、遂にスーザ老人との話を打切つて、その方に向つた。

季題の聯想を土臺にして感情を詠ふと云ふ事と、景色を象徴の道具に使つて抒情詩を作ると云ふ事は、根柢に於て大變な相違があるやうに思はれる。これもまた一朝一夕の談話で盡すことの出來ぬ問題であらう。

スーザ老人は友次郎を掴まへて、

「また會はう。そしてつと話をしよう。」と云つた。

私は、色紙に句を書いて居たものを、丁度此時持つて居た。それは佐藤君を通して三谷參事官の要求があつた爲であつた。その残りがあつたので、失禮だが、若しこんなものでも宜しかつた

ら差上げてもよいと云つたら、皆争つて一枚づつ要求した。殊にスーザ老人は、その句の意味の解釋を自分の腑に落ちるまで熱心に聞いて居た。

六時過ぎに、この愉快な一夕の會合を切り上げた。

そこへ、友次郎の宿の主人夫婦と宅夫妻が来て、同じく牡丹屋で一緒にすき焼をつまき合つて別離の小宴を催した。が、それは非常に忙しい會食であつた。と云ふのは、七時に、若し時間の餘裕があつたら、友次郎の和聲學の教師フォーセ氏を訪はうと云ふ約束をして來たのであるが、何分時間が無いからと云つて電話で斷はらすと、それは非常に残念だ、是非會ひ度いから、自分の今晚會食に呼ばれてゐる先きは自分の弟子の家である、七時過ぎになるのなら、その家へ來て呉れ、一寸でも會ひ度いからとの事であつた。其爲に、其晩の食事は匆々に切り上げて、章子だけ残して置いて、友次郎と二人で出掛けて行つた。

このフォーセ氏は、友次郎が九年前に始めて佛蘭西に行つてから教へを乞うた先生であつて、友次郎を國立音樂學校の生徒にするやうに仕立てたのも此人であり、それから長い間面倒を見て、自分の子の如く可愛がつて呉れた人である。私が今度巴里に行くと云ふ噂があつた時に、友次郎に、來たらば直ぐ知らして呉れ、一度食事を共にし度いからと云ふ話があつたさうである

が、私の巴里に行つた當時は、例の復活祭の祭日つゞきであつて、多くの人は地方に旅行し、巴里全體が休息状態であつたので、始めは未だ一二ヶ月は滞在する積りであつたので、訪問も延び延びになつて居た處、俄に歸る事になつて、遂にこの出發間際に忙しい訪問をするやうになつた譯である。

友次郎と二人が這入つて行くと、非常に喜んで、手を握つて暫し放さず、池内は自分の子供である、音樂上の自分の子供である、此頃はちつとも來ない、それはどう云ふ譯であるか、などと責めて、溫顔に湛へ切れない笑みを湛へて友次郎を顧みた。友次郎の長く世話になつて居る事を深く感謝して、そこを辭した。

それから、ヒューグの教師を訪うたが、是また留守であつた。細君に面會し、挨拶を述べてそこを出た。それから停車場に駆けつけた。

九時三十分發車の汽車にはまだ多少餘裕があつた。そこへ章子は友次郎の宿の主人夫妻、宅夫妻と共にやつて來た。荷物も共に。

そこへ佐藤、松尾の兩君が送りに來てくれ、殊に松尾君は、ヴォーカンス氏の送別のはいかいを持つて來てくれた。

*tu Maître Takahama,
En souvenir de cette lumineuse
soirée de printemps du 6 mai 1936,
où nous nous séparâmes de lui,*

*"Le cœur enrichi de ce pur dépôt:
"Les propos sortis des lèvres du Sage
"Qui nous apportait son calme message."*

Julien Vocance

詩の筆自るたり贈に子虚りよ氏スンカーオヴ

松尾君がこの意味を譯した紙を挟んで置いた
ものには斯うあつた。

ジュリアン・ヴォーカンス氏より高濱先
生への三行詩

高濱先生へ

御別れした一九三六年五月六日
の輝かしい春の宵の思ひ出に。

『賢者の唇から出た、言葉の片々こそ、吾々
への静かな託^かけもの

此清浄な託^かけもので、豊かにされたわが心』

是は意味だけを譯したもので、唯御参考

に供しようとしたゞけです。(譯者松尾)

九時三十分發車。

直ぐ寢臺に寝る。

馬耳塞出帆

五月八日。(金曜)

昨夜の汽車は、私達の仕切られた部屋だけに寢臺を作るのであつて、寢臺は四つだけであつたが、其一つに佛蘭西人が寝て、其人は途中里昂で下りたらしい。その時分からウト／＼して居つて、間もなく白みかけたやうに覺えつゝあつたが、はつきりと眼の覺めた時分は、もう馬耳塞に遠くなかつた。

一寸断はつて置かなければならぬ事は、佛蘭西、獨逸、英吉利で普通晩飯を食ふのは七時半か八時頃であつて、従つて寝るのは大概十二時を過ぎ、朝起きるのも八時か九時頃になるのが普通である。友次郎の宿の主婦は、私が行つた當座は、私が七時頃に起きて風呂を立て、朝湯に入るものだから、眠い目をこすりつゝ、眠いゝと呟きながら朝飯の支度に取かゝる始末であつたが、宴會などで夜が更ける習慣がついて、遂に周圍には打勝てず、其習慣に慣らされてしまつた。佛國を辭する最後の此寢臺車の中でも、私達は矢張り八時九時頃まで眠りつゞけたのであつた。十時馬耳塞著。

直ぐ自動車に乗つて、船へと志した。途中郵船會社に寄つて出國税を拂ひ、酒店に車を寄せて葡萄酒一瓶を買ひ、西班牙人や伊太利人や亞刺比亞人やが聲高に呼び賣りして居る町中を抜けて波止場に出で、棧橋にかゝつてゐる箱根丸に乗つた。荷物を直ちに船室に運び、楠窓君の部屋で一同が朝飯を食つた。

連日の忙しい旅であつた中にも、嚮導役であつた友次郎は、草臥れたらしく、船室のベッドに入つて暫く眠らうとしたが、其も出来なかつた様子で起きて來た。

電報三通を受取つた。一つは倫敦の松本、八田からのものであつて、無事の航海を祈ると云ふ電報であつた。尙一つは山田菊女史からのものであつて、それには斯うあつた。

POETES DE FRANCE SOUHAITENT HEUREUX VOYAGE. KIKOU YAMATA.

(佛蘭西詩人達が、幸福なる航海を希望してをります。 山田 菊)

今一つの電報は、ロベール・ド・スーザ氏からであつて、それには斯うあつた。

HOMMAGE HAKU SUIVANT • AVEC LE POETE LE BATEAU PART
AU SOLEIL MILLE PETITES LUMIERES = ROBERT DE SOUZA

(詩人の驥尾に附して俳句を禮讚す。 船は光錠燦然たる太陽の方向に出掛けた。

|| ロベール・ド・スーザ)

この「詩人の驥尾に附して俳句を禮讚す」と云ふのは前置きであつて、次の「船は光錠燦然たる太陽の方向に出掛けた」と云ふのは、十七シラブルの詩である。季は此詩の中に見出せないけれども、其表現は私達の俳句と違はぬものであるやうに思はれた。若しスーザ氏が私の忠言を容れて心あつてこの詩を作つたものとするれば、氏の聰明をたゞへなければならぬ。尙それと共に、

LE BATEAU 2 WS =

SYNOPSIS DES PRINCIPALES INDICATIONS DE SERVICES TAXES pouvant figurer en tête de l'adresse

U... = Urgent.	AP... = Expres payé.
AR... = Remette contre reçu.	NIT... = Remette au destinataire même pendant la nuit (dans la limite des heures d'ouverture du bureau d'arrivée).
PC... = Arcus de réception.	JOUR... = Remette seulement pendant le jour.
RP... = Réponse payée.	OUVERT... = Remette ouvert.
T... = Telegramme collationné.	
MP... = Remette en mains propres.	

Dans les télégrammes imprimés en caractères romains par l'appareil télégraphique, le premier mot qui figure après le nom du lieu d'origine est un numéro d'ordre, le second indique le nombre des mots taxés, les autres désignent la date et l'heure du départ.

Dans le service intérieur et dans les relations avec certains pays étrangers, l'heure du départ est indiquée sous forme d'un groupe de 3 chiffres, les deux premiers exprimant l'heure de 0 à 24 et les deux derniers les minutes, le chiffre 0 étant utilisé chaque fois qu'il est nécessaire.

L'Etat s'assure à raison du service de la correspondance privée par la voie télégraphique, (Loi du 19 nov. 1880, art. 6.)

ORIGINE	NUMERO	MONTANT en mots	DATE	HEURE en mots	MENTIONS DE SERVICE
	PARIS	210575	21	8 10:55	
HOMMAGE HAIKU. SUIVANT AVEC LE POETE LE BATEAU PART					
AU SIEUR MILLE PETITES LUMIERES = ROBERT DE SOUZA					

報電たしよを詩の別送の氏ザース

昨夜席上で、「はいかい」と云ふ言葉は此頃の日本では餘り用ゐない、宜しく「はいく」と稱へるべきであると友次郎はスーザ氏に話したさうで、其爲この電報には「HAIKU」と云ふ言葉が使つてある。昨日まで「はいかい」と使ひ來つた言葉を、今日俳句と改める、その凝滞せざる態度にも敬服した。尙この「光鋸燦然たる太陽の方に」と云ふのは、日本を指した事は云ふまでもない事である。

前日の寄せ書の、ペー・エル・クレーヌー氏の詩と云ひ、此詩と云ひ、

その表現法が我が俳句に近いものであると云ふ事は、彼の象徴詩的表現の多い佛蘭西の詩壇に、一脈清新の氣を傳へ得るものではあるまいか。徐ろに今後の發展を俟たう。

山下馬耳塞領事が見え、私の「朝鮮」を愛讀した昔話などをして歸つた。

船室で親子三人で卓を圍んで暫く話した。そこへ楠窓君も來たので、葡萄酒の瓶の栓を抜き、友次郎と暫く別れの盃を舉げた。

山下領事が又見え、香水の壘を章子に呉れ、二等船客山崎朔三君を紹介した。山崎君は、大阪アフリカ輸出組合派遣員であつて、埃及、チュニス、モロッコ、アルゼリア等を歴訪して馬耳塞から乗船して歸朝の途に就いたのださうである。

四時出帆。

友次郎は山下領事などと共に波止場に立ち、ハンカチを振つて、我船の遠ざかり行くのを見送つた。

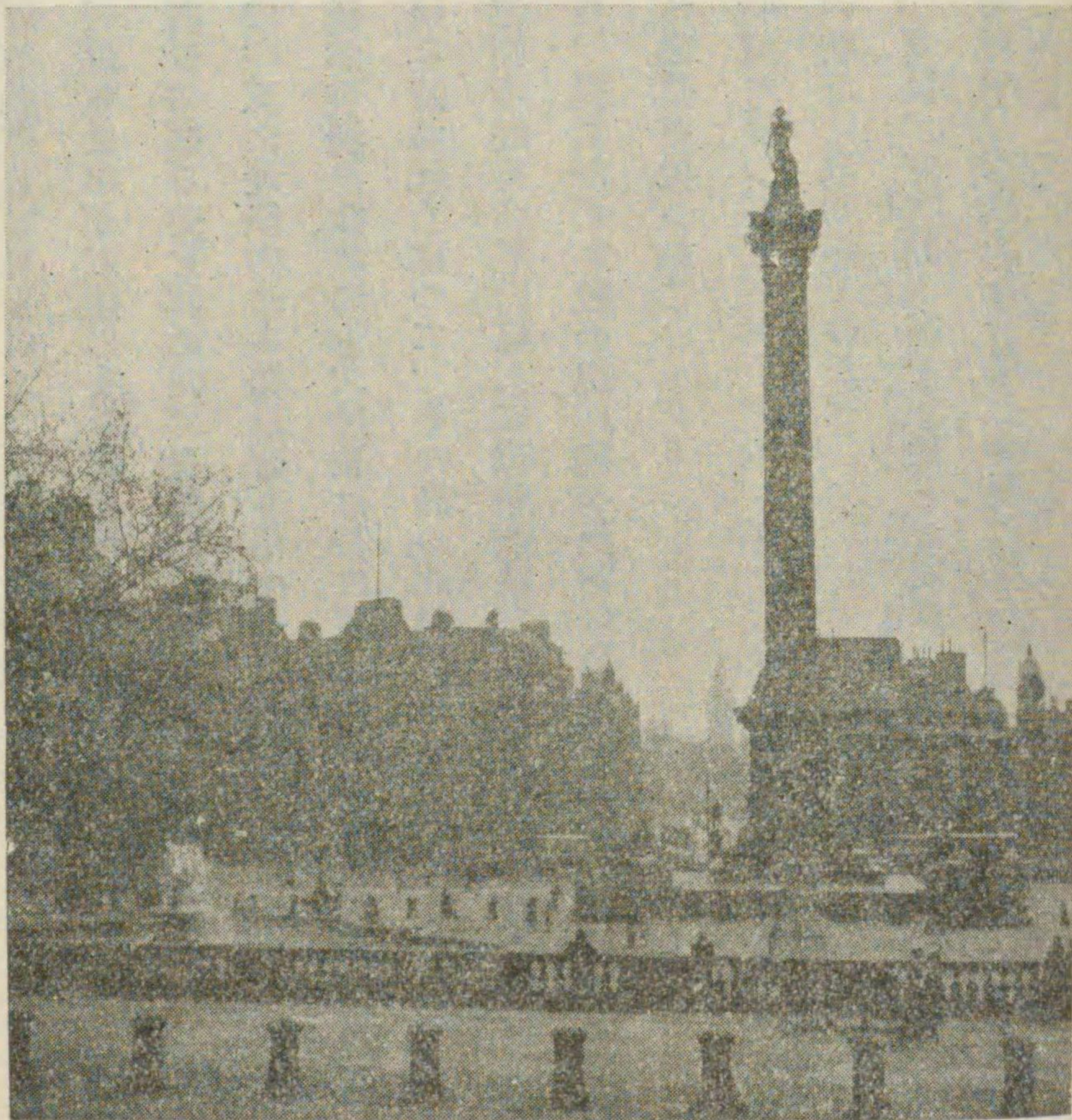
ハンカチの蝶と細りて尙振れる

是より前、四月二日神戸を出帆した筈の三宅清三郎君の乗つて居る宮崎丸は、今日の午後二時頃既に馬耳塞の港外に著いた筈である。然し棧橋が塞がつてゐるので、我船が出港するまで入港

する事が出来なく、空しく港外で待つて居なければならぬのであつた。

かねて楠窓君の話に、兩船が同時に波止場に繫留する時間が少なくとも三四時間はあるであらうと云ふ事であり、清三郎君もそれを楽しみにして、無電で楠窓君と打合して、其積りで居つたやうである。私もまたそれを楽しみにして居たのであるが、現在港外に来て居りながら、逢へぬと云ふ事はまことに残念な事であつた。然し、幸に友次郎がこの棧橋に止つて居つて、我船と行き違ひに這入つて来る筈崎丸を迎へて清三郎君と面會し、旅中の消息を傳へ得ることはせめてもの幸とせなければならぬ。

我船が長い波止場の中を徐々と進行して居ると、遙か向うの方に郵船の目印の赤の二引のマークの付いて居る煙突の船が是また徐々と此方へ這入つて来て居るのを認めた。是が筈崎丸である。ふと楠窓君の部屋に残して置いた、たけしの呉れた小國旗二個の事を思ひ出し、章子にそれを取りにやつて其船の近づくのを待つた。狭い水道を徐々と通る船ではあつたが、それでも兩船が近づいた時分はかなりの速度で摺れ違ふのである。私達も目を瞠つて筈崎丸の甲板に出て居る船客の方を凝視し、殊に章子は事務長から借りた双眼鏡を持つて一心に見つめて居たのであるが、筈崎丸の船客はぎつしりと甲板に出て居て、我船を見て歡呼の聲を擧げ、國旗、ハンケチを振り、



シヨナヨルガ・リヤ・トフラガ・ア・エクス・アー
ネソル鋼の像

人々が動揺して居るので、容易に見分けがつかなかった。我船の船客は比較的少なかつたので、清三郎君は早く私達の姿を認めたものと見えて、舳の方から帽子を振りながら流星の如く艦の方に駆けて来る姿を認めた。そこで私達も国旗を振りながら、同じく舳の方から艦の方へ駆けて行つて、互に最後方の手摺に乗り出すやうにして、国旗やハンケチを振り合ふのであつた。

船が突堤を抜けると、船長は特に私達の爲に「巖窟王の島」シャトー・デーフを見せようと、針路を陸地近く執つて、その島の北側を通過することにした。自然港内に繋つて居る筥崎丸の赤の二引の煙突が遙に見えて、今頃は友次郎が清三郎君を迎へて、話して居るであらうと想像しながら、間もなく右舷に現れ來つたその島を展望し、岩窟の上に立つて居る古城を仔細に見た。章子が寫眞を撮つた。

船室に戻つて、バゲージルームに預けてあつた荷物を、ボーイに船室に運んで貰つて、章子はその整理に取りかゝつた。

夕食後、友次郎の宿で受けとつた澤山の新聞の封をはじめ切つた。

九時半、草臥れた身體を寢臺に横へた。

スエズ運河通過

五月九日。(土曜)

朝、食堂に出て居ると、波が甲板を洗ひ窓にぶつつかる。が、その割合に揺れない。

杉村海軍軍醫中佐、山田満鐵社員、藤井日本皮革會社營業部長等の諸君が、食卓に來て刺を通じた。

甲板に出て見たが、サルデニアと覺しき島が雲煙のうちに見える許りで、暗雲が低迷してゐる。

甲板の上にも一人も人影を認めなかつた。

電報數通打つ。清三郎君より無電來。

「御温顔を拜し感激す。一路御平安を祈る。」

理髮。甲板散歩。

章子が部屋で蓄音器を掛けて居るので、近藤乾三君の「八島」を掛けさせて聞いた。

五月十日。(日曜)

今度は晝間のストロムボリを見た。頂上近く熔岩の噴き出て居るのが波打際に顛落する有様をまざくと見た。

晝頃、伊太利のレヂオの町が見えた。シシリ島も薄ぼんやりと見えた。エトナ火山は見るよしもなかつた。

夕食後山崎朔三君を呼び、牡丹屋茶話會の時分の寄せ書の詩の翻譯を頼んだ。君は大阪外語佛語科の出身である。

五月十一日。(月曜)

波靜か。

章子、今日からチーフコックに料理を習ひに行くことになり、また手習を始める事になつた。

五月十二日。(火曜)

明日坡西土から飛行便で出す佛國のヴォーカンス、スーズ、クーシユー、山田菊子、松尾、佐藤、友次郎、英國のバイング、オールド、メーヤー諸氏の手紙を楠窓君に筆記して貰つた。英語の分は楠窓君に翻譯して貰つた。それから伊藤與三郎君にも手紙を書き、「東籬」といふ號を思ひついた、兄さんの南汀に對して假りに北汀とつけたが餘り働きの無いから此方に變へては如何といつてやつた。

五月十三日。(水曜)

朝、坡西土著。

昨日迄シャツにジボン下を著、袴を著て居つたのが、俄に浴衣になつた。船員は皆白服を著た。佛蘭西や英吉利の軍艦が繋つて居り、飛行機が一臺空を飛んで居つた。

八木女、章子と共に手輕な浮棧橋を通つて上陸。デパートに行つて活動寫眞機を見た。折節、船の寫眞係のボーイ大麻君が來合せたので、選擇して貰つて、撮影機を一つ買つた。早速寫眞を撮りながら船に歸つた。

午食後、晝寝。

四時頃楠窓君と共に再び下船、南部商會に行き飛行郵便物を托した。

南部君の話に、エチオピアの皇帝は、佛領ソマリランドの港から逃れ出て、蘇士運河を通つて亞刺比亞のパレスタインに蒙塵されたのであつて、百個程の箱に詰めた財寶を携へて行かれた許りで、後は市民の掠奪に委されたとの事である。

南部君は、今夜六時の汽車で蘇士に行き、明朝四時著の照國丸の乗客の、カイロ行き世話させなければならぬと云つて居た。それから土産だと云うて、私に古い玻璃壺を呉れた。

雨が降つて居る中を濡れながら歸るのが氣持がよかつた。

午後八時出帆。

この前は蘇士から自動車で砂漠を横断してカイロに行き、カイロから汽車で坡西土に出たので蘇士の運河を通らなかつたのである。今度は通れるので楽しんで居つたが、八時の出港になつて、もう四邊が薄闇に包まれて居て、運河の入口に這入る時分になると、全く闇になつてしまつた。その入口は水幅がまだ相當に廣く、五六艘の船が繋つて居た。

甲板に立ちながら、埃及のアレキサンドリアの日本棉花の渡部君の夫人と話した。アレキサン

ドリアの氣候は春夏秋冬の變化が明かでなく、夏が大變長く、冬だと云つても火の氣が無くつて暮らせる位だとの話であつた。

運河はだん／＼狭くなつて来て、船の速力はいよ／＼遅くなつて來た。運河では一時間七哩以上の速力を出せぬ規定になつて居るのださうだ。船の灯の光で僅に見える兩岸は、三尺許りの石垣が積んであつて、それに船の波が打當つて行くのであるが、七哩以上の速力になると、この石垣を破壊する恐れがあるからだとの事である。舳には、サーチライトを點して、行く手を警戒しながら進むのは一寸物々しい光景であつた。照らし出さるゝ左岸、即ちアラビアの側は全く砂漠であり、右岸、即ち埃及の側は諸所に椰子などの立木があつた。

五月十四日。(木曜)

六時過ぎ眼が覺めたので甲板に出て見た。可なり廣い水の所を航行してゐる。甲板を掃除してゐるボーイに聞いて見ると、運河の中に湖水が二つある、その廣い方の湖水はもう先に通つてしまつたが、これが狭い方の湖水だと云つた。左右に遙に見渡す處は皆砂漠であつた。後に船が三艘續いて來て居つた。

湯に入つた。著物を著て居る時分に、照國丸がやつて來たとの報を受けた。甲板に出て見ると成程前方から徐々と進んで來てゐる。我が船は片方に除けて停船して居る。章子が活動寫眞を撮つた。照國が過ぎ去つてしまつても一向我が船は動かない。どうしたのかと思つてゐる中に前方に煙が見えてまた一艘の船がやつて來た。それは佛國の船であつた。また同じやうに待つて居て、今度は獨逸の船が來た。

朝飯を濟まして甲板に出て見ると、右舷の甲板に、事務長や客が混つて、直ぐ近くの岸に林檎や小錢を抛つてやつて居る。岸には黒ん坊の子供がそれを争つて拾うて居る。中には一人のアラビア人の大人も混つて居る。遠くには駱駝が四五疋砂漠の中に突つ立つて居る。その向うには椰子の樹がまばらにあつて、人家らしいものが三四軒見える。黒ん坊は白い齒を剥き出して、胸を叩いて、も一度錢を投げしてくれると催促して居る。錢を投げると、それを拾はうと砂漠の砂を踏んで走つて行く。砂煙が立つて、錢の所在が一寸分らない。漸く見付かつたので、一人の子供が走つて行くと、他の子供が折重なつて奪ひ合ふ。暫くそんな光景を見て居つたが、一向船は動かなかつた。どうしたのかと思つたら未だ續々と前方から船が來つゝあるのであつた。總計七八艘の船を遣り過ごして、彼是一時間許りを費して漸く動き出した。

と ぼ く と 砂 漠 を 歩 く 跳 足 の 子

船はまた浅い水道に這入つて、徐々として進んで行くのであつた。左右兩岸は多少起伏のある砂漠が際限もなく續いて居た。長い客車を連結した汽車が一臺、煙を吐きつゝ右岸を通つて行つた。

晝寝から起きて見ると、既に蘇士に著いて居て、曾て見た此港が其時と少しも變らず目の前にあつた。

楠窓君が、昨日南部君から貰つた玻璃壘に、左の由來書を附したものを届けて呉れた。

この玻璃壘の由來

地中海の東端に位するシリア(Syria)のホムス(Homs)にて發見せらる。香料入れに使用せられたるものと云ふ。年代は今を去る耶蘇紀元前百九十年(本年より起算し二千二百二十六年前)のものと推定せらる。玻璃の風化せる古色甚だ妙なり。ホムスはパレスチン山脈の連互せる中に含まれたる一都邑にて、エルサレムより約二百五十哩位の距離なり。埃及ポートサイド南部商會主、南部憲一氏より虚子先生御通過の際、記念の爲に贈呈せるものなり。先

生の御依囑により之の記事を作る。

ポートサイド出帆の日。箱根丸にて

上ノ畑楠窓誌。

紅海に船早や浮ぶ歸帆疾し
雲の峰常に立ちたる海に來し
雲の峰空を蔽うて立ちにけり
我が船と彼の船に立つ雲の峰

夕暮六時半頃甲板に出で、模糊たるシナイ山を見た。
海、極めて平穩。風涼しく、景色も、砂漠、秃山ながら時々目の前に現れ來り、船舶の航行も
多く、紅海の第一日は頗る快適であつた。

岩波文庫のピエル・ロチ著「氷島の漁夫」を読む。

甲板に出て、満天の星を仰いだ。星が餘り澤山で一吋星座が見分け難かつた。

星の座を失ひ星の空涼し

紅海

五月十五日。(金曜)

波がいよゝ静かに、一片の雲もなかつた。眞青に晴れ渡つた空と、紺碧の疊のやうな海の間
に我船が浮んで居た。

昨夜から、そろゝ暑くなつて來た。

左舷に Daedalus Reef と云ふ珊瑚礁の上に立つて居る燈臺を見た。

五月十六日。(土曜)

海が穏かなことは昨日同様であつたが、風がなくなり、暑さがいよゝ劇しくなつて來た。

波もなく雲の峰さへ現れず

五月十七日。(日曜)

船長が章子に、西班牙闘牛の人形を呉れた。闘牛士が長槍を持って馬に跨つて、荒れ狂ふ牛に一撃を與へた處の異國趣味のものである。

熱帯の海は日を呑み終りたる
暑しとて甲板歩く夜半の人
寝られねば灯し柱の蟻を見る
この暑さ火夫や狂はん船やとまらん

五月十八日。(月曜)

昨夜蒸暑。夜半に甲板を歩く。貨物船が二艘通るのを見た。伊國の運送船であらうかと思ふ。

モンスーン

五月十九日。(火曜)

昨日あたりより、モンスーンの影響を受けて船が動揺し始め、婦人の食堂に出ぬものが多くなつた。章子もその一人。

船長が甲板での話に、今夜ソコトラ島の北を通るが、その間は海が静かであらうとの事であつた。

夜半また甲板に出て見た。果して船長の言の通りであつた。

ソコトラに銀河の星の一つ落つ

五月二十日。(水曜)

寝る前に稻妻が頻りにした。床に這入つて後も、船室の窓に稻妻の絶え間がなかつた。

稻 妻 の 描 き 出 し た る 我 船 か

五月二十一日。(木曜)

甲板の椅子に凭れて、岩波文庫を読んで居たが、遂に其儘眠つてしまった。眼が覺めてから、「旬日記」十月分を選んだ。

スコールが來た。初めてスコールに會つたのである。

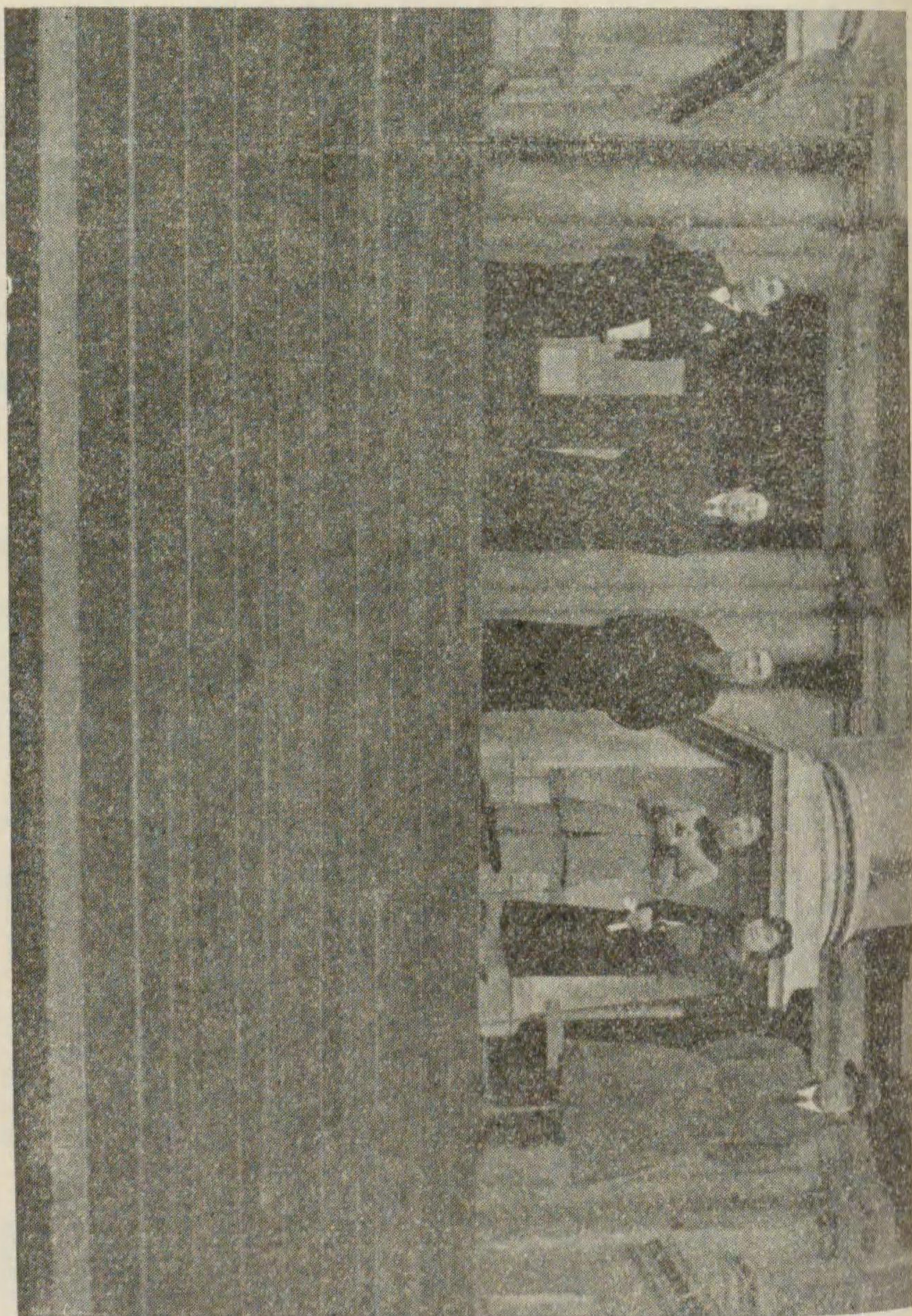
ス コ ー ル や 飛 魚 の と ぶ 海 暗 し
ス コ ー ル の 波 窪 ま し て 進 み 來 る

皿井旭川夫人を悼む

海 草 の 流 る 悲 し 雲 の 峰

夜、鋤燒會があつた。濟んでから例の如く、ダンス、東京音頭などが盛んであつた。

十一時頃、石田敬二君の電報を受取つた。病人を連れて一足お先に失禮するとあつた。新嘉坡から此船に乗り込む筈であつたのである。



ナショナル・ガラリイにて
八田一郎、吉里夫人、登子、豊子、古尾綾郎、友次郎

五月二十二日。(金曜)
夜、山崎朔三君が、荒井龍男、久本弘一の兩君を引連れて、私の部屋を訪づれた。二君は畫家であつて、二年ほど巴里に居たとの事で、しばらく話して歸つた。

五月二十三日。(土曜)

朝から雲が空を鎖し、海上にはスコールが盛んに來て居る様子であつたが、我船には少しばかりの雨が降つて、直ぐ止むのであつた。船の動揺が劇しいけれども、章子元氣。風が涼しくて、甲板に出て居ると寒い位で、晝寐をしようと思つたが危険であるから止めた。床屋に行つた。

お三時に氷汁粉を食つた。旨かつた。

四時、ミニコイの珊瑚島を左舷に見た。

九時から、船長室で楠窓君主催の洋上吟社の發會があつた。その席上句左の通り。

今日もまたおひてとなりぬ印度洋 一等機關士 町田梨雨

ス	コ	ール	に	忽	ち	涼	し	船	の	客	事	務	長	岡	崎	波	哉						
薰	風	や	英	詩	な	ど	讀	み	船	た	の	し	六	等	機	關	士	藍	田	孝			
友	と	逢	ふ	異	國	港	や	春	の	雨	無	線	局	長	内	藤	節	儀					
ス	コ	ール	の	過	ぎ	し	デ	ツ	キ	に	讀	書	せ	り	船	醫	關	知	治				
ニ	グ	ロ	居	る	港	の	カ	フ	エ	ー	春	の	宵	二	等	機	關	士	和	田	重	次	
町	を	行	く	アラ	ブ	女	や	黒	被	衣	カ	ッ	ギ	事	務	員	渡	邊	正				
吊	し	あ	る	ポ	ー	ト	の	下	の	晝	寐	か	な	事	務	員	岸	本	浩				
ス	コ	ール	や	空	行	く	雲	の	西	東	一	等	運	轉	士	小	島	十	字				
そ	の	か	み	の	戰	の	跡	や	夏	の	海	船	長	栗	田	虚	船						
甲	板	の	涼	み	話	や	天	の	川	四	等	機	關	士	室	田	勇						
船	過	ぎ	し	あ	と	の	遙	け	き	月	夜	か	な	三	等	機	關	士	久	山	舷	樓	
夏	雲	は	動	か	ず	砂	漠	果	て	し	な	し	ス	チ	ユ	ッ	デ	ス	八	木	み	ね	よ
湖	に	映	る	砂	漠	の	山	暑	し	七	等	機	關	士	五	島	政	徳					
ア	ド	バ	ル	ン	傾	き	春	の	雲	浮	ぶ	五	等	機	關	士	廣	田	繁	三	郎		

蜘蛛の圍に白露置きし茶畑かな 機関長ボーイ 三宅順平
 蒼茫と海は暮れ行き星涼し 事務補 少野伸廣
 ほの見ゆる牧場の牛や朝霞 船長ボーイ 大吉利雄
 薫風に大きく胸を擴げけり 通信局通信士 錦成郎
 カーテンに風ありそめし晝寝かな ボーイ 一ノ瀬經輔
 スコールの通ればもとの雲の峰 楠 窓
 螢火の飛び去る闇のどこまでも 章子
 スコールの後の濡れたる欄による 虚子

會をやつて居る中に、船の動搖がだん／＼劇しく、外はスコールらしく、その飛沫が窓を通して飛び込んで來ることもあつた。船長室を出てポート・デツキに出て見ると、タラツプを下りるのに、迂りさうで一寸困難を感じる位であつた。章子は會の間苦しさうなのを我慢して居る様子であつた。

五月二十四日。(日曜)

夜の十時半に古倫母に著いた。防波堤に波が打ち付けて、一三三丈の高さに飛沫が上る光景が、閃光燈臺に照らし出されて居て物々しかつた。CEYLON FOR GOOD TEA と云ふネオンサインを充分に讀むことの出來ぬ位の遠方から、乗客が皆甲板に出て、あれがCだ、あれがEだとその字を懐しみながら騒いで居る光景に微笑まれた。何にせよ、蘇士を出て今日まで十日間、燈臺以外の灯に接したことはなかつたのであるから。

その中、水先案内が乗り込んで、突堤の内に這入つて行くと、今迄の荒れて居つた海が急に靜かになつて、乗客は皆元氣よく、スモーキング・ルームにある旅券の審査に我先きにと出かけるのであつた。

ホトトギス、玉藻の五月號が届いた。それを見て十二時過ぎて寝た。

五月二十五日。(月曜)

私は上陸もしなかつた。
 章子が、八木女と共にハシムに行つた。
 三時半出船。

一旦突堤より外に出ると忽ち波が荒く上下動が劇しい。モンスーンの上に、低気圧もあるとの事。

五月二十六日。(火曜)

社交室で、古倫母から綴込の殖えた大阪毎日新聞を見て居ると、はからずも本田不二磨さんの訃を傳へて居るのに驚いた。先月二十六日の事であつたとある。

春 かな し 先 月 今日のことなりし

五月二十七日。(水曜)

曾て、中學校の教科書で讀んだ事のある、イノツク・アーデンを、甲板の椅子に腰をかけたまま讀了。そのまゝ本を顔に當てゝ寝た。風が烈しいので目が覺めた。

五月二十八日。(木曜)

勝本清一郎君宛の手紙を楠窓君に筆記してもらふ。

荒井龍男君が話しに來た。その話の中に、ピカソは俳句が好きであつて、その子供にも俳句を讀まして居るさうで、またザツキンも大變日本最良で、俳句を好むとの事があつた。

五月二十九日。(金曜)

暑い。甲板に出で舷側の手すりにつかまりながらぼんやりと燈臺の灯の明滅するのを見て居ると、ピカソくくくと三つ點つて、あとは暫く暗くなり、其暗くなつた間が大變長いやうな心持がするのでその光る時の長さを呼吸の數で計り、光らぬ時の長さを計つて見ると其は同じである事が分つた。そんなことを暫く繰り返してゐる間だけ暑さを忘れてゐた。

新嘉坡

五月三十日。(土曜)

此日は特に八時朝飯、八時半新嘉坡著。

熱帯産業株式會社シナイ護謨園から奥田彩坡、古根勳兩君が態々見え、其他、森野意由、山口勝、宮地義雄、志村空葉夫妻、玉木北浪の諸君が船まで来て呉れた。

この前、彩坡君が呼んで呉れた按摩の事を思ひ出し、同君に案内されて行く道で、按摩の處により、共に車に乗せて玉川園まで行つた。そこで按摩をとつた。

玉川園も今日は風が無く、横になつて居ても汗が流れた。楠窓君は山口君と一緒にあとから来た。

食後、動物園に行つたが、途中の椰子の木の間に、ぼつ／＼家のある馬來人の部落が面白かつ

た。

俳句會のある日本人會に行き、轉じて森野君の招宴に列席した。船長の栗田虚船君と楠窓、彩坡兩君、それに私達二人であつた。宴が済んでから日本人會に引つかへした。左の如き句があつた。

薰風や向ひにリオの島つゞき	奥田彩坡
ペラランダの涼しき風に談笑す	桑原梅女
夕涼みべールかけたる馬來の娘	山縣岳人
支那童賭博してゐる樹蔭かな	田所高峰
簾上げ灯の映りたる水の家	山下生樹
檣林は月に揺れをり唄ふなり	東森たつを
朝陰や師を待つ舟のまだ見えす	池田凡々
黄金藤はや灯れるパンガロ	永井孤箭
片陰に立ちて入船迎へけり	橋本たらき
町中の木蔭くゝに物置ける	玉木北浪

緑 蔭 や 花 を か ざ せ る 瓜 哇 女 田 中 久 親
 巨 船 の 朝 陰 曳 い て 行 き に け り 有 坂 李 一
 た づ 歩 く 椰 子 の 木 蔭 を 縦 横 に 小 岸 素 風
 カ キ リ マ の 日 陰 靴 屋 の 今日 も 來 る 野 村 汀 老
 短 夜 や か た り つ き た る ま ぐ に 臥 す 辻 森 哲 草
 片 陰 に 大 鎌 を 研 ぐ 馬 來 人 古 根 蘇 川
 椰 子 の 木 の 蔭 を 追 ひ く 歩 く 憂 し 山 口 春 野
 和 服 著 て 立 て る 虚 子 あり 椰 子 の 蔭 金 田 秋 野
 苦 力 達 ひ ま く に 立 つ 日 陰 かな 清 水 颯 爽 兒
 菩 提 樹 や 博 物 館 の 日 陰 道 彦 坂 三 法 子
 山 羊 を 守 り つ ぐ 朝 陰 に 草 刈 れ る 北 竹 南 斗
 黄 金 藤 た そ が れ な れ ば ほ の 白 き 志 村 空 葉
 四 五 人 の 固 ま り 涼 む 木 蔭 かな 楠 窓
 な だ ら か に 連 る 島 や 雲 の 峰 章 子

雲 の 峰 湧 き い づ る 善 し 按 摩 と る 虚 子
 互 り た る リ オ 群 島 は 島 屏 風 同
 帆 舟 あり 淺 瀬 越 し かね 雲 の 峯 同
 沖 紺 に 淺 瀬 淺 黄 や 雲 の 峯 同
 晝 月 に 汐 み ち 來 ら し 椰 子 の 濱 同
 鰐 の 居 る 夕 汐 み ち ぬ 椰 子 の 濱 同
 火 を 焚 い て を る も 涼 し や 椰 子 林 同

後で何か講話をせよとの事であつたので、楠窓君に何か代りに話すやうにと云つたら、次のやうな話をした。

先づ何より申上げて置き度い事は、虚子先生が今回御外遊を決行せらるゝに至つた動機についてあります。

それに就いて一言申添へて置かねばならぬのは、私が當地を通過致します毎に、當地在住俳人の皆さんが、我が花鳥諷詠詩として最も重要な四季の變化に惠まるゝ事の少ない、常夏

の國に住んで居られるにも屈せず、如何に熱心に俳句に精進せられて居るか云ふ事であり
 ます。それは日本人なればこそと、一種の民族の尊さをさへ感じさせられて居るのでありま
 す。その皆さんの中から、親しく先生の御來遊を乞ひ、熱帯地風物を御覽願うと共に、その
 作句上の特殊性について先生の御示教に預る事を得ば、如何に幸福であらうかと云ふ熱心な
 御希望を漏らさるるのを屢々耳に致し、私もまた全然御同感で、先生にも折々其事を御願し
 て來たのであります。今回先生が御外遊を決行なさつた諸動機の中に、皆さんの熱心なる御
 勧誘が一つの誘因を爲して居る事を知つて居る私は、皆さんと共に衷心本懐に思ふ次第であ
 ります。其結果と致しまして、御承知の如く歳時記の夏の部の 中に「熱帯季題」なる一項
 目が挿入せらるゝ事に先生の御腹案が決定して居るやうに承つて居る事は、是は一に皆さん
 の俳句道御精進の眞劍さから來たものであるとして、大に喜ばしく存ぜらるゝ次第でありま
 す。(以下略)

十二時過ぎ船に歸ると、西日にやけてまださめぬ船室は驚くべき程の暑さで、しばらく風の無
 い甲板に立つて居たが、止むを得ず寝る事にした。扇風機を掛けると熱風が吹き起つた。蒲團も



ワオーカンス氏の家に於て
 前列 佐々木、松尾邦之助、菅子、佐藤隆水、スミトラ
 後列 友次郎、松尾邦之助、菅子、佐藤隆水、スミトラ

暑く、寢臺の横に著いて居る眞鍮の金具も暑かつた。

扇 風 機 ま は り 熱 風 吹 き 起 る

五月三十一日。(日曜)

一等の乗客が、こゝから三十八名増したと云ふ事であつた。

九時頃、彩坡、空葉夫妻、秋野、春野、春草夫妻、北浪、汀老の諸君が船まで来て呉れた。梅女、たつをの兩君が章子に土産を呉れた。三菱商事支店長の山口勝君に春野、臺灣銀行支店長の金田武治君に秋野、郵船會社支店長の森野意由君に春草の號をいづれも求められるまゝに贈つたのである。

夜甲板で、乗客から印度のデリー、ラホールなど云ふ町の話を聞いた。

尙今日、山本孕江君に、基隆に寄港はするが、時間は三四時間で何をすまひもない、唯寄港するといふことだけを申上げて置くといふ無電を打つて置いた。

六月一日。(月曜)

今日から七月號雜詠を見はじめた。

山本孕江君の返電が来て、臺灣に二三日滞在して、それから別の船で歸れば、神戸で追付く事になるからさうして貰ひ度いと云つて來た。今回はさう云ふ譯に行かぬ事を返電した。

「ドーム寺院の鐘の音」(中央公論)を筆記してもらふ。

乗客の澁澤秀雄君から東印度の話聞いた。

夜、船長室で洋上吟社の第二回會があつた。

雲の峰立ちたる裾野汽車走る	藍田孝
十字星目の前にあり籐寢椅子	和田重次
すいゝと遙に逃げし螢かな	岡崎波哉
漕ぎよせてカメラの土人皆裸	室田勇
このあたり潮脚早し夏の月	久山絃樓
スマトラの盡きるあたりや雲の峰	内藤節儀
涼しさや椰子の葉音のさらゝと	錦成郎
椰子の島見えて來るなり遠眼鏡	森本政雄

池の面螢映りて涼しけれ
 五島政徳
 甲板にヒンズー亂れ寢所狭く
 渡邊正
 船の吐く煙の上や夏の雲
 三宅順平
 梅雨晴れて眩しき雲の並びけり
 大吉利雄
 梅雨空の神戸の港待ちかねつ
 岸本浩
 螢籠賣る店もあり町外れ
 關知治
 爲すこともなくて晝寝や梅雨曇
 一ノ瀬經輔
 文も読み手習もしつ梅雨の窓
 八木みねよ
 螢籠軒端に吊しラデオかな
 町田梨雨
 船室の抽斗きしむ梅雨かな
 小島十字
 縁日の籠の螢火うすかりき
 栗田虚船
 日本の梅雨もなつかし上陸す
 楠窓
 籠下ろし涼める子等に椰子の風
 章子
 扇風機吹き瓶の花燎亂す
 虚子

船と船通話して居る灯涼し
 同
 タラツプに遂に腰かけ星涼し
 同

六月二日。(火曜)

「ビュルガ姉妹」(中央公論)を筆記してもらふ。

絶えて久しき臺灣新聞の佐藤夜牛君から電報で是非臺灣に二三日滞在せぬかとの事。返電。

六月三日。(水曜)

山崎、荒井、久本の三君が來、續いて楠窓君も來、晝談から哲理論のやうなものになつて、暫く話がはづんだ。

大陸の方向に當つて稻妻がした。

水際
 際
 の
 稻
 妻
 さ
 へ
 も
 懐
 し
 き

香港、臺灣

六月四日。(木曜)

島がぼつ／＼見えて来た。

江 水 の 濁 り は じ ま る 夏 の 海

温度は八十四度に過ぎないが、蒸し暑い。湿気が多い爲だとの事である。

「ハイデルベルヒ」(中央公論)を筆記してもらふ。

四時九龍の棧橋に著いた。下田君が迎ひに来てくれ、満鐵の白石君と、楠窓君と、私等二人が誘はれてスター・フェリーに乗つて香港に著いた。タイプライターの店に二三軒立寄り、それから自動車で島巡りをした。

此前は、上の道から屋上に下りて行つたのであるが、今度は下の道から澤山の石段を登つて、

千歳花壇に行つた。此前に馴染になつたお八重さん、久千代等が現れて盃盤に侍した。千菊、玉千江などと云ふ新顔も現れた。例によつて揮毫。

六月五日。(金曜)

朝六時甲板に出て見た。丁度船が錨を揚げて居るところであつた。この前見たのと同じに、港内の曉の船は皆動いて居つた。目の前に一艘かゝつて居る戎克も、その船頭は岸から大きな桶に入れた水を擔いで来るところであつた。

短 夜 や 起 き て 齒 み が く 船 の 妻

幾らか涼しくなつて来たやうである。

澤山の帆船の浮んで居るのが見えた。

ホトトギス六月號を読む。

五時頃歐洲に往航の香取丸に出會つた。

昨日受取つた素十君の電報に、明日與一郎節句とあつたので、

素 十 抱 き 富 士 子 受 取 る 菖 蒲 の 兒

六月六日。(土曜)

俄に涼しくなった。

朝飯後甲板に出て見ると右舷に山が見えてゐた。船は臺灣に沿うて北に航して居るのであつた。雨が降つて來た。

二時半基隆に著いた。船より見たとき、家が低くて貧弱な感じがするのは止むを得ない。

佐藤夜牛、山本孕江、高須賀北南、門川義雄、樋口玉蹊子、藤田芳仲、大毎基隆通信部土居鶴雄、近海郵船支店長松本暁吉の諸君が船まで來た。間もなく上陸。

基隆市尹桑原政夫、大毎臺北支局長喜多收一郎の諸君に、前記の諸君が加はつて臺北まで自動車を驅つた。先づ臺灣神社に參詣、臺灣總督府中央研究所技師中澤博士、同服部衣山、防本原人江原敦朗、其他臺灣俳人諸君の集團に挨拶し、廣前で記念撮影、それから臺北市中の主な町を一巡し、臺灣新聞支局と大毎支局に車を止め、直ぐ歸路に就いた。

基隆、顏國年氏邸に入り、顏欽賢君、桑原君等の款待を受けた。私が昔京都の高等學校に學んだ頃、保證人であつた栗生氏の息女堀田光子さん夫妻と對面をし、大毎の田村木國君と、長距離

電話で話をし、八時船に歸つた。

見送りの人々がランチに乗り移つた時分、我船の舷側に現れた人は臺灣銀行紀野三秋君で、上海支店に轉任、これから上海に赴くのだとの事であつた。社交室で暫く談話。

六月七日。(日曜)

諸君から歸朝祝賀の電報を貰ふことが漸く多くなつて來て、一々記載することが出來ぬことを残念に思ふ。

支那芝居を見る

六月八日。(月曜)

朝七時に上海に著いた。

例によりすみれ會堀場定祥、大内穠水、下村非文、星野露頭佛、中田秋平、中原大鳥の諸君が船まで來た。

上 海 の 梅 雨 懐 し く 上 陸 す
それから、市中見物をしながら、南市の半淞園フイソウエンに行つた。

家 中 の 徴 び る は な し も 可 笑 し け れ
雨 漏 り を 指 さ す 人 と 瓦 廊 かな

そこを出て南京街アツプリアンス商會に立寄つて、アングラーウツドのタイプライターを買ひ、河南路の九華堂に立よつて、丈二疋を買つた。

それから三菱商事招宴の月廼家に至り、田中三菱商事支店長外一名、前記のすみれ會々員諸氏と會食した。

七寶會の榎本秀雄君が偶々此地に來て居つて、訪ねて來た。

別室で按摩をとつた。その二階は月廼家の藝者の溜りであつた。

藝 者 家 に 梅 雨 の 電 話 の かゝ り を り
藝 者 家 を 見 上 げ て 梅 雨 の 手 水 鉢

午後五時、開北の新月花壇に行き、すみれ會の俳句會に列席した。

歐洲で見たブラツクバードが此上海にゐることに氣がついた。名を聞くと白頭翁と云つた。

席上句。

名 園 の 靜 かな 夏 となりにけり	大内穠水
日 燒 して 日本への 虚子 上海に	星野露頭佛
ク ロ ー バ に ゴ ル フ の 球 の 眞白 かな	藤本不二
龜 ば か と 浮 く 濁 り 水 五 月 雨 る ヽ	中田秋平
地 虫 鳴 く 日本 近 くなり にけり	下村非文
い と ほ そ き 噴 水 の 根 は 太 湖 石	堀場定祥
青 蘆 や 泥 水 吐 きて 遡 江 船	野口荏吾
長 江 の 梅 雨 の 朝 であり にけり	紀野三秋
蝠 蝠 の は り つ き し 戸 を 閉 ぢ にけり	星野幸子
子 を 抱 き し 泰 山 木 の 花 の 下	下村梅子
支 那 兵 の 武 を 練 つ て を り 麥 の 秋	高西天瓜

江南の春や短し更衣
 噴水の音のとぎるゝことのあり
 舟橋唐柿
 雨の石にもたれて咲ける雪の下
 中原大鳥
 静けさや二人きりなる梅雨の宿
 榎本秀雄
 唐橋を唐子の渡る新樹かな
 楠窓
 五月雨のあがりし庭の日ぐれかな
 章子
 日本にある思ひなる庭つゝじ
 虚子
 上海やつゝじ倚り咲く太湖石
 同
 梅雨の庭雪柳あり之を見る
 同
 地虫啼く一つの聲の静かさよ
 同

十一時から、フランス租界八仙橋の黄金大戯場に支那芝居を見に行つた。上海三菱銀行の竹内良男君が説明役を引受けて呉れ、左の説明書きを渡して呉れた。

◎翠屏山

水滸傳より取材

時代 宋

人物 楊雄、潘巧雲、石秀、海閻黎、云兒。
 楊雄ノ妻潘巧雲ハ夫ガ武藝ニノミ耽リ家庭ヲ顧ミナイ爲メ僧ノ海閻黎ト通ジタ。楊雄ノ義兄弟石秀ガ之ヲ忠告シタガ妻ハ巧ニ言ヒ逃レ却テ石秀ヲ惡シ様ニ言フ。石秀ハ敢テ辯解モセズ默々楊家ヲ去リ海閻黎ガ忍ビ寄ルヲ待チ之ヲ刺シ、僧衣僧帽ト女ノ贈ツタ著物ヲ楊雄ニ示シタ。楊雄ハ始メテ悟リ石秀ト二人デ計ヲ定メ潘巧雲ト腰元ノ云兒ヲ翠屏山ニ誘ヒ途中デ殺シ梁山泊ニ走ツテ義ニ加ハル。

◎汾河灣

時代 唐

人物 薛仁貴、柳金花、薛丁山。
 薛仁貴ハ軍ニ投ジテ十八年遼東ヲ平ゲテ功アリ。平遼王ニ封ゼラレ錦ヲ衣テ故郷ニ歸ル途中汾河灣ヲ通り掛ルト一人ノ小童ガ雁ヲ射テ居ルガ百發百中ノ腕前デアル。薛仁貴ハ感心ノ果

云ふのは全くなく、小道具も椅子がある許り位のもので、手を左右に動かすとそれで門を開けた形になつたりするのであつた。

次に「汾河灣」は馬連良の扮した薛仁貴と、章遏雲の扮した柳金花が主要人物であつた。是は一層能樂に近く、哀愁もあつて面白かつた。船に歸つたのは一時半頃であつた。

日本に歸る

六月九日。(火曜)

目覺めた頃は、船が揚子江を出離れて居る頃であつた。船の動搖が烈しく、朝食堂に出た人は半分位であつた。

六月十日。(水曜)

午後になつて、船はやゝ靜になつた。

雜詠選了。

對馬が見え壹岐が見えて來た。

サ、ヨ、ナ、ラ、デ、イ、チ、ー、が、開、か、れ、た。

大阪朝日の九州支社から電報で、歸朝最初の一句を送つて呉れとの請求があつた。

船 涼 し 左 右 に 迎 ふ る 壹 岐 對 馬

その句を打電すると間もなく又電報で、

・「吉井勇氏今宵來社對談し、貴下を思ふの歌あり御知らせ申す

虚子の船赤馬ヶ關に寄らで過ぐ

今宵の月夜ほくな讀みそね」

と云つて來たので、

短 夜 を 寢 ず 門 司 の 灯 を 見 て 過 ぎ ん

と返電した。

加 は、りし猿蓑夏の輪講に
十二時過ぎ、としを居を出て、船に歸つて寝たのは一時を過ぎて居た。

六月十二日。(金曜)

十時、としを、泊月が船まで来て、連れ立つて王城の病氣を見舞うために京都に行つた。丁度時刻であつた爲に京饌寮で晝飯を食ひ、それから王城居に行つた。

俄に王城の主催で、私等歸朝の歓迎の意味もあり、また病氣快方の心祝の意味をも兼ねて、下河原美濃幸に招宴。

席上句。

端居して聞く佛蘭西の話など いはほ
庭清水路をくゞりて曲りけり 王城
せゝらぎの静な庭や五月晴 八重子
踏みゐて水打つ庭のそこらかな 泊月
噴井なる水溢れゐて苔の花 知川

庭涼し算の音とせゝらぎと 比古
夕涼の所をかへぬ蟲柱 三千女
このあたりしもたやばかり夕涼し ながし
たらくと落ちて噴井の水涼し 桂樹樓
苔むして噴井の清水溢れをり 橙重
三味の音と清水の音や京の庭 章子
蚊柱のをりゝ草に沈みけり としを
日本に歸りて京の初夏の庭 虚子
つくばひの杓横たふや若葉蔭 同
置燈籠包む茂りも高からず 同
病よき心祝ひや若楓 同

螢を庭に放したのは時にとつて興味があつた。

八時半の汽車で神戸に歸り、躑躅居に立ち寄つたが、夫妻共に留守であつたので、其まゝ船に歸つた。としをは一應船まで来て、間もなく歸つた。

六月十三日。(土曜)

早朝六時、まだ寢床に居る時分に、躑躅夫妻が訪ねて来た。

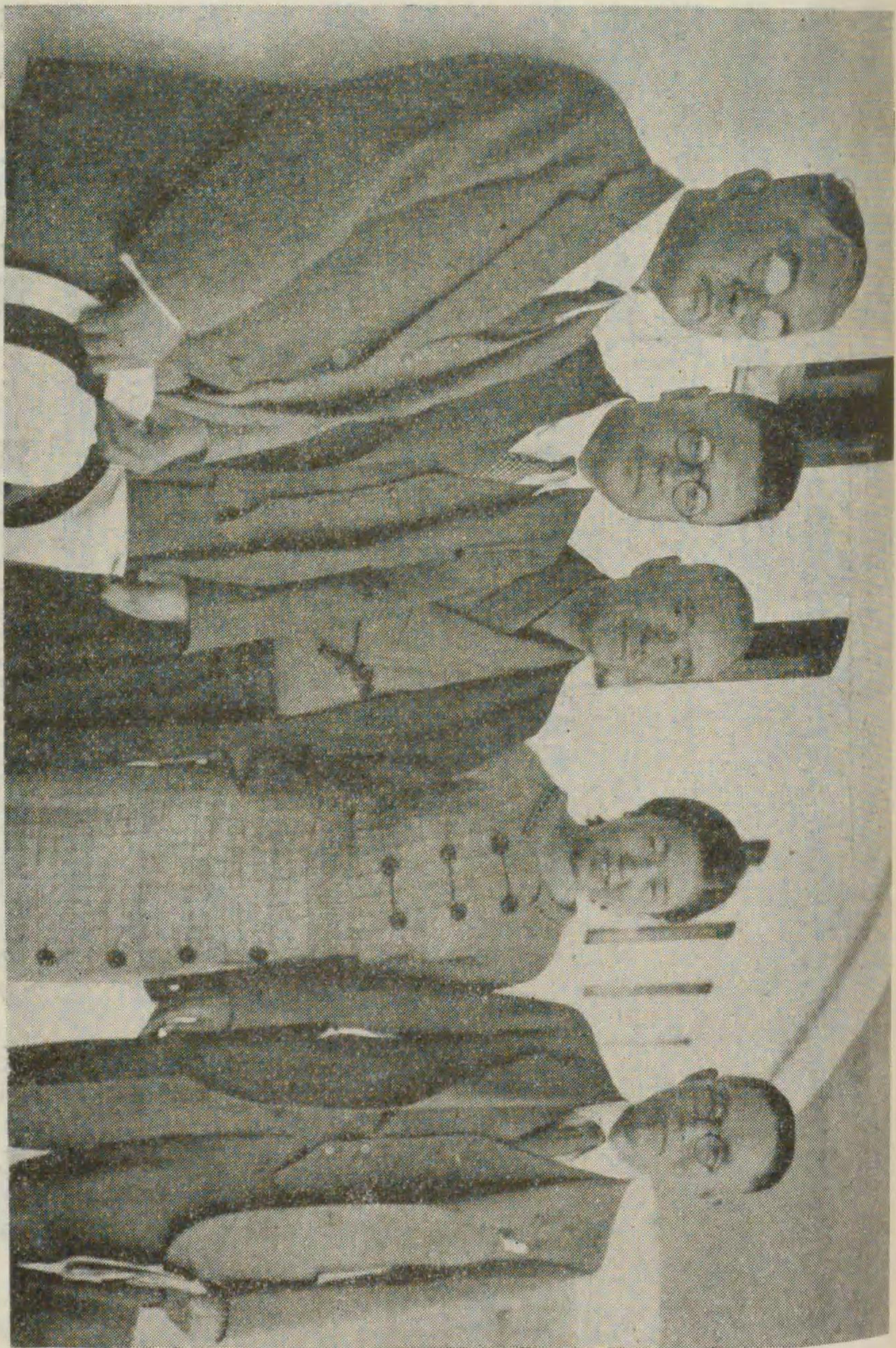
七時抜錨。朝飯を食ひ居る中に、大阪著。

章子、八木女と共に荷物を片づけ始めた。

十一時半頃、大阪毎日新聞の上田長太郎君が迎ひに来た。午後一時のランチで楠窓君と共に上陸。直ちに毎日新聞社に行つた。高石主筆、大竹學藝部長、田村整理副部长、佐藤紅緑、青木月斗、松尾いはほ、皿井旭川、五十嵐播水、西山泊雲、野村泊月、鈴鹿野風呂、日野草城、山本梅史、森川曉水、大橋櫻坡子、本田一杉、村尾公羽、岩木躑躅、阿波野青畝、後藤夜半、上ノ畑楠窓、高濱としを、高濱章子、それに私を加へての茶話會が開かれた。

四時過ぎ、朝日新聞社を訪うた。木村編輯局次長、多賀學藝部長、大道出版編輯部長等と歡談そこを辭して今橋のつるやに行つた。

始めは、四五十人の會合の積りであつたのが、九十四名に増加した爲に、俄に庭に掛け出しの座席を設けるやうな騒ぎをしたと云ふ事であつた。木國君の挨拶、旭川翁の歡迎の辭があつたの



神戸港歸客 甲坂にて——田村木國章子、章子、としを、松尾いはほ

に對し、私は簡単に挨拶をし、續いて楠窓君の私の洋行報告談があり、それから食後、幹事の指名によつて紅緑、いはほ、橙黄子、泊雲、としを等の感想談があつて、九時頃散會した。築港から十時のランチで船に歸つた。木津蕉蔭君が横濱まで同船する事になつた。
十時半寢。

六月十四日。(日曜)

朝食後、社交室で蕉蔭、楠窓兩君と暫く話した。

十時半、池尾ながし君來訪。同君が歸つたのと同じき違ひに、井關末子、田中秋琴女、長橋ふみ子の三夫人來船、十二時のランチで下船、同時に我船も拔錨。

晝飯後一時間餘り熟睡。

章子、八木女と共に荷物片付け。

楠窓君室にて筆記。東京日日「洋行雜記」。

晩食後甲板に出ると、丁度潮岬の燈臺が目の前に大きな光を放つて居るところであつた。續いて紀ノ大島の漁村の火、また大島の東端の檜野崎の燈臺の見えるまで、楠窓、蕉蔭二君と甲板に立ちながら話した。

再び楠窓君室にて筆記。東京日日「洋行雜記」。其所へ荒井君ピカソの畫集、ザツキンの彫刻の寫眞帳を見せに來てくれた。

六月十五日。(月曜)

朝目ざめて見ると早や伊豆の沖を過ぎてゐるやうであつた。

楠窓君室にて揮毫。

荒井君に畫集二冊を返した。

船室に歸つて荷物整理。

午食中横濱港外に錨を下ろす音が聞えた。檢疫があるらしい様子。

食堂を出て來ると多數の新聞記者諸君に迎へられて無理に横濱著港の俳句を作らされた。

美 し き 茂 り の 港 目 の あ た り

朝日新聞社であらうか、私訪問の記事を結びつけた四五羽の傳書鳩を放つのを甲板で見た。間もなく船は港内に入つて第十號岸壁に近づき、漸く人顔が辨じられるやうになつてハンケチ

を振つた。午後二時半著。出迎への諸君は新潟の素十、病茅舎、それに椎花、水竹居、あふひの三長老をはじめ多數に互るから一々こゝには記録しない。社交室でビールの杯を舉げた。税關の検査も事なくすみ、鎌倉に歸つた。時に午後四時四十分。百二十日の旅はこれで終りを告げた。

——以上「ホトトギス」『玉藻』掲載——

渡佛雜記

行つて來よう

——年尾へ——

愈々渡歐する事になつた。兼々一度渡歐して見てはどうかといふ話は、素十君が歸朝した時分からあつたのであるが、さういふ事は容易に起りさうにない事と私自身も考へて、格別問題にしないでゐたのであつたが、今度どういふものだから、行くのならば行けぬことは無いやうな心持が、

諸君の勧誘をきくに付けて、頭の中に起つて来て、其事が今迄とは違つて確實性を帯びて来るやうな心持がだん／＼して来て、終に行く事になつてしまつたのである。たゞ行くといつても、何千里の外に行くといふ考へはまだはつきりと起つてゐないで、唯鎌倉から東京へ毎日通つてゐるその延長のつもりで、十六日の午後三時に横濱を發つて今日の午後五時に神戸に著き、それから今このお前の蘆屋の家に来てゐるやうな次第である。これから四十日の日を船の上でくらすとマルセーユには友次郎が迎へに来てくれてゐて、それから半日を汽車に費して、パリの友次郎の宿にひと先づ落つく事を考へて見ても、やはり鎌倉から東京へ通ふ延長であるやうな感じがするのである。それで又四五十日を歐洲に暮し、それから大西洋、アメリカ大陸を横斷して、太平洋の船に乗り、横濱へ歸著する事を考へても、やはり鎌倉から東京へ通ふ延長のやうな心持がするのである。かくして六月一ぱいには歸朝する。

實際、著の身著のまゝの旅行で、鎌倉から東京通ひの羽織袴をつけたそのまゝの服装である。ただ章子を同伴して何かの面倒を見てもらふ事にしてゐるだけが、些か異つて居ると云つてもよからう。

私の旅行中は、東京でも總て在來の通りに、俳句會其他をやつて行くやうに諸君に希望してゐる。俳句界が總て現在の状態を持續して運行して行く事を希望してゐる。此の年尾への續稿は、一二回むつかしいかもしれないが、併しそれも旅行先よりハガキでも書いて報道する事によつてつなげるかもしれない。僅に四五ヶ月の旅である。四五ヶ月はまた／＼間に過ぎてしまふ。では行つてくるとしよう。(昭和十一年二月十八日夜、蘆屋としを居にて)(翠耶)

旅だより

—立子へ—

手紙を書かう／＼と思ひ乍ら、雜詠の選やら、送迎人の應接やら、又門司を出てからは少々波が荒く、多少の船暈に書く元氣が無かつたり、上海へ著くとすぐ又出迎への人が船に来て上陸するやらで全く書くひまがない。今一寸朝飯をすませたところで、四月號の玉藻の爲にこの手紙を書く。

私も元氣、章子も元氣。

上海に著く。そこは揚子江の支流の黄浦江といふ川を遡つて行つたところで、鷗がとんでゐたが其鷗は羽に黒い斑のあるのが面白かつた。

黒の斑のある鷗とぶ江の春

滙山碼頭といふところに船が横着けになつて、そこで上陸して楊樹浦路といふ川に併行した町を行つて、上海紡績織布場といふところに案内してもらつて工場に働いてゐる支那の女工を見たが一寸哀れを覺えた。それから軍工路といふところをドライブした。そこはもう田舎だが、麥畑があり百姓家が點綴してゐる様は内地と變りが無い。唯畑には大概土饅頭があるだけが違つてゐる。それは墓なのである。中には四角な瓦をふいたものがある。それは三年迄死骸を寢棺に入れてそこに置いておくのださうだ。三年になると其を土饅頭にするのだといふことだ。其軍工路を暫く行くと平野の中に大きな丹碧の建物がある、それが大上海市政府であるさうな。租界といつて各國の人が市街を開いて今の上海の町を作つたのを憤慨して、別に支那の大きな町を租界の外に建造する大計畫を立て、こゝに其町の中心になる大上海市政府を作つたのださうだ。支那人に

は大きなところがある。それから此間の戦争のあつたところを經廻つて見た。天樂寺といふ、寺といつても粗末な古びた建物だが、そこが、日本の第九師團司令部のあつたところだといふことだ。其門前の麥畑のそばに蠶豆が植ゑてあつた。犬ふぐりに似た小さい花が咲いてゐた。

犬ふぐりの花に似し花何ならん

それから江灣鎮といふ小村のところに出た。其前に水が流れてをつて丁度松山で見た鴨川のお焼店のあつたところを連想するやうなところだ。其近傍で、林聯隊長が戦死したのだといふことだ。そんなことを話してをると長くなるから止める。

それから閘北といふところを通つて租界に歸つて來た。そこに上海神社と稱へる日本の神社があつた。支那の建物の中に突として日本の神社を見たのはなつかしかつた。其そばに日本の陸戦隊の兵舎があつた。日本の水兵が通つてゐた、手を舉げて敬意を表し度いやうな心持がした。それから月廻家に行つた。

靖さんは船迄迎へに來てくれて、それから一緒に行動して月廻家に落着いた。

三十分許りで五句を作つて晝飯の御馳走になつた。なか／＼おいしかつた。それから商買股販の十六輔といふところを通つて舊城内といふ、共同租界の出来る前からあつた舊い上海の町の中

にある王一亭といふ人の家をたづねた。有名な畫家であるさうな。七十の品のいゝ老人だ。風采は故人の毎日新聞社長本山彦一氏に似てをる。

梅 水 仙 王 一 亭 の 應 接 間

其子息の王傳燾といふのは早川雪洲に似てゐる。

それから佛國租界を通り、一番賑やかな通り大馬路といふ町を通り、四馬路といふ町で靖さんが帽子を買つてくれた。支那人の著る帽子で、靖さんが被つてをると同じだ。それから又月廼家に戻つた。

この月廼家のあるところは日本人の花街であるさうな。此間焼けたところは外からは判らない。外は全く支那式の練瓦でとり圍まれてゐて、其内部に日本式の家を建てゝゐるので、其新館が焼けたのださうだ。残つたところだけでも七室位あるが、もとは二十二三室あつたのださうだ。其裏のところに靖さんの鼓を教へる稽古所がある。其所を私等の宿所にしようとのことであつて室を温めて用意してあつたが、船にかへつて寝ることにした。これはどこでも其通りにしてをる。それから廣東料理味雅酒樓の招宴に列した。當地俳人の他に短歌を作る人も愛媛縣人も少數列席した。

九時頃から俳句會に臨んだ。章子は支那料理を出てから月廼家の女將、星野夫人、野口夫人に連れられて、グラントシアタアの活動寫眞を見、それからメトロポール（大都會跳舞廳）に行きダンスを見てゐるので、私も十一時半會をすましてそこに行つた。こゝは支那人のみのダンスホールで、印度人が頭に布を巻いて門番をしてをる。支那のダンサーが支那のモダンボーイを擁して踊つてをる。西洋人も二三混つてをる。章子も大内魯水君と二回許り踊つたのに驚いた。聞けばクリスマスで帝國ホテルで二度許り踊つたことがあるのださうだ。船に歸つて寝たのは一時を過ぎてゐた。（五 藻）

梓園の記

東京にゐる時分に上海の「すみれ」會の人々が、私の歡迎プログラムを作つて來たのであつたが、萬事は船が上海に著いた時分に、楠窓君と相談の上で極めて貰ひたい、氣委せの旅のことで